らい・ら・らい

きさらぎ　いち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
らい・ら・らい

【Ｎコード】
Ｎ２７８２Ｏ

【作者名】
きさらぎ　いち

【あらすじ】
恋を叶える奇跡の飴玉、手に入れたばっかりに……
主人公七枝の恋は、百合アリＢＬアリ、おたくアリで
前途多難の支離滅裂。

1

突然現れた神様は、シミひとつないまっさらな白衣を着て、両腕を広げながら言った。

「あなたの願いを三つ、叶えてあげましょう」

七枝は布団の中からもぞもぞと手を伸ばして、枕元の携帯電話を開く。

明るくなった待ち受け画面のデジタル画像の数字が、四時十分を表示している。

カーテンの隙間から見える空は未だ暗くて、夜明けというにすら早すぎた。

――　何よぉ、こんな時間にぃ　――

寝ぼけた頭の中で文句を垂れ流す七枝を無視して、神様は淡々と言葉を続ける。

「この三つの種をさしあげます。一つの種に一つの願い。あなたはただ、願い事を心の中で唱えながら種を飲み込むだけでよい」

『願い事なんて、何ひとつございません』なんて事はない。むしろ在りすぎてその中からいくつかを選べと言われても選びようがないくらいだ。

だけど今は、連続徹夜で勉強に明け暮れた二学期末試験がやっと昨日終ったばかり。何とか埋め尽くした答案用紙に不安はたんまりあるけれど、やるべき事はやりつくした。

書いた答を自己採点するよりも先に、今はただひたすら眠りたい。

そうして晩御飯もそこそこで屍のようにベッドへもぐりこんで十時間近くが経ったのだけど、まだ眠り足りない。

昨日までの睡眠不足で消耗された体力と気力がチャージされている気は全然しない。

こんな状態でわけの分からない怪しい神様なんかに出てこられて『願い事を唱えろ』と言われても、思いつくのはたったひとつ。

――　今すぐ消えて、静かにして、もう一度寝かせて！　――

しかし神様の口は止まること無く延々と続いた。

「願いの種はあなたの中で育ち……」

眉間に皺を寄せて浮かべた、七枝のあからさまな不満の表情を神様が無視するというのなら、こちらも神様の口上を無視するだけのこと。

携帯を枕の向こう側に放り投げて、頭からすっぽり布団をかぶり、両掌で耳を塞ぎながらきつく目を閉じた。

「ただひとつだけ、飲み込む前に……」

神様が最後まで言い終わらないうちに、その声は夜明けを告げる鳥のさえずりに混ざり、やがて消えた。

もう、七枝の耳に神様の声は聞こえてこない。

妙な夢見で中途半端な時間にうっすらと目が覚めてしまった。

何度も布団の中で転がりながら眠りなおしてはみたものの、どうにも目覚めがすっきりとしない。

遠くで携帯のアラームが鳴っているような気はするけれど、頭の中は眠ったまま霞がかったようにぼんやりとして、何も考えられない。

布団から出るのもおっくうで、薄暗い温かさの中で猫のように丸まったままぼうっとしていると、

「七ちゃん！　七時二十分よ！　起きてる？　大丈夫？」

ドアを叩きながらけたたましく叫ぶ母親の声で正気に戻った。

「……遅刻じゃん……！」

冬服は着込むものが多くて苛々する。着替えるのが精一杯で、髪を梳かすのももどかしい。

肩で切り揃えた髪を乱暴に指で整えて、ひったくるように机の上

から鞄を取る。
階段を駆け下りて玄関に直行していると、台所からまた何かを叫んでいる母親の声が聞こえてきた。
だけど靴紐を結ぶのに必死で聞き取れない。もっとも、言っている事は聞かなくても察しがついた。
『ご飯を食べていきなさい』とかいう類に決まっている。だけどこれだけ切羽詰った状態で朝ご飯なんてとんでもない。
「ごめんお母さん、行ってきます！」
乱暴に開けた玄関が、そのままの勢いで激しく閉まる音を背中で聞きながら、七枝は駅に向って駆け出した。
どんなに急いでも十分以上かかっていた駅までの道のりを、自己新記録の八分台で駆け抜けて、一時限に間に合うぎりぎりの電車に飛び乗れた。
――　奇跡だわ　――
額の汗を袖で拭いながらホッとする。これで最低でも遅刻は免れた。
いつもの駅で降り、いつもの通学路を足早に歩きながら七枝は胸を撫で下ろした。
けれどその幸運は校門をくぐり、ゲタ箱で剣道着姿のクラスメイト一崎孝也から声をかけられた瞬間、呪いに変わった。
「珍しいな、三島が予鈴ぎりぎりで来てるなんて」
いっそ潔く遅刻してしまった方が良かった。無碍に切り捨てた朝食を今更のように思い起こして口惜しさが込み上げる。
「寝坊でもしたか？　いっつもおまえ、朝一番じゃん、てくらい早いのにな」
晴れた朝の陽射しがよく似合う爽やかな笑顔を浮かべる一崎に、七枝の片頬がひくひくと引き攣った。
確かに寝坊はした。けれど……
――　やめてぇ、こんな目立つ所であたしに話しかけないでぇ！
――

心の中でめいっぱい叫んでしまっているその声を、表に漏らさないように頬の筋肉に力を込めて
「ええ、少しね」にっことり微笑んでみせる。
控えめな返事に隠された七枝の心情に一崎は全く気付かず、にこにこと頬を緩ませた。
「俺は朝練、今終ったとこなんだ」
『今終ったとこ』は良いけれど、この男はこの格好のままで授業を受けるつもりなんだろうか……七枝がふと不審に思ってちらりと横目で見ると、一崎は察したのか聞かれるまでもなく勝手に説明してくれる。
「やっと期末終ってさ、部活解禁になったじゃん。皆嬉しくって時間経つの忘れちまって稽古してたらさ、ぎりぎりンなっちまって。ンでも遅刻するわけにいかねぇから、一時間目だけ胴衣で受けさせてもらわなきゃな」
――　そんな説明、いらない　――
二人並んで階段を駆け上がり教室に向かいながら、七枝の額に嫌な汗が浮かんだ。
――　要らないから、これ以上あたしに話しかけないで。でもって一緒に教室に行くのもやめてぇ　――
でも自分からスピードを緩める決心もつかない。腕時計の秒針が本鈴へのカウントダウンを刻んでいる。
――スポーツマンなんだから、足速いんだから、あたしなんかに話しかけてないでさっさと教室に入ればいいのに　――
教室はもう目の前。せめて同時に入るのだけは避けたい。……でも遅刻は……数秒の葛藤の末、七枝はぎゅっと目を瞑り覚悟を決めて僅かに歩幅を緩めた。
一崎がすっと一歩前に飛び出る。
と、同時に軽やかなチャイムの音が廊下に流れ始めた。
――　あー……せっかく間に合ったと思ったのに　――
本来なら乗り損ねていただろう電車に間に合った幸運も、全力以

上を出して駅まで走りぬいた努力も、シャボン玉がはじけるように、ふわり、ぱちんと消えてしまった。
がくりと肩を落として足取りも重くなってしまった瞬間、七枝の足元が由香からふわりと浮いて体が軽くなった。
「おい、チャイム始まったぞ、先生来てんぞ！」
それが、先に教室に入ったはずの一崎に勢いよく腕を掴まれて引っ張られたせいだと気付いて七枝は、慌てて腕を振り解いた。
が、もう遅い。二人手を取り合うように教室へ駆け込んだ姿をクラス中に見られてしまった。
チャイムが鳴り終わろうとしている中、二人並んで机に向う。隣同士の席に落ち着いたと同時にチャイムは止んだ。
『ひゅーひゅー』だの『朝っぱらから見せつけてくれるねぇ』だの、ありきたりな野次でざわめく教室を壇上の先生が手を上げて制しながら
「ま、授業に間に合ったのは褒めてやるが、いつまでも仲良くしていないでさっさと教科書を出しなさい」
穏やかに言う。
――　一時限目がこの先生でよかった　――
七枝は思ううらはらで、
――　でも先生、一言余計だわ　――
頬を薄紅に染めてうつむいた。
――　仲良くなんかしてない、仲良くなんか、絶対にしてない――
ふと七枝が隣を見れば、さっきまでの急いだ調子なんてすっかりなくなっている一崎の、涼しい顔で教科書をめくる端整な横顔が目に入った。
と、同時に、前方の席からチラチラとこちらを振り返り、こそこそ手紙を回している少女たちの様子も見えて、七枝は一気に暗い思いに沈められてしまった。
――　なんで、こんなヤツと隣の席なんかになっちゃったんだろ

う　――

二学期の始業式に行われた席替えのクジを今、本気で恨まずにいられない。

市内でも新学校として名高いこの九徳高等学校に入学して、同じクラスになった七枝と一崎だったが、出身中学が別だったこともあって一学期の間はそう親しいわけでもなかった。いや、挨拶すら交わしたこともなかったはずだ。

それが隣の席になった途端、一崎が急激に親密度を深めてきたのだ。

『隣の席だから』で片付けてしまうには、ドガ過ぎるほどの馴れ馴れしさで。

おかげで、それまで教室の中で一・二を争うほど存在感の薄かった七枝は、『一崎の彼女』候補扱いでちょっとした噂の的にされてしまった。

正直に言って七枝の顔は波程度。この学校に入学できたのも人生における七不思議のひとつと言って過言ではない。とりえと言えばせいぜい肌と髪艶のキレイさに自信がある程度だけど、この年頃の少女ならそんなもの当然のように誰でも持っているはずで、自慢になんてなりはしない。

平々凡々を少し下回っているくらいの自覚はある。そんな七枝に……

二百人近く居る一年生の中でも成績は常に上位に入り、どこかで見たような硬派のアイドルっぽいキリリとした顔立ち、性格はざっくばらんでジョークも利いてる。でもって、スポーツマンの一崎。

当然、入学してすぐ学年を問わず女生徒達が色めきたった。

今ではすっかり校内に何人か居るアイドル生徒のひとりだ。

そんな彼だから七枝も隣の席になって話しかけられた最初は

『人気あるクセに鼻にかけない、気さくでいい人だな』

と、好感を持っていたのに。それがまさか。

顔を見れば挨拶だけで終らない。
話しかけられて適当にお茶を濁して逃げようとしても逃げさせてくれない。そもそも隣の席なので逃げる場所すらない。
朝から放課後までこの調子で、弁当ですら隣を理由に並んで食べている有様だ。
べたべたべたとこんなにまでくっつかれることになるとは思ってもいなかった。
――　一体何であたしなんかに　――
そしてそのおかげで、七枝は一崎に好意を寄せる少女たちから辛辣な吊るし上げを喰らった上に、悪目立ちするハメになってしまったのだ。

――　この調子だと、授業が終ったらまた　――
とりあえず授業が終ったらトイレにでも駆け込んで、休み時間を乗り切ろう。
先生が教室を出て行くのとほぼ同時に教室から姿を消せば、彼女達も文句を言うために七枝を探し回るだけで休み時間は終わるはず。
いわれの無い吊るし上げを回避する算段しているうちに、授業は淡々と進む。
七枝がハッと我に返り教科書と黒板を見比べれば、授業は七枝の理解できる範疇から随分先に進んでしまっていた。
それでなくとも決して良いとは言えない頭の出来なのに……慌てて黒板をノートに書き写しながら、改めて今朝からの一見を思い返した。

そうだ。
そもそもの元凶はあの夢だ。

期末試験の地獄から解き放たれて、せっかく気持ちよく眠っていたのを邪魔してくれたあの夢。

あれのやおかげで寝坊してしまって、いつもの電車を乗り過ごした上にこの男を手なんか繋いで教室に駆け込むハメになって、注目の的になったあげく先生にまでからかわれ……しかも、入学以来欠かしたことのない早朝の日課にとうとう黒星をつけてしまった。

――　あの夢！　あの変な夢！　白衣の神様って、なんて胡散臭いの！　――

しかも神様が言ったことといえば『三つのお願い叶えます』

――　何？　そのお伽噺は？　こちとら小学生じゃないってのよ！　――

もっとも昨今は小学生でもそんな話は信じないだろうが。

七枝は再び頭を現実に戻して

――　とにかく、授業が終ったら側溝教室から逃げなきゃ、だわ――

いっそ授業が終らなければいい、とも思ったがそれはそれでもっと困る。休み時間には大事な用があるのだ。

七枝はシャーペンを握り締める手に力を込めながら、教科書に顔を埋めた。

2

「きゃぁあ！　一崎君ってばぁ！」
一時限目終了のチャイムが鳴って、《あの子達》に？まる前に……と、コソコソ教室を抜け出そうとする七枝の耳に、甲高い声が響いて聞こえた。
「やめてぇー、本当にここで着替えるのぉ？」
振り返って見なくても状況が把握できる。
一崎が胴衣を脱ぎ捨てて制服に着替えようとしているのだ。
――　信じらんない、あいつ　――
クラスの三分の一は女子という教室で着替えだなんて。
多分袴の下には短パンを履いているのだろうから問題は無いのかもしれないけど。
――　羞恥心ってものを持ち合わせてないのかしら　――
しかし、羞恥心を持ち合わせていなかったのは一崎だけではなかったらしい。
『きゃぁ』とか『いやぁん』とか、聞こえてくる女の子達の語尾に、ハートマークがついているような気がするのは、決して七枝の気のせいではないはずだ。
聞きなれた甲高い声を背にしながら七枝は、目眩を覚えつつ廊下に出た。
トイレに行くすがらで、隣のクラスのまた隣で足を止めた。開かれたドアにそろそろと近づき中を覗き込む。
……居た！……
七枝の胸がキュンと鳴った。
教室の隅、窓際の一番後ろの席で静かに文庫本を開いている。
ハンサムとはお世辞にも言えない、幼さの残るファニーフェイス。
今時珍しい黒縁のメガネがとてもよく似合っている。
七枝よりは背が高いけれど男子にしては小柄で華奢な、女子の制

服を着せてもきっと違和感なんて感じない少年、名前を

――　谷口、大樹君　――

心の中で呼びかけるようにそっと呟いた。

毎朝片道二十分。同じ電車に乗り合わせ、肩を並べて登校する。

交わす会話はいつも、授業の進み具合だとか、教師別にヤマを張ったテストの問題だとか、そんなものばかりで色気も甘酸っぱさも全くない。

七枝の小さな片思いなんて気付いてもらえないどころか、女の子としても意識されていないだろう。それは七枝本人も充分解っているのだけれど、それでもこの時間は貴重な至福のひとときなのだ。

七枝にとって、彼こそがこの高校に通う理由の全てなのだから。

家から徒歩で通える圏内に受験可能な高校は幾らでもあったし、制服だって九徳の、このまま葬式に参列しても全然違和感の無い地味な色のセーラー服よりももっと可愛い学校はよりどりみどりにあったのに。

電車通学は痴漢に合うかもしれないからと両親に散々反対されたのを押し切って、

『どうせなら可愛い制服の学校に行っておくれ』と泣いて請うシスターコンプレックスの兄を蹴散らして、

『この偏差値では無理無茶無謀やめておけ』と生徒指導の先生から言われ続けながらも、最後半年間のラストスパートで岩をも貫く鉄の意思で猛勉強に励み、不可能をギリギリチョップの合格点で可能に変えてみせ事の出来た、七枝のミラクルの源、谷口大樹。

その彼と毎日過ごす早朝の僅か二十分強こそが七枝にとってこの高校に通う意義の全てだったのに。

――　あの夢のせいで　――

熱心に本を読む横顔を見つめていると、逃がした朝のひとときが

また更に口惜しくなってくる。
トイレに隠れる、という当初の目的も忘れて教室のドアにしがみつくように寄りかかり、谷口の横顔に見惚れていると、背後から突然甲高い声が降り注いできた。
「ねぇ、ちよっとぉ？　三島さん？」
――　ぎくっ　――　七枝の心臓が皮膚も拭くも引き千切り飛び出て、危うく廊下に転がり落ちかけた。
おそるおそる振り返れば、先ほど教室で『一崎くぅ～ん』と騒いでいた少女が、がっしりと腕を組み目尻を吊り上げ、般若の形相で七枝を睨みつけている。
「……水上……さん」
一崎と同じ中学から入学してきた、自称《一崎親衛隊》のボス、水上千穂だ。
艶々とたなびく長い黒髪と、きゅっとひきしまったウェストにヒップ、豊満なバスト。女子も男子も関係なく誰もがハッと息を呑み見惚れてしまうモデル風容貌の持ち主だ。
その端整な顔がコメカミに青い筋を浮かべながら七枝を睨む。
せっかく、あの着替え騒動のおかげで彼女達の気が逸らされて、無事教室から脱出出来たと思っていたのに。
――　世の中って、甘くない　――
七枝は心の中で、今度こそ本当にほろりと涙を零してしまった。
けれどそんな七枝の心境などお構いなしに水上が上段からすっぱり切りつける甲高い声で切り出した。
「あなたねぇ、さっきのぉ、一体どういうつもりぃ？」
「どういうって……」
「とぼけないでよねぇ、一崎君よ！　何よ、仲良く一緒に登校なんかしちゃってぇ。三島さんこの間話し合った時、一崎君の事なんてなんとも思ってないって言ったのにぃ、あれって嘘だったのぉ？」
《話し合った》そんな穏やかなものではなかったと七枝は記憶しているが……いや、それよりももっと強烈に否定しなければいけない

事を言われている。
――　いえいえ、嘘じゃありませんってば。ホントですってば。
一崎君は単なる隣の席のヒトで、それ以上でもそれ以下でもございませんってばー！　――
心の中ではサラサラと言いたい言葉が流れ出るのに、水上の迫力に気圧されて言葉が縮み上がり、口に出る前で引っ込んでしまう。
ぷるぷると首だけを動かして、頭を左右に振るしかできない。まるでマムシに睨まれたハムスターだ。
七枝が何も答えられずにいる事に調子付いたのか、水上の背後でずらりと並ぶ五人ほどの少女達も躍起になって囃し立て始めた。
「本当はぁ一崎君と隣の席になれてラッキーぃ、とかぁ思ってるんでしょぉ」
「ちょっと一崎君に気に入られてるからってぇ、図々しいんじゃないぃ？」
長々と囃し立てられているうちに七枝は、
――　それにしても何でこの人たちって、しゃべる時必ず語尾が延びるんだろう　――
どうでもいいような疑問が沸き立ってしまった。そのおかげか、一瞬脳内を冷静に戻してくれた。
――　ちょっと待ってぇ！　こんな所でそんな話、しないでぇ！
――
慌てて教室の中を覗くと、案の定この騒ぎは注目を浴び始めていた。中の生徒たちが一斉に七枝達へ視線を集中させている。
――　谷……谷口君は……？　――
けれどクラス中が一点に注目している中、谷口一人だけがまるっきり気が付いていない様子で、熱心に本を読み耽っていた。
――　気が付いてない　――
七枝は落ち着きを取り戻しながら、軽く安堵の息を吐いた。
「ね？　他のクラスのドアの前なんて、邪魔になるから場所を変えた方が……」

勇気を振り絞り、掌に汗をかきながら水上に立ち向かうべく七枝は意見を申し出たが、最後までそれを言わせることなくあっさりと無視された。彼女達には七枝の気持ちも、他の生徒の迷惑もとりあえず二の次なのだ。

「三島さんさぁ、ちょっと生意気なのよねぇ」

「一崎君にぃ、ちょっと気に入ってもらってると思ってぇ、ねぇ」

――　あぁ！　もうやめてぇ！　――

今はまだ本に集中しているが、これ以上騒ぎが大きくなれば谷口だって気付かないわけがない。

不条理な吊るし上げをくらっていることよりも、谷口に聞かれそうなこの場所でこんな大声で一崎との関係を疑うような話を延々と続けられることに、焦りを通り超して怒りを覚え始めたころ、救世主は現れた。

スピーカーを通して流れる軽やかなチャイムの音。

「おーい、お前ら、予鈴鳴ったぞ」

離れた教室の窓から顔を陀して、騒ぎの元凶一崎が声をかける。

「いやぁん、先生まだ来ないわよねぇ。ありがとぉ一崎くぅん」

語尾にハートマークを取り戻した甲高い声で彼女達は一斉に教室に……いや、一崎に向って駆け出した。

――　助かった　――

水上達が教室に消えていったのを確認すると一気に気が抜けてしまい、そのままこの場所にへたりこんでしまいたいのを何とか堪えながらヨロヨロと自分も教室に向って歩き始めた。

――　まったく、今日は散々だったわ　――

あの散々だった休み時間から、七枝は授業終了のチャイムと同時に教室を飛び出して、一崎親衛隊の少女達から逃げ惑う事の繰り返しで一日を終えた。

図書館に、裏庭に、体育倉庫に……授業中にも次の休み時間はどこに姿を隠すかと算段するばかりで、内容はちっとも頭に入ってこなかった。
しかも。
――　こいつら、どーしてくれよう　――
帰りの電車の中、抱え込んだ鞄がやたらと重く感じるのは、詰め込まれた教科書とノートのせいばかりでは無い。
まったく頭に入ってこない授業の合間合間に返されてきた、期末テストの答案用紙。これを両親が見ればまた、懇々と言われるに違いない。
『だから七ちゃんに九徳は難しいんじゃない？　って言ったでしょう。せっかく合格しても授業についていけないんじゃ本末転倒でしょう？』
一学期の中間・期末、そして二学期の中間テストでも散々言われた。今回も絶対に言われる。
『自分のレベルに合った学校が近所に幾らでも在るんだから、通学に時間をかけるくらいなら近くの高校に入りなおして、その時間を復習にでも充てるべきなんじゃない？』
それを七枝は
『次のテストでは絶対にもっといい点取るから。このまま九徳に通わせてよ』
と、約束したのに。
そして勉強だって頑張ったのに。
結果は今までと大差ない点数と、同じく下から数えた方が早い順位だった。
――　これは……　七枝はごくりと生唾を飲み込んだ。これは、両親が最初から望んでいた高校の編入試験を、今度こそ受けさせられるかも。
せっかく谷口と同じ学校に通いながら、新密度だってアップしてきたのに。

肩をがっくりと落として思い息を吐きながら家に帰れば、予想通りの反応が待っていた。
重いセーラー服を脱いで軽いシャツとジーンズに着替えてリビングに下りれば、待っていましたとばかりにそれは始まった。
「ねぇ、やっぱり学校辛いんじゃない？」
七枝は返事のしようも無く、黙って母親の隣に並び座る。
「朝だって、近所の高校に通えばもっとゆっくりできるのに。電車通学止めれば定期代分お小遣いだって増やしてあげられるのよ？」
「……うん……」
「お友達だって、九徳じゃ中学から知ってる子も全然居ないみたいだし、寂しいんじゃない？」
――　うっ　――　七枝は息を呑んだ。
『お友達』と言われれば、母親にはとても言える話ではないが、正直言って中学の頃も居るのか居ないのか分からないくらいに少なかった。とはいえ、『だから寂しくなんかないよ』とは言えない。そんな事は心配の種を増やすだけだ。
しかし無常にも、言葉を失って返事に困ってしまった七枝に母親は更に畳み掛ける。
「お父さんも私も、七ちゃんが無理してるのを見るのは辛いのよ。自分のレベルに合った所で、もっと気楽に高校生活を楽しんで欲しいの」
母親が喋る間に七枝は深呼吸を何度も繰り返しながら、やっと吐き出した。
「でも、あたしここがいいの。今回だって赤点は取ってないもん。追試だって受けなくていいし」
赤点も追試もギリギリで逃れたのだけど。
「でも、ねぇ……」
誰がどう見てもこの答案用紙は七枝の苦悩を正直に反映している。
そもそもこの程度の試験で赤点だの追試だのが必要な点を取る生徒など、この学校には居ないのだ。

「そりゃぁ、七ちゃんがこの学校にこだわりたい訳はお母さん解るけど……」

七枝の胸がギクリと逸った。もしかして、谷口の存在がバレている？　一緒の高校に通いたいという恋心の一心で受験したのがバレたか？

3

「蓮君の母校だもの。七ちゃんが憧れる気持ちは解るけど」
突然に兄、蓮の名前が出て七枝は一瞬訳が解らなくなった。――
何で、お兄ちゃん？　――
「七ちゃんお兄ちゃんっ子だものね。でも七ちゃんと蓮君とでは違うんだから何も高校まで無理して真似することないのよ」
ここでやっと、母親が勘違いしている事に気が付いて七枝はホッと胸を撫で下ろした。
けれど安堵する七枝の隣で母親は更に口早になる。
「解ってる？　お父さんだって心配してるのよ？」
「このまま勉強についていけない進学校に通っててても、授業が進むほど七ちゃんが苦しくなっていくだけなのよ？」
「いい学校に通ったからって幸せになれるとは限らないのよ？」
しかし九徳を受験すると告白して以来うんざりするほど繰り返し聞かされたおかげで、いちいち返事をする気にもなれない。
「ねぇ、七ちゃん？　何度も言うようだけどお母さん達、七ちゃんに特別凄い人になって欲しいとか、玉の輿になって欲しいとか、これっぽっちも思ってないのよ？　普通に幸せなお嬢さんでいてくれれば、それが一番嬉しいのよ」
普通に、を連呼する母だが、若かりし頃には看護師を勤め師長にまで昇りつめ、同じ病院で外科医を勤めていた父親と結婚した彼女にそれを言われてもまったく説得力がない。しかしすっかり口を閉ざしてしまった七枝が自分の話を聞いているものと思い込んで彼女の口は更に滑らかになっていった。
「ほら、中学の隣に在る梢女子だったらちょうどいいレベルでしょう。あそこに勤めてるお父さんのお友達が編入試験の口を利いてくれるそうよ」
お嬢様の園、私立短大付属高校の名前が挙がる。

「ね、そうしましょうよ。今からでも遅くないわ」
『ね？』と嬉しそうに薦めてくる母親の言葉を、七枝は冷めてしまった紅茶のカップをもう一度温めなおすかのように掌で包み込みながら首を横に振って流した。
頑なに拒否を続ける娘の態度を見て、もう何十回目かも覚えていない溜息を吐き出しながら
「……しょうがないわね……」呟いた。そして答案用紙を七枝の手に返しながら、さらりと話を変えた。
「とりあえずこの成績のことは蓮君に相談しましょうか。あれでも成績だけは優秀だったもの。今夜帰ってくるって連絡があったから、晩御飯の後にでも……」
今回もようやく諦めてくれた……ホッと胸を撫で下ろしながら冷たいカップの縁に唇を当てた七枝だったが、最後の方の言葉を聞いて口に含んだ紅茶を危うく吐き出しそうになってしまった。
「お兄ちゃんには言わなくていいから！」
「でも蓮君、勉強教えるの上手いわよ。あの子が家庭教師した生徒さん、皆希望校にストレートで合格してたもの」
我ながらいい意見だわ、と掌をぽんと叩いて語る母親に、七枝は激しく首を横に振った。
「勉強教えるだけならいいけど！　あのお兄ちゃんがそれだけで済むわけないじゃない！」
『あの』の部分に力を込めて叫んだ。
母親も七枝の言いたいことを瞬きひとつで理解して、「そうね……」視線を斜め下に落としながら呟いた。
「とにかく、今回間違えた所はちゃんと今度の日曜に友達が見てくれる事になってるから、解らないままになんて絶対しないから、もう心配しないで」
「あら、日曜日？　もしかして受験の時のオ友達？　あの勉強会続いてたの？」
「テストの前後だけ、ね……」

咄嗟に言ってしまったが、実はそんな約束なんてしていない。七枝は続く言葉をしどろもどろさせながら視線を宙に彷徨わせた。
「対策と……ヤマ張りと、間違えた所の復習。だから勉強のことは心配しないで……」
約束は交わしていないにしても、どうせ明日の朝、電車で会えばこの期末テストの話題になる。そうすれば優しい谷口君のことだから自分の勉強時間を割いて日曜の数時間付き合ってくれることは間違いない。事実、入学してからのテストの前後も気前良く付き合ってくれたのだ。
しかし実際にはそんな約束、まだ七枝の予測の内側でしかないのだから、これ以上話が長引いてボロが出ないうちに、とソファを蹴り飛ばす勢いで立ち上がり、リビングを後にした。
が、一度出たドアを叩きつけるように開きながら、また戻ってきた。額にうっすらと汗まで浮かべて。
うっかり聞き逃してしまったけれど、ものすごく大事なことを耳にしたような気がする。
「ね、お母さん今何て言った？」
「日曜の勉強会、まだ続いてたの？　って」
「その前！」
「蓮君に教えてもらったら、て」
「その後！」
わざとはぐらかしているんじゃないかと思わずにいられない。七枝は苛立ちながらついつい叫んでしまっていた。
そんなに大声を出さなくても……眉間に皺を寄せながら、やっと母親は七枝の欲しかった答えに辿り着いた。
「蓮君、今夜帰ってくるって」
「今夜？　帰ってくるの？」
「ええ。七ちゃんに何か渡したいものが出来たからって」
医大を卒業したくせに、親の期待も何のその民間の会社に就職してしまった挙句、家から充分通える距離であるにも関わらず一昨

年突然一人暮らしを始めてしまった年の離れた兄。当初は『彼女でもできたのだろう』と家族で憶測したものだが、事あるごとに『七枝へ』と豪勢なお土産を抱えて帰ってくる姿は、とても彼女のいる男性の雰囲気ではない。むしろ元々重度のシスコンだったのに拍車がかかったと誰もが思った。

その兄、蓮が帰ってくる。

「こんな格好してる場合じゃないじゃない！」

階段を踏み外しかねない勢いで七枝は自分の部屋に描け戻った。あわや扉が壊れかねない激しさでクローゼットを開ける。その中には、今七枝が着ている服とは比べ物にならない、ファッション雑誌の中身をそのまま並べたかのような服がずらりと並ぶ。

一目見て、『あ、高そう』と頭の中でざっと弾き出す金額に、もう一桁０をつける必要があるだろう、一介の女子高生が持つには高級すぎるブランド品ばかりだ。

手触りの良い布地の海を掻き分けながら七枝は今の季節に良さそうな一枚を探す。

「これ……がいいかな。クリスマス前だし、ちょっと華やかな方がいいかな」

襟元と袖口にピンクのリボンがついた白いニットの可愛らしいワンピースを選んで、ベッドに放り投げると、今着ている服を荒々しく剥ぎ取るように脱ぎ捨てた。

「やぁ七枝！　元気だったかい？」

玄関を開けて、開口一番の挨拶はいつだって『ただいま』ではない。

ドアホンが鳴って出迎えた母親に『これ、デザートにして』と手土産を渡すと、母の後ろでちょこんと立っている妹へまっしぐらに突進する。

「あ、去年買ったワンピ着てくれているんだね。七枝にはやっぱりピンクが似合うね。でも夏に買った空色のワンピースもすごく可愛かったよ！　七枝は本当に何を着せても似合うから選び甲斐があって嬉しいよ」
先ほどまでの母親の早口な苦言なんて比べ物にならない。
口を挟む隙も与えないで喋り捲りながら蓮は、七枝の肩を抱いて勝手知ったる家の中、リビングへと進んでいく。
純白の白衣をひるがえしながら。
純白の……七枝の脳裏が妙な既視感で震えた。
「お兄ちゃん！」
白衣の胸倉を掴み、引っ張りながら叫ぶ。
思い出してしまったのは、今朝見た夢の神様。
何で？　どうして？
そもそも、この寒空の下を歩いて来るのに、何で白衣？
夢で見た神様の顔はもうすっかり忘れてしまっていたけれど、もしかして自分は予知夢でも視てしまったのかと七枝が混乱していると、
「蓮君、上着はどうしたの？」
代弁するかのように母親がさらりと訊ねてくれた。
「あぁこれ。いやぁ研究に夢中になってしまって。考え事しながら仕事終わらせたら、うっかりこのまま会社を出てしまって。ジャケットはロッカーに入ったままだし、でも脱ぐと寒いでしょう？」
朗らかに笑いながら答える。会社に戻って着替えるという選択肢はなかったのだろう。
――　白衣のまま歩き回るのも充分寒いでしょうに　――
――　いや、それよりも白衣で街中を歩き回るのって、変じゃない？　――
母も七枝も同じ事を思ったが、蓮にはこの格好のまま電車に乗ることへの躊躇いは無かったらしい。寒さよりも体裁よりも、久しぶりに会う妹のことばかり考えて、早く会いたいと急く思いが先立っ

たに違いない。
七枝と母親の心配など、どこ吹く風よと気にも留めず、ソファに座りながら蓮は妹の髪を撫でながら嬉しそうに言葉を続けた。
「今年のクリスマスプレゼントは、高校生になったことだし、もう少し大人っぽい服がいいかな。リクエストは何かあるかい？
「や、服は……もういいから……」
「アクセサリーでも新しいゲームでも、欲しい物があったら何でも言っていいんだよ」
髪に触れていた指を七枝の頬に滑らせながら、蓮は目を潤ませながら笑んだ。
「髪もサラサラできれいだし、眼もにごってないし肌の状態もとてもいいね。僕のサプリメント、ちゃんと飲んでくれてるんだね。嬉しいよ」
蓮の言葉の隙間を探して返事をしようとするが、七枝の声はまったく届いていないようだ。途方に暮れ始める七枝の気持ちを察したのか、
「そういえば蓮君、七ちゃんに渡すものがあるって言ってなかった？」
母親が呆れながら強引に話を繋いだ。
「そうそう！」
蓮は鞄の中から小瓶をふたつ取り出し、こっちは母さんに、こっちが七枝の、と手渡す。
「今までのサプリにデトックス効果のある生薬を配合したんだ。肝機能を良くして……」
元看護師の母には理解できるのか、「へぇ」「ふぅん」と相槌を打ちながら聞いている。けれど七枝にはさっぱり解らない。
――　とりあえずこのカプセルに新しい効果が加わったってことね　――
それだけ理解できればもういいや、と、食事が始まっても延々と続く説明を右から左へと聞き流す。相反して真面目に聞いていた母

親もいい加減うんざりしてきたのだろう、食器を片付けながらさっくりと話を変えた。
「蓮君、今夜はうちに泊まっていくんでしょう？」
月に二～三度は顔を出す息子だが、父親とは会うタイミングが噛み合わなくて滅多に顔を合わせることがない。できれば都合をつけて久々に父子で一杯やってくれれば、と気を回す。
「明日はここから出勤すればいいでしょう」
蓮がこの家を出て三年以上になるが、部屋は学生だった当時のまま残されていて、着替えにも寝るにも困らない。「そうだね」と答えながら連は、先に食事を終らせてさっさとダイニングから姿を消した七枝を妹を追うべく席を立った。
「父さんが帰ってきたら教えてよ。久しぶりに秘蔵のウィスキー飲ませてもらうからさ」

いつもなら、食後はそのままリビングのソファに転がってテレビを観ている七枝が、珍しく言葉少なに部屋へ戻ってしまったのは、母親が料理を作っている最中に『後で大事な話があるから』と蓮に耳打ちされたからだった。
――　あらたまって、何の話よ　――
また妙なことを言い出さなければいいけど……部屋で一人、ベッドに腰掛けて兄を待ちながら七枝は、思わず祈るように両掌を組んだ。

4

「お待たせ、七枝」
両手に食後の紅茶を持って現れた蓮は、相変わらず白衣のままだった。
――　そういえば晩御飯の最中も脱がなかったわね、アレ　――
本人は『うっかり』と言っていたが、実は何か意味でもあるんじゃなかろうか……勘繰りながら七枝の脳裏に、あの夢がぼんやりと蘇る。
あれは、今日の不幸の根源だった。
あの夢のせいで貴重な朝の逢瀬をふいにされた。
遅刻ぎりぎりで登校したせいで一崎と一緒に教室へ駆け込むハメになって、また更に彼との関係を疑われて水上たちに煩く追及された。
たとえあの神様が再び現れ、三つどころか無限に願いを叶えてくれると言ったとしても、割に合わない。許してやれる気には到底なれない。いいや、――　許してなんかやるもんか　――
胸の中で悪夢を反芻しながら神様に悪態をついている七枝の隣に、蓮はぽすんと腰掛けてティーカップを差し出した。
「七枝はもう、彼氏は出来たのか？」
「はぁ？」
カップを持つ七枝の手が固まった。
相変わらず何の前置きも無く唐突に話の口火を切る人だ。
「せっかく高校生になったのに、夏に会った時も全然それらしい話を聞かなかったからさ。お兄ちゃん心配になってたんだよ」
「心配って……」
「でも二学期に入ってから体育祭とか文化祭とかチャンスはあっただろう？」
心配というなら二十七にもなって未だに浮いた話のひとつも出て

こない蓮の方が心配だろう。というか、以前からその傾向はあったのだが、なぜこの兄は妹の恋愛にこんなに終着するのだろう。
思案に揺れながら七枝は返す言葉を失った。
それに、返事をしようにも、体育祭も文化祭も一崎と親衛隊たちから逃げ回った挙句、そのせいですっかり悪目立ちしてしまった忌まわしい思い出しかない。
高校生活は静かに穏やかに、谷口を想いながら過ごしたいと一学期の間ひっそりと過ごしてきた日々は、あの二つの行事で全て水の泡となって消えた。
けれどそんな一件を知らない蓮は、泥沼の高校受験を乗り越えて迎えたはずの夢と希望に花咲く頃なのに、半年以上経っても全く恋の話が聞こえてこない妹を案じているのだ。
「あと二週間もすればクリスマスだろう。七枝みたいな可愛い子が独りでクリスマスを過ごすなんてわけ、ないよな？」
「お兄ちゃん、あたし、まだ十五歳だから……」
恋人と二人でしっぽりメリークリスマスする高校一年生なんて、漫画やドラマの中でもそうそうお目にかかれない。大抵は家族や友達と過ごす方が大多数で、普通のはずだ。……と、七枝は常識として思っていた。
けれど蓮は七枝の返事に頭を抱えて唸っている。
「まさか七枝がモテないなんてこと無いよな？　こんなに可愛いのに！」
蓮を見ていると、自分の方が常識だと思っていた気持ちが揺らいで、自信がなくなってくる。
――　そりゃ、あたしだってまったく憧れていないわけじゃないわよ　――
胸の隅にちらりと谷口の優しげな笑顔が浮かんだ。けれど、彼氏彼女になって二人きりでクリスマスだなんてまだ早い……と、どうすればこの兄に伝わるのだろう。
七枝は頭の中で、持てる限りのボギャブラリーを総動員して考え

る。しかし、この兄はその時間する与える隙も無く口を動かしていた。
そして、
「でも七枝はシャイな所があるから、好きな相手がいても自分からアプローチなんて出来ないのかな、そうなんだね、七枝」
この結論に到達する経路が、今ひとつ七枝には理解できない。けれど蓮は自分の弾き出した答えに『うんうん』と納得しながら白衣のポケットをまさぐった。
そして、この為にこの答えを導いたのだと言わんばかりに、ひとつの包みを取り出して言った。
「でもこれがそんな問題解決してくれるからね」
半透明のラッピングバッグに、三つの小さな袋が入っている。
「……飴？」
「そう。でもタダの飴じゃないんだよ」
この兄が持ち出すくらいだ。タダの飴でないだろうことは容易く想像がつく。
しかも、《三つ》という数字があの夢と符合していて怪しさ満点だ。
――　今度は一体何を　――
できば普通に常識の範疇の代物でありますように　――　祈るように、続く説明を聞いていたけれど、
「この飴はね、魔法の飴なんだよ」
――　魔法　――
七枝の不安は的中してしまった。
あの夢はやっぱり予知夢だったのだ。思い切り不吉な方での。今日一日のトラブルの連続はこれから始まるのかもしれない不幸の幕開けにすぎなかったのだ。
ガラガラと音を立てて七枝の心は奈落の底へと崩れていった。
しかし蓮は妹の心情に気付かないまま、得々と説明を続ける。
「これはね、食べた相手はとにかく問答無用で食べさせた人間を好

きになるという、恋を叶えてくれる奇跡の飴なんだよ」
また、突拍子もないことを言い出した……七枝の掌の中にある紅茶の表面が溜息でふわりと波立った。
「食べる前に、包装している袋ごと三十分間掌で包むんだ。そうするとビニールの小さな穴から……あ、眼には見えない穴なんだけどね、握り締めている人の汗に含まれているフェロモンが移って、食べた人の神経がそれに反応するんだ」
蓮ががさがさと揺らすラッピングバッグの中をよく見れば、飴はひとつひとつ桜色のセロハンで包装された上に透明のビニールで包まれている。
「このラッピングバッグが余分なフェロモンを吸収させないように保護するから、誰かに食べさせる三十分前に取り出して握り締めるんだ。一度吸収されたフェロモンは消えることはないから、その後で違う人が握り締めても上書きされることはないからね。ただ、相手が七枝を好きになる効果は二週間くらいしか続かないから、効いている間に七枝の頑張りが必用になってくるからね」
具体的な説明を淡々と進める声を聞きながら、こんな妙なことばかり言う兄だが一応は研究者なのだ……と感心もする。と、同時に、そんな蓮の水走るような口調に、『恋を叶える』だなんて、そんなもの要らないから、と口を挟む隙間も無くて目眩がしてきた。
それでなくとも『魔法の』の辺りから七枝は途方に暮れてしまって、呆然と聞きながら何度も意識を失いそうになるのを、どうにか堪えているというのに。
ぼんやりとしていると、急に掌が暖かくなって七枝はびくりと身構えてしまった。
蓮がいきなり手を握り締めてきたのだ。
七枝の掌に飴の入った袋を押し付けながら
「頑張って、素敵な恋をして、この世で一番幸せな花嫁姿をお兄ちゃんに見せておくれ」
袋を掴まされた両掌を包み込むように優しく握り締められながら

言われれば、『要らない』と棄て言うことも出来ずに七枝は頬を引き攣らせながら、あやふやな微笑みを浮かべて、
「……ありがと……」
一言だけ、虚ろに返した。

恋を叶える魔法の飴。
三十分だけ握り締めて相手に食べさせる。たったそれだけ。
七枝は《魔法の飴》を制服のポケットにひそませて登校のプラットホームに立っていた。
隣には、待ち合わせていたわけではないけれどいつも同じ電車に乗って通学する谷口が、ほんのりと笑顔を浮かばせながら並んでいる。そして
『昨日はこの時間に乗ってなかったね』
とは、言わない。
昨日の一崎絡みの一連はできれば谷口には知られたくない。そう思っていたはずの七枝だったが、全く聞かれもしないとなると逆に寂しくなってしまう。
せめて、昨日同じ電車に乗らなかった理由くらい聞いてほしかった。勿論聞かれても本当のことなんて答えようがないのだけど。
けれど谷口にとっては、この半年間毎朝一緒に登校していても、昨日の朝一緒になれなかったことを気にかけてもらえるような存在ではないのだった。
同じ中学からの唯一の同窓生で、半年間受験勉強を共に頑張ってきた……主に七枝が教わるばかりだったとしても……谷口にとって七枝のスタンスは所詮その程度のものなのだと改めて思い知らされて、キュンと寂しさを胸の中で握り締めた。
ガタンガタンと重い音を響かせてホームに電車が滑り込んでくる。
いつだって谷口は七枝を先に乗せて、自分は半歩後から入ってく

る。これが混雑する時間帯なら的外れなレディーファーストになるところだけど、混んでくる時間を避けて朝早い電車を選んでいるおかげで、この何気ない行動が紳士的に見えて七枝は毎朝生れ変わった想いで恋をする。

――　今日も谷口君、優しい　――

席は空いているというのに、何とはなしに座るでもなく二人並んで吊革に？まり揺られながら、窓の向こうで流れる雲をぼんやりと眺めていると、不意に谷口が他愛の無い笑顔で聞いてきた。

「そういえば期末テスト、どうだった？」

「え？」

「昨日返ってきたでしょう？」

「ん……あんまり……」

「見せて？」

答え淀んでいる七枝に、谷口は容赦なく言い放った。

「持ってきてるんでしょう？」

勿論、今日テストの結果が話題になるだろう事は予測できていたし、自分の口で『どこをどう間違えた』と説明するより見せた方が早いとも解っているので、散々な答案用紙はちゃんと鞄の中に忍ばせてある。

七枝はちらりと周囲を見渡した。

同じ車両にパラパラと乗り合わせているサラリーマンは、携帯画面に釘付けになっているか、うたた寝をするので一生懸命で高校生の答案用紙を覗き見するような余裕は無さそうだ。七枝は意を決して、鞄から数枚の紙切れを取り出した。

谷口はそれを受け取ると躊躇いもなく開いて上から下までざっと見た。そして、

「やっぱり数学と物理、少し弱いね。日本史と……他はまぁまぁかな」

『少し』だとか『まぁまぁ』だなんて言えるレベルの物では断じて無いだろうに、七枝を傷付けない言い回しを選んでくれているの

だと思うと、ホロリと涙が零れそうになってしまった。
谷口は用紙を丁寧に折りたたみ、七枝に返しながら
「今度の日曜に間違えた所の復習やろうか？　日曜……空いてるかな？」
勿論！　七枝の顔がぱぁっと明るくなる。勿論否と言うわけがない。けれど逸る思いを抑えてゆっくりと口を開いた。
「谷口君はいいの？」
「日曜は塾無いからね。午前と午後どっちにしようか」
「谷口君の都合のいい方でいいよ。私も何の予定もないし」
「じゃ、午前中にしようか。図書館開いてすぐなら空いてる席も余裕で取れるし」
「うん。いつもありがとう……谷口君も自分の勉強があるのに、ごめんね」
「そんなことないよ。三島さんと勉強するの、僕にも復習になるし」
冷静に考えれば同じ学校に通う一年生同士で『復習になる』というのは失礼な言い様なのだろうけれど、そんなこと今の七枝には関係ない。ハレルヤ！　日曜日は谷口君とデートだ！　昨日の悪夢よさようなら！　失礼どころか有頂天の彼方目指して羽の広がる勢いだ。
が、一転して谷口の声のトーンが変わった。
「ところで三島さんに聞きたいことがあるんだけど」
「え？　何？」
これがいつもの谷口の声なら、聞いて聞いて！　何でも聞いて！
有頂天の彼方目指して羽も広がる状況なのだが。急に変わってしまった口調に不安が過ぎる。
そして次の言葉で、七枝は羽を？がれて奈落の底に突き落とされた。
「三島さん、同じクラスの一崎と付き合ってるって、本当？」

5

瞬間、意識を失いかけた。
――　待って！　今ここで倒れるわけにはいかない！　――
小刻みに震える手に力を込めて吊革を握りなおす。
「何でそんな？」
「ちょっと小耳に挟んだから」
――　！　昨日の悪夢！　――
谷口に気付かれないように、そっと深く深呼吸を繰り返し、動転して跳ねる鼓動を無理矢理押さえ込んだ。
「付き合ってなんかないよ。一崎君とは隣の席だから、話しすることは多いけど……一崎君、人気あるからそれだけで派手に騒ぐ人がいるのよ」
「そうなの？」
改めて訊ねなおす、谷口の覗き込むような視線が痛い。
「そうよ。私、あぁいう派手な人はちょっと……タイプじゃないし……」
「ふぅん。てっきり付き合ってるのかと思ったけど」
「そんなこと！　一崎君だって人気者だし、あたしみたいな何の取り柄も無い地味な人間タイプなわけないじゃない！」
自分で言って悲しくなるが、地味なのは事実なのでしょうがない。と、思っていたら谷口がまさかのフォローを入れてくれた。
「地味だなんて。そんなことないよ、三島さんは可愛いから」
「え？」
「中学の時だって男子にモテてたでしょう？　僕のクラスでも『三島さん』て騒いでる奴が居たよ？　二年生の時だったかな」
七枝は言葉を失った。自分が谷口を意識し始めたのは、三年生になってからだった。けれど彼は七枝のことを、それ以前から知っていてくれたのだ。

嬉しい。けれど――
七枝にとって《あの頃》の記憶は……
「ごめん、谷口君。それ、あたしにとって鬼門だから……」
触れられたくない。七枝は視線を足元に落として眼を伏せた。谷口もなんとはなしに雰囲気を察したのか、口を噤んだ。
そしてしばらく沈黙しあった後、ふっと軽く息を吐き、窓の外を眺めながら谷口は零した。
「付き合ってないなら、いいんだ」
とてもとても小さな声だったので、ともすれば聞き逃しそうな呟きだったが、七枝はそれをしっかり聞いた。
――どういう意味！――
それは解らない。けれど何だか、……何だか……明るく沸き立つ予感に、七枝の頬がほんわかと染まった。
決定打ではない。けれど。
――ごめんねお兄ちゃん！　やっぱりこの飴要らないわ！――
元より谷口に食べさせるつもりは毛頭なかった。蓮の研究の成果が、怪しいもので無いはずが無い。
そんなものを谷口に食べさせるだなんてとんでもない話だ。だから今日持ってきたのは、むしろ棄て場所を探すためだった。
家で棄てれば母親の目に触れるだろうし、食べ物を棄てたことで何かしら追求される可能性もあって面倒くさい。棄てるなら外しかない。
谷口と並んで校門をくぐり、ゲタ箱で別れてからずっと、七枝は浮かれ気分で飴の捨て場所を考えていた。校内のゴミ箱でもいいけれど、帰りの駅でも構わない。
そんな七枝の背後に、気配も立てずに一崎が忍び寄った。
「浮かれてるなぁ、三島。何かいいことでもあったか？」
――足音！　今足音しなかった！――
「一崎君……急に声かけないで……」
「そんなにびっくりするかぁ？　脅かし甲斐あって面白いな」

一崎が悪戯っぽく笑う。七枝は脅かされた心臓のバクバクが収まらない。おまけに、
――　だからぁ！　廊下で話しかけないでよ！　――
また誰かに見られたらからかわれたり、詰問されたりのネタになる。嫌な予感で、跳ねる鼓動に拍車がかかる。
そして今日も一崎親衛隊から逃げ回る一日が始まってしまった。

「最初からこうしてれば良かったんだわ」
人の気配の全くないベランダで、学校から少し離れた丘陵に展開する新興住宅街を眺めながら、七枝は弁当の包みを広げた。
冬とはいえ暖冬と午後の陽射しのおかげでカーディガンを羽織っていれば酷く寒いわけでもない。
「だいたい、一番の問題はお昼休みだったんだから」
授業と授業の間の休み時間なら短くて、次の授業の準備や予習に思いのほか時間がかかる。そのおかげで水上たちも充分に七枝を相手することも出来ないし、何より彼女たちは七枝を一崎から一秒でも多く引き離して彼に接近することに執着するのだから、後は七枝が上手く教室から抜け出すか、気付かれないように気配を殺して静かにしていれば、そう大きな揉め事には発展しないで済む。
しかし昼休みは、一崎が隣の席を理由に七枝と席を並べて弁当を食べようとするし、当然それが気に食わない水上たちも加わってきて、毎回散々な騒ぎになって落ち着いて食べるどころではなかった。
挙句に、食べ終わるやいなや親衛隊の誰それから引っ張られるように連れ出されて、文句をつけられたり一崎を本当はどう思っているかなどとの詰問が始まる。
――　そもそも何で一崎君とお弁当食べるのが約束みたいになっちゃったのかな　――
一崎には仲のいい他の生徒は幾らでもいるだろうに。

――　何であたしなんかと　――

「まぁ、いっか。本当に約束して食べてたわけじゃないんだし。明日からもこうすればいいんだわ」

四時限目終了のチャイムが鳴って『起立・礼』が終ると同時に七枝は弁当を小脇に抱えて廊下に転がり出たのだ。そして屋上、裏庭、と走り回りながら人気の無い場所を探してようやくここ、音楽室のベランダに辿り着いた。

「屋上も裏庭も思ったより人が多かったなぁ。でも特別教室なら五時限目に使う予定が無かったら昼休みなんて誰も来ないし」

美術室や音楽室といった教室には、ご丁寧にその日使われる予定が黒板横に表示されている。これを目安に空いている教室に入ればいい。更にその奥のベランダを選んだのは、廊下の窓から独りで食べているのを見られるのも『嫌だなぁ』と思っただけだ。

弁当の蓋を開けると甘いトマトソースの香りが広がった。

「お母さん……また手ぇ抜いたなぁ。昨日のスパゲティーの残りじゃん、これ」

「残りなん？　その割には美味そうだな」

ベランダにしゃがみ込んでいる七枝の頭から、突然聞き覚えのある声が降ってきた。

「いぃぃぃぃ！　一さ……！」

何で？　なんで？

慌てて振り返ると窓からあの顔がきょとんと七枝を見下ろしている。そして軽く窓を乗り越えて彼は七枝の隣にすっと腰を降ろした。

「なぁ、何で今日は昼飯出てっちまったの？　おかげで探しちまっただろ」

『何で？』は、

――　あたしが聞きたい！　――

それにきっと、今頃水上たちも一崎を探して校舎内を右往左往しているに違いない。

「一崎君、水上さんたちは？」

「んー、適当に撒いてきた」
「撒いてって……何で？」
「だってあいつら、うるせぇし」
うるさいのは事実だが、好きで、好きで好きでいつも一緒に居たいが故の気持ちを『うるせぇ』と言われては元も子もない。可哀想に……思わず同情してしまった。
しかし、こんな現場を見られたら今度はどんな激しい糾弾を受けるか。七枝の箸を持つ手がぷるぷると震えているというのに、一崎はそんな心境構わずぱくぱくと自分の弁当を食べながら続けた。
「正直言って俺、何であいつらがあんなにぎゃあぎゃあ騒ぐのか全然解んねぇんだ。中学の頃はそんなでもなかったのにさ。水上だってフツーに仲のいいクラスメイトだったんだぜ？　高校入っちまって皆急に変わっちまって、参ってるんだ」
「ふぅん」――　もしかしてこいつ、モテている自覚が無かったのか　――
七枝はふっと納得してしまった。
なるほど、いくら人気があったとしてもそれが騒がしいだけで、あまり好ましくない状況だったとするなら、毎日のあの喧騒は可哀想だったのかもしれない。
――　だったらいっそ彼女とかちゃんとつくっちゃえば水上さんたちも大人しくなるのかもしれないのにねぇ　――
ちらりと横を見ると、もりもりと弁当をたいらげている端整な横顔には、まだ小学生の名残が残っているような気がしないでもない。
そのあどけなさに七枝は思わず、ふっと口走ってしまった。
「一崎君はさ、好きな子とかいないの？」
唐突に一崎の表情が硬くなり、箸を運ぶ手が凍りついたように止まった。
「……え？」
「そういう子がいれば水上さんたちも静かになると思うんだけどなぁ。あ、それとも水上さんが好きとか？」

だったらいいな。それが一番ハッピーエンドだ。素直に七枝はそう思いながら聞いた。
束の間、重苦しいような、戸惑うような空気が一崎から沸いて流れた。
「……居るよ、好きなヤツ……」
「いるの！？」
「何度も言わせんなよ！」
言いながら一崎は照れを誤魔化すように再び弁当をばくばくと掻き込みだした。
その隣で七枝はほんわかと目を輝かせながら続ける。
「そっかぁ、好きな子居るんだ。誰かな……ね？　クラスの子？」
「何でそんな事……」
「何でって、大事なことよ」
一崎がその好きな子と結ばれてくれれば、七枝に対する糾弾は減るだろう。いや、無くなると思ってもいい。そしてその彼女は一崎がきちんと付き合っていることを公開すれば水上たちも七枝に対したような行動には出ないはずだ。
期待に満ちた目で詰め寄る七枝に、一崎はとうとう箸を動かす手を止めて白状した。
「クラスのヤツじゃ無ぇけどさ……」
クラスの子でないということは、水上でもないということになる。七枝は一瞬水上に同情してしまったが、そんな事を思っている場合ではない事を思い出す。
今朝の電車の中で、谷口に聞かれたのだ。
『一崎君と付き合ってるって、本当？』
一応誤解は解いたものの、また何かしら水上たちが騒げば元の木阿弥だ。一崎には申し訳ないが、ソコの所ははっきりしてもらわないと困る。七枝は更に詰め寄った。
「その子に告白はしないの？」
七枝の質問に、一崎の顔が真っ赤に染まった。

「そ、そんんな……ンな事！」
酷いどもり様だ。普段のクールさがまるで無い。もしかすると一崎という男は恋愛に関しては恐ろしくシャイなのかもしれない。そんな事を思うすがらで、七枝はふっと思い出した。
スカートのポケットの中でがさがさと揺れるビニールの袋を。
七枝の脳裏に、ひとつの企みが閃いた。
「一崎君、あたし、いいもの持ってるの」
七枝はラッピングバッグから飴をひとつ取り出して見せた。
「これね、魔法の飴なんだって」
「魔法？」
今までの緊張が一気に緩んで、一崎の口端がふっと笑んだ。無理もない。当の七枝ですら蓮にそう言われた瞬間はやはり『バカな事を』と嘲ってしまったのだから。一崎の今の気持ちは痛いほど解る。
さて、どう説明すればこの面倒くさい話しを理解させることができるのだろう。
「あたしのお兄ちゃんがね、製薬会社で働いてるんだけど……」
「三島、兄ちゃん居るんだ？」
「うん。でね、ダイエットとか美肌とかってサプリメントの研究とか開発をしているのね。それで、何かこんなのができちゃったって」
恋を叶える魔法の飴。七枝は蓮に聞かされたとおりに説明した。
「そういえばダイエットでも脳に働きかけて食欲を誤魔化すとか、そんな薬あるもんな。そういう感じかな」
一崎は思ったより飲み込みが良かった。流石、学年上位は伊達じゃない。こんな奇天烈な話しをちゃんと分析してくれる。
「一崎君、そういうの詳しいの？」
「かーちゃ……」言いかけてごくりと唾を飲み込み、へへっと笑いながら言い直した。
「母親がダイエットマニアでね。要するにフェロモンに反応する神経を刺激する、みたいな感じかな」
「うーん、そうだと思う」

「三島の兄ちゃん、凄いもん作るなぁ」
「そうかなぁ」
「でもさ、これ、俺がもらっちゃっていいのか？　三島は使いたい相手とか居ねぇの？」
聞かれて、ずきんと胸が痛んだ。
七枝は親切心でこの飴を渡しているわけではない。
一崎の恋が上手くいってくれれば、水上たちの糾弾は自分から逸れるだろうし、何よりも、谷口の誤解を晴らす一番確実で手っ取り早い手段なのだから。
けれどそんな腹心算を晒すわけにはいかない。
「あたしはそんなの必要ないから」
今朝の谷口とのやりとりから推測すれば、彼も自分のことを意識していないわけではないはずだ。そんな自信が七枝に余裕の笑みを浮かばせ、その笑みは効果を示した。
「んじゃ、ありがたく貰っておこうかな」

6

こんな胡散臭い話を信じたのか、一崎は飴を掌で包むようにぎゅっと握りしめた。

――　まぁ、効果は無くっても“きっかけ”にはなるかもねぇ

――

もしかすると、かなり本気の恋なのかもしれない。そして相談できる相手も居なかったのかもしれない。

一崎の周囲はいつも友達や親衛隊で賑やかだけれど、そういう話をできる雰囲気では確かになかった。そんな一崎の気持ちを自分の恋の為に利用しているのだと思うと、七枝は胸が痛んだ。

「あの、良かったらさ、あたしで良かったら相談に乗る……っていうか、話聞くだけしかできないと思うけど、いや、ノロケでもいいし。いつでも聞くよ？　だから……」

――　頑張ってね　――

真っ直ぐな恋なのだろう。切な気に飴を握る一崎の横顔を見て腹心算とは別に、その恋を応援してあげたい気持ちも沸いてきた。

「だから、頑張ってね」

「ありがとう三島」

弁当を挟んで一瞬見詰め合ってしまった。

こんな会話の後だからだろうか、今まで整っているどこか余所余所しさを感じていた一崎の顔が急に親しみに満ちてきた。

七枝がそんな事を思いながらまじまじと見つめていると、赤面しながら一崎が顔を逸らした。

「何か変な話しちまったな。俺、誰かにこんな話したの初めてだよ」

「そうなの？」

「相手が三島だからかな。何かこう、三島って傍に居ると気持ちいいんだ。気が楽になるっていうか」

「えぇ！　何それ」

「ホントだぜ。隣の席になって、俺、消しゴム借りたりとかしてただろ？　そん時いつも三島からいい匂いがしてさ、香水とかじゃなくてもっと自然な」
「別に特別なシャンプーもソープも使ってないけど……」
言いかけてハタと思い当たった。定期的に蓮から渡されるサプリメントの効果だ。間違いない。
――　そのテの効用の成分は外してって、あれほどお願いしたのに　――
七枝が言葉を途切って黙り込んでしまったのを他所に、一崎は弁当を片付けて立ち上がった。
「じゃ、俺先に教室に戻るな」
「あぁ、うん」
「サンキュー、三島」
一緒に帰って水上達に騒がれないように、と配慮してくれたのだろうか？　――　案外いいやつね　――　飴を握りしめた手を振りながら立ち去ってゆく後姿を見送りながら七枝は呟いた。
「さ、あたしもそろそろ教室に帰らなきゃ」
立ち上がって振り返った七枝は、けれどそのまま凍り付いてしまった。
七枝の真後ろの窓際で、女生徒が一人じっとこちらを見つめていたのだ。
――だ……誰っ？っていうか、見られた？　――　一崎と二人肩を並べて弁当を食べていた所を？
誰？　そして話を聞いていた？　どこまで聞かれた？　何から問えばいいのか迷っていると、女生徒の方から先に口火を切ってきた。
「あの、ごめんなさい！　立ち聞きするつもりじゃなかったんだけど、あの、私、ここに忘れ物してて、取りに来たら話し声が聞こえてきて、つい……あ、でも本当に聞くつもりじゃなかったの！」
「えーと……？」
「ごめんなさい、三島さん。本当にごめんなさい！」

「あたしの名前……？」
「同じクラスだもの……」
二人の間が気まずい空気で淀んだ。
「ごめんなさい、あたし、クラスのことあんまり知らなくって」
「ううん、私も……こんな地味だし、友達も少なくて。三島さんの周りはいつも楽しそうで、ちょっと羨ましいなっていつも思ってたの」
地味。今の七枝にとって何て羨ましい言葉。それこそ七枝がこの高校生活で目指していたものだ。そして彼女は重大な勘違いをしている。
「別に好き好んで賑やかってわけじゃ……あ、そうだ！」
「な、何？」
「今見たこと、他の人には言わないでほしいの」
ぱっと見、ぺらぺらと喋るようなタイプには見えない少女だが、七枝にとっては重要項目だ。念には念を押して口止めしたい。
「絶対、絶対に誰にも！　お願い！」
「うん、わかった。誰にも言わないわ」
彼女は小首をかしげてにっこりと笑みながら言ってくれた。そして
「あの、その代わりと言っては……ひとつだけ、お願いがあるの」
彼女は『言わない』と言った。それを約束してくれるのなら、自分に出来る事なら頑張ってみてもいい。七枝は気持ちよく
「何？」訊ねた。
「さっきの……一崎君にあげてた飴、私にも……その……」
「あぁ、これ？」
ポケットからもうひとつ飴を取り出すと、彼女の形相が変わった。
「お願い！　それ、私にも分けてほしいの！」
さっきまでの可愛らしい一輪の雛菊のような笑顔が吹き飛んで、何て必死な顔だろう。しかしモノがモノだけに、簡単に『はいどうぞ』とは言えない。
「一崎君にも話したの、聞いてたと思うけど……本当にとっても胡

散臭いものよ？」
「ごめんなさい。私が聞いたのは途中からだったけど、飴の所は殆ど聞いちゃったけど……でも聞いてて、もうこれしかないって思ったの」
――　どうしよう　――
七枝は額にねっとりとする嫌な汗を浮かべた。
飴は飴でも、これはただの飴ではない。あの蓮が、どんな生薬だか得体の知れないものを調合して作った代物なのだ。一崎には、彼の秘めた恋を応援する気持ちもあるけれど、殆どは七枝自身が谷口の誤解を完全に解き去りたいが為の打算なのに。
返事に戸惑う七枝の表情を見て彼女はまた、『ごめんなさい』を繰り返した。
「ごめんなさい。そうよね、私たちクラスメイトって言ってもお互いに話しもしたことなかったのに。知らない人間からいきなりお願いされたって困るわよね。私、滝本由香っていうの」
「あ、はい。あたしは三島七枝……よろしく……」
入学して約八ヶ月。今更な自己紹介を交わしたけれど、そういえば誰かと改めて名前を教えあったのは初めてだ。もしかしたら由香もそうなのかもしれない。二人は気恥ずかしいような戸惑ったような顔で互いにちょこんと頭を下げた。
「で、ね。滝本さん。この飴のことなんだけど……」
改めて本題に入る。由香はキッと唇の端を噛みしめて七枝の言葉を待った。
「これを作ったあたしの兄はね、ちょっと……頭は凄くいいんだけど。でも何ていうか……色々とちょっと……変わってててね。あたしには優しいイイ兄なんだけど。これの他にも色んなサプリ作ってくれたりして。でも正直言って、ちゃんと効果あるものを作ってくれるかっていうと、そうでもなくて……どちらかと言うと……」
とんでもない物の方が多い。七枝はそれを身をもって知っている。上手に説明してあげたいのに、兄の恥を晒しているようでどうにも

言い淀んでしまう。
その淀みの隙をぬって由香が口を挟んだ。
「でも、もしかしたら効果あるかもしれないんでしょう？」
「う……」
「お願い、三島さん」
由香の大きな瞳が潤んで揺れながら訴えてくる。よく見ればとても可愛い。七枝は同性ながら一瞬ときめいてしまった。
「こんな物に頼らなくても滝本さんなら普通に告白すれば上手く行くんじゃ……」
「普通に……」
潤む瞳に大粒の涙を浮かべて由香は言葉を詰らせた。
「普通の……恋なら……」
ぽろりと、一滴が白い頬を滑り落ちた。
由香は涙でぐしゃぐしゃになってしまった顔を掌に埋め。嗚咽をしゃくりあげる。
一方、七枝は何か悪い事を言ってしまったのかと自分の言った言葉を胸の中で反芻したけれど、まったく思い当たらないで困ってしまった。
「あの、滝本さん？　もし良かったら、あたしで良ければ相談に……聞くしかできないかもしれないけど……」
オロオロと宥めようとする七枝に、
「お願い、三島さん。何も聞かないでほしいの。勝手なお願いなのは分かってるけど……」
喉元にまで涙が溜まっているような震える声で、再び言葉を途切らせる。けれど七枝には由香が何を言いたいのか、よく解る。
手の中にある怪しい飴玉をもう一度由香に開いて見せた。
「さっきの話、聞いてたんなら分かってると思うけど、胡散臭いだけじゃなくて、もし本当に効果あったとしても二週間くらいしか効き目ないのよ？　ずっと恋が続けらるわけじゃないのよ？」
「いいの。二週間でもいいの。たとえ本当に効き目がなくても、も

しかしたらって夢を見るだけでいいの」
「そんなに……？」
随分と思いつめた恋だ。いったいどんな相手なんだろう。およそ自分と関係のない人間には興味を持たない七枝だったが、この可愛い少女からこんなに想われる相手だなんて、さすがに関心を持たずにいられない。
しかし由香は聞いてくれるなと涙で請い訴える。
「ごめんなさい。本当にごめんなさい。勝手なお願いしてる。でも、でも……」
手の甲で強く涙を拭いながら七枝を見つめるその顔はぐしゃぐしゃに歪んでいるけれど、それでも由香はトキメクほどに可愛かった。水上のような派手さはないけれど、清純で儚げな可愛らしさだ。涙までまるで小さな花びらがぽろぽろと舞うように零れて落ちる。
その顔で
「こんな恋でも、許されるんだって……二週間限りでも想ってみたいの」
こんな告白をされてしまってはトドメを刺されたも当然だ。こうも懇願されて否と言えるわけがない。
七枝は飴を持つ掌を由香に差し出した。
「本当に効き目なんて期待しないでね」
由香の瞳からまた、涙が溢れた。
「あ、ありがとう……！」
由香は何度も『ありがとう』と『ごめんなさい』を繰り返しながら飴を受け取る。七枝はそれを複雑な思いで見つめた。
軽やかにチャイムが流れて昼休みの終わりを告げる。
「私、落ち着くまでもう少しここに居るから、三島さん先に教室に帰ってて」
「大丈夫？」
「うん。本鈴までには……」
「じゃあ、先に行くけど」

「ん」
由香はもう泣いてはいなかった。
この様子なら少し授業に遅れる程度で間に合うかもしれない。七枝は僅かに安堵して音楽室を後にした。何度も由香を振り返りながら。

――　あ、本当に同じクラスだったんだ　――
本鈴にぎりぎり間に合って教室に帰ってきた由香の姿を見て、七枝はまた気持ち複雑になった。
まだ目が赤い。由香の気持ちは落ち着いたかもしれないが、目の腫れが痛々しい。一体どんな恋をしているというのだろう。ものすごく辛い恋なんだろうか。
――　もしかして　――
不倫とかだったらどうしよう……七枝はサッと蒼褪めた。
そんな恋を叶えさせる後押しなんかして、良かったのだろうか？
いやまだ不倫とは決まっていないけれど、由香の様子からして只事では無い相手だと受け取れる。もしかしたら不倫の方がずっとマトモに思えるそんな相手だったら……
そんな恋が、たとえ二週間といえ叶ってしまったなら、後でもっともっと辛くなるんじゃないだろうか。
しかし飴は既に由香の手の中にある。
今となってはあの飴の効き目がありませんように、と祈るばかりだった。

思えばあの妙ちきりんな夢から色々な事があり過ぎて、急激に変わってゆく周囲の関係に七枝は戸惑うばかりだった。
おかげで、残り一個の存在をすっかり忘れてポケットの中に入れたまま、日曜までの残り三日を過ごした。

この三日間、一崎の七枝への態度は相変わらずで、とても本当に好きな子が居るとは思えない。
水上達に糾弾されたり嫌味を言われるのも相変わらずだ。
でも。
――　今日が終って、明日の土曜が過ぎれば日曜よ。谷口君と二人きりで図書館よ。頑張れあたし！　――
その思いだけで、三日間を乗り切った。
……乗り切った、はずだった……

7

金曜の放課後、駅で電車を待っていた七枝は突然後ろから腕を掴まれて、『ひっ！』上擦った声で小さく悲鳴を上げた。
「俺だよ俺」
振り返ればそこに一崎が居る。
「どうしたの」
「ちょっと……」
珍しく一崎の歯切れが悪い。
「水上さん達は？」
「てきとーに撒いてきた」
「剣道部は？」
「……サボった……」
七枝の知る限り、一崎は『これに賭けてるんだぜ！』というくらい部活大好き少年だ。それがサボったとなると相当な問題があるはず。と、なれば七枝が思いつくのはあの《飴》の一件しかない。
「もしかして、アレ？」
「うん、そう。アレ」
「食べさせたの？」
「今ちょっといいかな？　何か奢るから」
『食べさせた』とは答えずに、一崎は七枝の腕を引っ張った。
――　そういえば一崎の相手って誰なんだろう　――
音楽室横のベランダで話した時には『他のクラスの奴』という以外、相手のことには触れなかった。もっとも、誰それと名前を聞かされても多分七枝には解らないだろうから、聞く気も無かった。でも、一崎が聞いてほしいというなら話は別だ。
「別に奢ってもらわなくても、話くらい聞くわよ」
「サンキュ。でもこの間から変な話ばっかり聞いてもらってるしさ」
話しながら駅構内のハンバーガーショップに入った。

「何でも好きなもん言って。あ、俺チョコレートシェイクと照り焼きね」
「じゃぁ……ポテトとコーラ」
テーブルに座って甘いドリンクを軽く口に含み、ふぅっとひとつ溜息を吐いて一崎はぽつり話し出した。
「でさ、あの飴のことなんだけど」
「食べてもらったの？　相手の人に？」
咄嗟に出た七枝の問いかけに、一崎の目がぱぁぁっと輝いた。
「ありがとう！　三島、ホンっ気でありがとう！」
――　何だ？　このテンションの高さは　――
あの日から三日間、怪しい物を渡してしまった罪悪感と、単純に彼の相手への興味とが入り混じり、一崎が飴をどうしたのか気になって観察していたが、一崎は普段どおりの彼のままだった。だから『やっぱり効果無かったんだなー』と思い始めていたのだけど。
――　もしかして教室では顔に出さないようにしてたかな　――
確かに水上達が一崎のこんなテンションを見たならちょっとした騒ぎになるだろう。
「効果あったんだ？　あれ」
「あったどころか、めちゃくちゃ嬉しいよ、俺」
「そう……良かったね」
「もう諦めてたんだ、俺。ホントのこと言うとあいつは全然そんな気なんか無いんだろうって。でも三島から飴もらった夜、あいつと会ってさ、渡したんだ。そしたら夕べコンビニで……手なんか繋いでくれたんだぜ！」
「……そりゃー良かったねぇ……」
「俺、絶対相手にされてないって思ってたから、もう感激でさ」
一崎のテンションに反比例して、七枝は妙にシラケ始めてきた。
――　そりゃ、一崎に告白されれば転ばない女の子なんて居ないでしょう。飴の効果っていうより、それは本当にきっかけになっただけだわ　――

「だから俺、どうしても三島にお礼言わなきゃと思ってさ」
七枝はちょっとだけ、意地悪な気持ちになってしまった。
「でも、その効果って二週間だよ？　その後も続くとは限らないのよ？」
一崎のテンションが滝の流れるような音を立てて崩れてきた。
しばらく黙ってしまって、爪先でシェイクのストローをくるくると弄んでいたが、ふっと笑みながら一崎は顔を上げた。
「解ってる。でも、いいんだ。俺本当は飴を受け取ってくれたってだけで凄く嬉しかったんだよ」
「はぁ？」
「正直に話して渡したんだ。そりゃ、本気にするとは思ってなかったけどさ、『この飴食うと俺の事好きになっちゃうんだってさ。お前食ってくれよ』って。そしたらあいつ、笑ったけど『ありがと、貰うよ』って。俺、もう嬉しくて嬉しくてさ！」
モテているという自覚が無い事は先日少し話しただけで気が付いた。けれどこれは自覚というより、あまりにも自信が無さ過ぎたんじゃないか？　一崎をこんなに不安にさせる事のできる女の子なんて……七枝は急に興味が沸いてきた。すると、まるでその瞬間を狙っていたかのように、一崎がキラキラと瞳の星を輝かせながら言った。
「だからさ、もし良かったら三島、あいつと会ってみてくれよ」
「はぁ？」
「三島がくれた飴のおかげで結ばれたんだから。……効果が切れる前に、な？」
よっぽど嬉しいのだろう。とはいえ、やはり効果の期限も気になると見えて、終ってしまう前に、幸せな自分達を誰かに知っていて欲しいのだと搾り出すような声で小さく呟いた。
「解った。せっかくだから一崎君のお相手、見せてもらおう。幸せなトコ見せてよね」
効果が切れる前を意識して表情に陰を落とす一崎を、励ますよう

におちゃらけて明るく言えば、それに応えて
「さんきゅ、三島」振り切るように一崎も笑った。
「じゃあさ、急でナンだけどさ、明後日の日曜の午前中、いいかな？　ちょうど会う約束になってるんだ」
日曜の、午前中。
――　！！　――
いいワケがない。
「ちょっとその日は……」
目を逸らしながら断ろうとしたが、幸せに先急ぐように一崎はコメカミを掻きながら話し続ける。
「あいつ、朝から図書館行くとか言ってたから。三島もよかったら来てみてよ」
「図書館？」
「そう」
「……だったら……」
それはいい提案かもしれない。七枝は思った。一崎が彼女を連れてきて顔合わせすることができれば、谷口が気にしていた、一崎との関係をはっきりと証明できる。
「うん、いいよ。あたしも人と合う約束があるけど、同じ図書館だし。一緒に会おうか」
「先約あったのか？　いいのか？」
「大丈夫。むしろあたしもその方が都合いいもの」
「そっか。ありがとな、三島」
淀みの無い笑顔で感謝されると胸が痛む。
しかし一崎が上手くいっていて、幸せなのならそれでいいじゃないか。七枝は背中にむず痒さを感じながら自分の腹心算を切り替えた。
――　そうよ。飴の効果なんかであるわけないじゃない。二週間経っても一崎だもの、いい人だもの。終るわけないわ　――
じゃあまた日曜に、とホームで別れた。

日曜に図書館で。
一崎は彼女とデート。
七枝も谷口とデート。
幸せなカップルが図書館で二組。何て理想的で幸福な高校ライフだろう。
きっと、何もかも上手くいく。そう、もしかしたら由香だって、不倫じゃないかと心配もしたけど、案外由香の思いこみが激しいだけで、実は普通の男の子で一崎みたいに飴がきっかけになって上手く行っているかも……
そこで、始めて七枝は気が付いた。
「って！　滝本さんずっと学校来てないじゃない！」
あの次の日から。
一崎が好きな人に飴をげたかどうしたかばかり気になって、うっかり見過ごしていたが、何となく姿を見ないなぁと思っていたら、今日職員室の前を通り過ぎた時に、日直の人が担任からプリントを渡され、由香が三日も無断で学校を休んでいるから、と話していたのを聞いたが、その時は飴との関係に結びつかず、何気にやり過ごしてしまったが。
「もしかしてあの飴が原因？」
飴に効果があるとは思わない。けれどもしかしたらそれがきっかけで勇気を出した由香が失恋をして、ショックのために学校を休んでしまうハメになってしまっているのかも……
「やばい、やばいじゃない？　これって」
七枝の背中がぞくりと震える。
由香に会わなければならない。彼女が飴をどうしたのか、そして今どうしているのか、確かめなければいけない。もしも本当に飴がきっかけとなったのなら、謝って……
「どう謝ればいいの……」
途方に暮れてしまった。けれど行かなければ。会って確かめて、学校に来るように説得しなければ。

「うち、よく解ったのね」
明けて土曜日。七枝は由香の家に来ていた。
「連絡網で……」
「連絡網、電話番号しか載ってなかったと思うけど」
「先生に教えてもらって」
マンションの一室、由香の家の前でチェーンロックに繋がれたまま細く開かれた隙間からぼそぼそと会話する。
――　違う、こんな話ししてる場合じゃなくて　――
思いながら七枝はどう話を切り出したものか悩んでいた。
僅かな隙間から覗いた由香の姿はぼさぼさの髪に、腫れあがった瞼。皺が寄ってよれよれのパジャマと申し訳程度に羽織ったカーディガン。とても、数日前の可愛らしい少女と同じ由香だとは思えない。
「もしかして寝てた？」
質問に由香は黙って扉を閉めた。
焦り過ぎて連絡も入れずに直接来てしまった事を後悔した。やっぱり突然訪ねるのは無作法すぎる。由香が気を悪くしたのではと七枝が不安になっていると、内側からガチャガチャと金属の擦れる音が聞こえて、再びカチャリと扉が開く。
「入って」
言葉少なに由香は中へ招いた。
七枝は気まずそうな顔の上に引き攣った笑顔を浮かべて「おじゃまします」と靴を脱ぐ。「座って」とリビングのソファを勧められて、言われるままに座る。しばらくすると白磁のカップが二つ乗ったトレーを持って戻ってきた由香が、七枝の正面に座った。
「紅茶で良かったかしら」
「うん、ありがとう」

会話のきっかけが掴めないで困ってしまいながらカップに口をつけて、七枝は思わず目を見開いた。
「美味しい」
「うち、両親がカフェやってるから。こういうのは揃ってるの」
「へぇー、近所？　何て言うお店？」
「駅前に商店街の通りがあったでしょう？　あそこの中なんだけど……たまーに学校の子も行くみたい。私は全然顔出さないんだけど」
「凄いなぁ。うちなんて紅茶はティーパックよ。コーヒーもインスタントだし。こういうのに無関心なのよね、うちの親。いいなぁ美味しい紅茶が毎日飲めて」
「そう？　良かったらシフォンも食べて。父が作ってる人気商品なの」
「美味しい、こういうの大好き」
まろやかで素朴な味のシフォンケーキに生クリームを絡めながら喜んで食べる七枝を見て、由香の重く腫れた目尻が嬉しそうに下がった。その表情の変化を見つけて、七枝はハッと我に返る。
――　って、違う！　こんな話をしに来たんじゃないの！　――
当初の目的を思い出して、七枝は改めてきちんと膝を揃えた。
「滝本さん、あの……」
けれど、『飴のせいで好きな人とダメになってしまったの？』『そのせいで学校休んじゃったの？』とは直球すぎて聞けない。七枝は懸命に頭の中で言葉を探しながら口を開いた。
「もしかして具合悪かった？　三日も学校休んでるから……」
「心配して来てくれたの？　ごめんなさい、心配かけて……」
「いや、そのー……」
心配も何も原因はほぼ間違いなくあの飴のせいだ。やっぱりあんなものあげなきゃ良かった。『もう残ってないの』とか誤魔化せばよかった。頭の中でぐるぐると七枝が後悔していると、予想もしていなかった明るい声が返ってきた。
「心配しないで。それより私こそ三島さんにお礼を言わなきゃいけ

ないわ」
「お礼？」
「うん。三島さんのくれた飴のおかげで、私今とっても幸せなの」
「でも……」
その泣き腫らした目とヨレた姿は……？　じっと由香の顔を凝視する。
「あぁ、これ？　ごめんなさい。ずっと寝てたものだから」
重い瞼を指で擦りながら『ふふ』と照れて笑った。
「寝てたって、やっぱり具合悪かったんじゃない？　あたし急に来たりして悪かったわ」
「そんなことないの。気にしないで」
微笑む由香は、本当に幸せそうだ。あの飴に効果があったかどうかはともかく、何やら良いきっかけになったのは事実のようだった。
「あの、聞いてもいいかな……滝本さん、あの飴……」
突然に由香の笑顔が止まった。
――やば！　聞いちゃいけなかったかな　――
由香があまりにも幸せそうに笑ったので、うっかり口を滑らせてしまって後悔する七枝に反して、由香は自分の両指をもじもじと弄びながら頷いた。そして小さな声を震わせながら、ぽつりぽつりと話し始めた。
「あのね……うん、三島さんなら、聞いてくれるかなぁ」
「うん？」

8

「あのね、私ずっと片思いしてる人が居るの」
知っている。その為の飴だったんだよね　――　思いながら『うん、うん』を繰り返し聞いた。
「でもね、その人……」
――　あ、本題に入る　――
七枝はふと思い出した。
『こんな恋でも許されるって……』そう、涙流しながら訴えてきたあの時の由香を。
どんな……どんな相手でも、驚いたりしないで落ち着いて聞かなきゃ、あまり過剰な反応をしてしまったら由香を傷付けてしまうかもしれない。しっかりと心に構えて『うん』と一言一言区切りながら、躊躇いがちに話す由香を見つめた。
「その人、現実の人間じゃないの」
「そう、それは辛……」
てっきり、『彼女がいるの』か、最悪『結婚してるの』という告白が続くものだと思っていた。だからその為に何十回も頭の中で練習して用意していた慰めの言葉を、そのまま口にしようとして途中で止まってしまった。
――　はぁ？　――
今、由香は何て言った？
あ、もしかして、テレビの中の人ってこと？
アイドルとか俳優とか？
しかしアイドルにしろ俳優にしろ《現実の》という言い方はしないだろう。
七枝は言葉を途切れさせたまま、どのくらいの時間悩んだだろう。しかし由香はひとたび口に出してしまうと、堰を切って流れ出る水のように止まらなくなってしまった。時々上手く言葉にできないの

だろう、しどろもどろになりながらも話し続ける。
「わ、笑わないでね。誰にも話したことがないの。三島さんが初めてなのよ。は、初恋なの。こんな気持ち初めてだから、誰にも相談できな……相談していいのかも分からなくて、ずっと悩んで……でも！　あの時一崎君と三島さんのお話ししているのを聞いて、三島さんならこんな気持ち、解ってくれるかもしれないって思ったの」
「あぁ……うん……」
切々と訴える由香の話しに、もはやどう応えてあげればいいのか解らない。けれど彼女が真剣なのだけは解ってしまうから、つい返事をしてしまう。それが由香にとってはまた、一筋の光明に思えるのだろうか。
「あのね、正直言って飴のこと、全然信じてなかったの。でも、こんなお伽噺みたいな事をあんなに胸張って話してた三島さんを見てたら、もしかしたら……私の気持ちも理解してくれるかなぁ、なんて思ったの。一崎君に話してるのを聞いてるうちに、本当にあの飴が私の気持ちも解決してくれるかもしれないなんて思って……あぁ、ごめんなさい。支離滅裂よね私。でも、本当に二人の話を聞いてるうちに私も、試したくなって……」
「それで、試したんだ？」
七枝は意識が朦朧としてきた。
由香は確かに、『現実の人じゃない』と言った。だったらどうやって試したというんだろう。テレビの画面に向って『えいや！』と投げつけでもしたんだろうか。
しかし由香の続く話しは、七枝の思ったそれよりもっとロマンチックだった。
「夢にあの方が出てくることは今までに何度もあったから、念を押してイラストを枕元に置いて、飴を抱きしめて寝たの。そしたら……」
いつも、一方的に夢の中に現れる《あの方》の姿を見るだけで満足していたのが、その晩に限って話しかけられてきたのだという。

『由香、やっと会えたね』そんな事を口走りながら。
「私、もう夢かと思ったわ」
――　いや、夢でしょう　――
「それでね、飴をさしあげたの。あの方、その場で食べてくださったわ。そして『最高の秘薬だ。体力も魔力も全回復することができたよ。由香のおかげだ』そう微笑んでくださって……
――　全回復って　――
「これからは由香のためだけに戦おう。悪しき者どもとは手を切って。約束しようって、そう言ってくれたの」
――　……はいはい……
「その証拠にね、目が覚めたら抱きしめていたはずの飴が袋だけ残して無くなっていたのよ！」
――　寝ながら自分で食べたか、蟻が持ってったんじゃないの……
「目が覚めて、まさかあの方が……って思って慌ててもう一度寝なおしたの。そしたらあの方、また出てきてくて、『また来てくれたんだね』って喜んでくれたのよ」
七枝は何となく解ってきた。由香の腫れぼったい瞼と乱れた髪。そしてヨレたパジャマ。
「あれから私たち、何度も夢の中で逢瀬を繰り返したわ」
うっとりと話す由香に、やっと口を挟む気力が戻ってきた。
「あのぉ、それで《あの方》っていうのは……」
「あ、あぁごめんなさい！　紹介が遅れてしまったわ！」
――　紹介って　――
ぱたぱたと隣の部屋に駆け込む由香の後姿は、七枝にとって最早痛々しかった。しかし帰ってきて見せ付けられたものは更に痛々しかった。
「この方、ザナン様が私の大切な方なの」
見せられたのは、薄い一冊の本の一ページ。
ゲームのパーフェクトガイドとかいう本のキャラクター紹介というくだりだった。

七枝も、ゲームを全く知らないというわけではない。むしろ七枝に何でもかんでも与えたがる蓮のおかげで、そこそこにハードもソフトも持っていて遊んではいたが、これは初めて見るゲームだった。

普段だったら『えーこれ、やったことない！　ちょっとあたしにもやらせてくれないかなぁ』と続いただろうけれど、今は残念ながらそんな状況ではない。

確かにこれは、現実の人間ではない……いや、それよりも七枝にとってもっと衝撃だったのは、

――　ザナン“様”？　――

ぐらり。七枝の頭の中で小さな何かが崩壊した。

――　ゲームのキャラに、“様”？　――

ザナン様に会うのは、とっても難しいのだと、由香は続けた。必用な呪文と技を幾通りも覚えて、マップを特定の順序どおりに進んで、関わるべきキャラクターを全部揃えて……揃えるだけではいけないのだと言う。ザナン様に会うべき順番があるのだ。そしてやっと、ザナン様を包んでいる霧の封印が解けるのだが……ようやく会えたその人は倒すべき敵の一味だった。

しかし、そんな彼も《上手く》ゲームを進めるうちに敵を裏切り、仲間にすることができる。要するに、

――　ちょっと難しいイベントキャラじゃん　――

クリア自体には殆ど必要とされない。ただ、イベントとキャラクターリストのコンプリートのためだけに用意された存在だ。そして由香はコンプリート目指し、やり込んでいくうちにザナン様への意識が深まっていったのだろう。

由香の差し出した本は攻略本というには薄すぎた。分厚い本を出版するほどソフト自体が売れなかった、という事なのだろうか。七枝はちょっと考えて、要するに殆ど知る人の居ないマイナーゲームというやつなのだろうと納得した。

しかし内容はかなりディープなようで、蓮のおかげで普通の女子高校生にしてはかなりの量のソフトを持っているはずの七枝が全く

存在すら知らないゲームだ。そんな物を発掘してやりこむ、それどころか脇の、しかも手に入れても入れなくてもクリアに何の支障もないキャラを掘り起こして、恋までしてしまう……頬染めながら語る由香の横顔を見つめて、何の疑いも無く七枝は思った。

――　オタクだ、この子　――

「……だから、今寝るのが嬉しくて。ご飯食べる時間も惜しくて……だって、眠る度にザナン様会えるのだもの」

あれから寝てばかりなのだと言った。

――　やばっ！　やっぱりあたしのせい　――

飴がどういう経緯で寝ていた由香の手の中から消えたかは、もうどうでもいい。しかしそれで学校を休まれるのは困る。七枝は職員室隣の廊下で、聞くともなしに聞いてしまった教師の会話を思い出した。

せめて『風邪で』とでも連絡を入れていれば良かったのに、それすら忘れて夢見ることに熱中してしまって、担任からかかってくる電話にすら出ないとなれば、期末試験が終った冬休み直前という時期が時期だけに教師の心証も悪くなる。『月曜も来なければ家庭訪問を』と言っていた。

やばい。やばすぎる。

由香が教師にとってどんな生徒なのかは知らないが、必要以上にイメージを損なわせるのは絶対に由香にとっていいワケがない。ましてやこんな理由で休んでいるなんてバレたら最悪だ。

「だからって、学校休んでまでは、どうかと思うよ」

ほんの数秒、ぐっと息を呑んで黙ってしまって、由香は頷いた。

「うん。私もそう思うわ」

――　だったら！　――

月曜からはちゃんと学校に来て、と言おうとしたが、眉間に酷い皺を寄せて見つめ返す由香の眼を見て、言葉が詰った。

「だって三島さん……二週間だって……」

二週間、飴の効果の期限だ。

「正直に言ったら私も冬休みに入って試すつもりだったの。でも、どうしても我慢できなくなって……ごめんなさい三島さん。うちまで来てくれたのに……」
このままだと由香は本当に、二週間の甘い時を過ごしきるまで寝て過ごすのだろう。
腫れぼったい目。ぼさぼさの髪。ヨレたパジャマ。もしかしたら三度の食事さえまともに摂っていないのかもしれない。こんな調子で二週間も過ごしたら……七枝は背筋に冷たい汗が流れ落ちるのを感じて怖くなった。
どう言えば、どう説得すれば解ってくれるだろう。けれど残念ながら自分の乏しい経験からは良い解決策が思いつかない。今まで読んだ本やドラマで、何か使える設定とか無かったっけ？　頭の中でパラパラとページをめくるように記憶を探す。
そしてやっと、どういう話だったかはもう覚えていない物語のセリフがぱぁっと閃いた。
「ひ、一人でさ、恋ってしてても、楽しくないよの！」
たしか小学生の頃に読んだ少女漫画だ。
突然の展開に由香がきょとん、と大きな瞳を開いた。
「え？」
「彼氏と二人っきりも楽しいかもしれないけど、友達と『昨日彼と～』なんて話したりするのも楽しいよね！」
「う……うん、それは……」
「あたしも、滝も……由香のノロケとか、聞きたいし」
本能だった。《滝本さん》より名前で呼ぶ方が伝わると思った。もっとも、『聞きたい』のくだりは七枝自身何故こんな事が言えたのか理解できないのだが。
とにかくそれが効果的だったのかどうか、それまで懸命に語り続けていた由香の唇がやっと止まった。この隙に、と七枝は頭で考えることを止めて、感じたことだけをひたすら口にしてみた。
「だからさ、もう飴の効果は発動しちゃったんだし、だったら残り

何日か……あたしに話してよ。あたし聞くから。どんな夢……ううん、どんな風に会って、どんな話ししたとか。そ、そういうのも、恋の醍醐味ってやつだよ！　それに、寝てばっかりって美容に悪いよ？　ちょっと起きて運動した方がいいよ。寝てばっかりの由香よりハツラツとした由香の方がザナン様だって嬉しいに決まってるよ」

もう自分で言っていることがよく解らない。こんな言い方で由香が納得して登校してくれるようになるのかも、解らない。

しかし由香はしばらく考えて、

「そうね。こんなに病人みたいな毎日送ってる私なんて……ザナン様に心配かけちゃうわね」

そして瞳に涙を浮かべた。

「き……嫌われちゃうかも……」

喉を震わせて一滴を零す。

「大丈夫よ。由香はとっても可愛いんだし、そんなに簡単に嫌われたりしない」

「……」

「あの時、ベランダで始めて由香と話した時、由香があんまり可愛いんであたし本気でドキドキしちゃったもん。それに大人しそうな印象なのに意外と情熱的で、びっくりしちゃった。そういうギャップがある所もザナン様は好きだと思うよ」

――　ザナン様の好みなんか知ったことじゃないけど　――

「……そうかな」

「そうだよ。だから学校においでよ。昼間は可憐な女子高生で、夜は恋に一途な女なんて、素敵じゃない。そんな話しあたしも聞きたい」

――　何、このワケわかんない設定　――

自分の言ったセリフに心の中で突っ込みながら、とにかく由香を説得した。

別な心の隅で『こんなハチャメチャな説得が通るワケないじゃない』と危ぶみながら。

9

しかし七枝の危惧は無用だった。
「ありがとう三島さん。話、聞いてくれて」
由香はふっと淡く笑んだ。
「本当はもっと早く誰かに聞いて欲しかったの。でも架空の人が好きだなんて、誰もそんな話してないし……私も今まで聞いたことなかったから、不安だったの。とっても、とっても不安だったの」
「由香……」
「他の女の子と同じように、クラスの男の子や先輩なんかに憧れれば良かったのに。でも私が好きになったのはザナン様で……皆みたいに身近な男の子ってどうしても好きになれなくて……」
でも、うっかりと話して『変わってる』だとか『在りえない』と否定されてしまうのは恐ろしくて、誰にも話せなかった。しかも、同じ片恋であっても由香の場合は相手に対してアプローチをすることも出来ない。たった独りで悶々と想い続けるしかできなかった恋。
「月曜日から登校するね」
顔を上げて明るく笑った由香は、目こそ腫れてはいたけれどベランダで会った時と同じように可憐で、輝いていた。その笑顔でまた『ありがとう』を繰り返した。
七枝も満面の笑みを浮かべた。
こう素直に喜ばれると逆に心苦しいような、複雑な心境になってしまったが、とにかく今は由香を説得できたことを喜ぼう。
「あたしも嬉しい」
由香の手を握り締めて、
「月曜が楽しみだね」と、さり気なく由香がちゃんと登校したくなるように仄めかすことも忘れなかった。
「うん。私もとっても楽しみ」
それ以上二人は何も語らず、互いの手を握り合った。

――　それにしても……疲れた　――
二時間ほど話しこんだだろうか。
――　あぁいうの、テレビなんかで聞いたことあったけど、本当に居るんだな　――
由香の打ち明け話は七枝の理解の範疇を超えすぎていて、実の所まだ現実の事だと思えないでいた。
――　ゲームとか漫画とか好きだけど、あんな風にのめり込めるものなのかな　――
考えれば考えるほど、頭の中はぐるぐる渦を巻き余計に解らなくなってくる。
とはいえ、月曜には学校へ来ることで話しはついた。
やっぱり由香の不登校は七枝が渡した飴がきっかけだったのだ。こんなことで由香の内申がマイナスになってしまう事があば責任の取り様がない。今なら学校を休んでまだ三日。テスト疲れで風邪をひいたと誤魔化すこともできる程度の日数だ。
――　これで由香のことは解決するわね　――
ホット胸を撫で下ろした。と、同時に
――　月曜になったらまたあの話の続き、聞くのかぁ　――
約束したとはいえ、あの突拍子も無い日現実な恋話しを聞かされるのは若干苦しいものがある。でもしょうがない。
――　二週間よ、二週間。いや、あと十日ほどか。飴の効果が切れるまでの我慢よ　――
それにしても、思い込みってすごい。未だに飴の効果なんて信じていない七枝は、本気で感心していた。
由香の恋する思い込みの強さが夢の中でザナン様との逢瀬を可能にしたのだと分析していた。と、いうことは、二週間で効果が切れるという事も信じているはず。だからその日が来れば由香はきちっとこの恋を終らせてしまうだろう。
――　幸せそうだったけど　――

やつれていても、由香はとても幸せに見えた。けれどその幸せは間違いなく終るのだ。いや、自分があげた飴のせいで、本当なら始まりも終わりも存在しないでいつまでも緩い片想いで続いたかもしれないのに。

飴で、逢瀬を叶える幸せと同時に、終ってしまう現実も手渡してしまった。自分の恋は今にも花咲き始めているというのに。

明日はこの小さな後ろめたさを抱えたまま、谷口に合うのかと思うと、若干気が重い。

七枝は胸の前で両掌を合わせて『ごめんね』と呟く。そして、

――　いつまでも考えててもダメ　――

気持ちを切り替えなければ。

谷口に会う事も大事だが、一崎との関係も誤解を解かなければならないのだから。

やっぱり、無理しても頑張って九徳を受験して良かった。

七枝は今、目の前に座って答案用紙と参考書を見比べながら黙々とチェックを入れていく谷口を見つめながら、心の底から思っていた。

中学三年の初め頃、谷口の存在を知ってからというもの、気になっていたけれど、絶対に実らない恋だとも思っていた。

しかしそれでも諦めきれずに、無謀を承知で受験勉強に挑んだのだ。とにかく同じ学校に通うことができれば、三年かけてきっかけを作ることは出来るかもしれない。そう思いながら勉強に全力を注いでいた。

それが汗ばむ季節に入ってから、突然恋の春が訪れた。

教師から七枝も九徳を受けると聞いたのだろう、それまで挨拶すらまともにしたことのなかった谷口が、廊下で突然話しかけてきた

のだった。
『同じ学校受けるんだって？　ここから九徳受けるの、僕一人だと思っていたから嬉しいよ。お互いに頑張ろうね』
同じ学校を受験するのだから本来ならライバルであるはずなのに、谷口は温かく微笑みながら七枝に手を差し出した。しかしその手を受けかねながら、
『でもあたし……先生に絶対無理って言われてて』
俯いてしまった七枝に、谷口は続けて話しかけたのだ。
『偏差値どのくらい？』
『……』
黙って模試の結果を渡すと、瞬間に谷口の表情が凍った。
――　うわっ、バカだと思われた　――
やっぱり正直に教えるんじゃなかった。今きっと、『分不相応な』とか思われている。
涙を浮かべかけた七枝に、一旦凍りついた表情を溶かして、
『確かにちょっと難しいね。でも』
谷口の頭の中で、七枝の偏差値がどう計算されたのだろう。やがて彼はにっこりと笑いながら言ったのだ。
『もし良かったら僕と一緒に勉強しようよ。解らない所、教えてあげるから』
神の声に聞こえた。
『でも、谷口君だって自分の勉強で忙しいのに』
『うん。平日は塾があるからダメだけど、日曜で良ければ』
『でも悪いわ……』
『気にしないで。僕ね、正直言ってちょっと心細かったんだ。九徳受けるの、独りきりだと思ってたから』
そう言って、はにかむように笑った谷口の顔を、七枝は今でも忘れない。
あの時と同じ笑顔で、谷口は答案用紙から顔を上げて七枝に向った。

「まず数学ね。間違ってる所の説き方を赤で書いておいたから、これに沿ってこっちの問題をやってみて。あとは物理だけど……」
渡された用紙にはびっちりと解説が書かれている。
「これを見ながら問題解いてみて。それで躓いた所をもう一度説明するから」
――　優しい……谷口君　――
受験が終って、二人揃って合格してからはめっきり減ってしまった一緒の勉強時間だが、テストの前後になると谷口は電車の中で、自分から対策勉強と復習を提案してくれる。国立大受験を目指して中学の時以上に勉強も大変だろうに。
今更ながら谷口の優しさが眼に染みて痛い。
だからせめて、谷口が勉強に付き合ってくれる間は、彼の優しさをムダにしないように頑張ろう。この優しさに努力と成果で応えたい。七枝はキリっと唇の端を引き締めて問題に挑んだ。
「出来てるじゃない、三島さん。本当は解ってないわけじゃないんだよね。なのに何で普段は……なのかなぁ」
一問一問解いていく七枝の正面から、答えを覗き込み赤で丸を入れていく。
――　普段は……谷口君が教えてくれるワケじゃないんだもん――
この声、この笑顔、この優しさが七枝にとって努力する為の原動力なのだ。
数学が一段落して、さぁ次は英語を……と、七枝がノートを出していると、谷口がふっと携帯を開いた。
「十時かぁ、遅いなぁ」
「どうしたの？」
「あ、うん。実はちょっと、友達もここに来るって言ってたから」
「友達？」
そういえば谷口の口から今までこの単語を聞いたことが無かった。七枝は奇妙に思いながら聞いた。

「もしかして先に約束でもあった？　あたし邪魔だったかな」
「ううん、それはいいんだ。約束って言うなら三島さんの方が先だったんだから」
そこまで会話して、七枝もハタと思い出した。
そういえば一崎も図書館に彼女と来る予定だと言っていた……
「そういえばあたしのクラスの人も……」
七枝が最後まで言い終るより前に、谷口が急に立ち上がり七枝の背後に向けて手を振った。
「あ、来た。こっち」
「悪ぃ。ちょっと遅くなった」
聞き覚えのある声。
谷口がガタガタと隣の椅子を動かす。
「部活寄ってた？　途中で抜けてきたんじゃない？」
「大丈夫。ノルマはちゃんとやっつけて来たから」
嫌な予感。七枝は固まり動けなくなってしまった。
振り返らなくても解る、この声。
声の主はすっと七枝の横を通り過ぎ、ちらりと見下ろして言った。
「あれ、三島じゃん。大樹と一緒だったのか？　偶然だな」
引かれた椅子に腰を降ろしながら話しかけてくるその人は、やっぱり、一崎だった。
「三島さんは最初から僕と勉強する約束だったんだよ」
「そうなのか？　っていうか、お前ら知り合いだったの？」
「話しただろう？　僕の唯一、同じ中学出身で親しくしてる人が居るって」
「それ、三島だったのか！」
――　何？　この状況　――
今までの甘く幸せだったひと時が、一転して奈落の底へと沈んでいく。
――　何で？　こいつ谷口君と何でこんなに馴れ馴れしいの？
――

「俺、同じクラスだよ。今席が隣なんだ」
「知ってる。二人、ちょっと仲がいいよね」
――　良くない！　――
何で？　なんで？　ナンデ？　谷口がこんなに一崎と仲がいいなんて、今まで知らなかった。
いや、それより……一崎はさっき谷口を何て読んだ？　ひろ……ひろき……？　何故、一崎が谷口の名前を？
いや、それよりも。一崎が図書館に来るのは前もって聞いていたからいいけど、彼女を連れてくるとか言っていなかったか？　紹介したいとか何とか……
考えなければいけない事と、自分の感情が複雑に交差してつい、一崎の顔を睨みつけてしまった。
「どうした三島？　今日は機嫌悪そう」
悪くはない。悪くはないけれど。
「一崎君、今日誰かと会わせてくれるって」
「あ」
一崎の頬がぽっと染まった。
「あ、あーあーあー……あー……うん……」
普段爽やかな男が、妙に歯切れ悪い。そこに谷口が口を挟んだ。
「何？　どういうこと？　タカちゃん」
――　タカちゃん！　どういう事？　それはあたしが聞きたい！　――
二人は名前で呼び合うようなオトモダチだったのか？
机に広げられた答案用紙に、七枝の握りこぶしで皺が寄る。カサカサと乾いた紙の音が七枝の心境を表すように机の上を支配する。
一崎がコホンとひとつ咳払いした。
「いや、実はさ、今日三島に……」
続く言葉がやたら遠くから響いてくる意味不明な外国語のようだった。
「オマエを紹介するって約束しててさ」

ダレヲ？　ナニヲ？　ショウカイ？　ナニソレ？　一崎の放つ言葉が、七枝の頭の中でぽんぽんと跳ね回る。

――　ナニイッテルノ？　コイツ　――

脳がパンクして思考停止寸前の七枝に、一崎は駄目押しでトドメを刺した。

「ほら、あの飴。あれくれたの三島さんなんだ」

せめてここで谷口が、『飴？　そんなの知らないなぁ』と否定してくれればまだ救われたのに。

「えー！　そうだったの？」

――　認めたよ、この人　――

しかも耳まで赤く染めて。

七枝の中でガラガラと大きな音を立てて、大切な何かが崩れていった。

10

昨日から、何だかとんでもないことばかり起こっているような気がする。

七枝はベッドの中で眠るに眠れず、悶々としていた。できればさっさと眠ってしまって、『あれは全部夢だったのよ』と、清々しい朝を迎えたくて、晩御飯もそこそこに風呂も入らずベッドに潜り込んだというのに、気付けば時計が深夜二時を指している。

あぁ、明日……いや、今日も学校なのに。

いや、いっそこのまま寝不足の体調不良を理由に学校なんてサボってしまおうか。安直な逃避思考が頭をよぎる。どうせこのまま十日もすれば冬休みだ。

しかしそれでは、由香との約束を破ってしまうことになる。それに、この朝も谷口と約束を交わしたような気がする。

図書館で谷口が顔を真っ赤にしながら、一崎から飴をもらったことを認めてしまったあの瞬間から、もうどんな会話をどんな流れで交わしたかも記憶に残っていないのだけど、帰り際に谷口がおずおずと、

『三島さん、また明日、電車でね』

そう言うから思わず、

『うん、明日……』

返事をしてしまった。

そこから先の記憶が無い。谷口はそれから何を言ったんだっけ？

ただ一つだけ覚えているとすれば、一崎が登場してから最後まで、谷口は七枝から視線を逸らしたままだった。

――　あぁ！　もう！　あたし、何か変なこととか言っちゃったりしてないかな！？　――

彼らの話の中身を覚えていないのと一緒に、自分がその後何を喋ったかも記憶に無かった。

眠れない。色々な事が立て続けに起こりすぎて。気になることがありすぎて。自分が何を考えればいいのかも、解らなくて。
けれどこの夜、眠れないのは七枝独りではなかった。
一崎も谷口も、そして夢の中で逢瀬を楽しんでいるはずの由香までもが眠れないまま、月曜の朝を迎えていた。

「谷口君、おはよう……」
「おはよう、三島さん」
昨日の今朝で、なんとも気まずい駅での逢瀬になってしまった。
谷口は相変わらず七枝の目を見ようともしない。
七枝もまた、『おはよう』以外の言葉が出てこない。聞きたい事も確かめたい事も山ほどあるのに、口を開くととんでもない事を言い出してしまいそうで、怖い。
――　あぁ、今からでも遅くないから、昨日のアレは全部ジョーダンだと誰か言って　――
しかし聞こえてくるのはサラリーマンが新聞をめくる乾いた紙の音と、ガタンガタンと足元から響く規則正しい電車の走る音だけ。
時折バランスを崩して、谷口の肩に触れてはドキリと緊張をしてしまう。それは谷口も同じなのか、七枝の肩がぶつかる度に、びくりと腕が震えていた。そんな中で、
「あの、三島さん……」
谷口が急に話しかけてきたから、七枝は危うく心臓を止めてしまうところだった。
「な、何かな？」
「昨日の……」
――　ちょっと待って！　――
心の中で瞬時に叫んだ。
この電車の中でその話し？　そりゃ混んでいるわけではないけど、全く人が居ないわけでもない。なのに『昨日の』？　っていうか、いきなり本題？

同じ電車に乗り合わせた人が皆、七枝と谷口の会話に聞き耳を立てて、注目しているような錯覚に陥ってしまって七枝は、
「ちょっ、ちょちょっ……待っ……」
呂律の回らない口で谷口の話しを止めようとした。けれど谷口はそんな気持ちに気付かないまま話し続ける。
「昨日の、途中になっちゃったプリントだけど、一応家に帰ってから要約とか作ってきたから。良かったらチェックしてみて？　やり直した方がいい所も例題作ってきたから」
鞄からレポート用紙の束を出して七枝に渡した。
「あ、うん……」
すっかり忘れていたが、昨日本来の目的はコレだったのだ。あんなにすったもんだの逢瀬になってしまったのに、谷口は律儀にも七枝の答案用紙を持ち帰り、例題集など作ってきてくれたのだ。
「ありがとう谷口君」
――　なんていい人　――
こんなにいい人が、こんなに優しい人が何でよりにもよって、あの一崎なんかに。
渡された用紙を鞄にしまいながら七枝は、胸の中で一崎への悪態をついた。
「でね、三島さん。昨日はごめんね。何だか変なことになっちゃって」
水が上から下へ流れ落ちるような自然さでさらりと謝られて、七枝は一瞬彼が何を言っているのか理解できなかった。
「孝ちゃ……一崎君がね、三島さんに電車で会ったら『昨日は悪かった』って言っておいてくれって。勉強の邪魔しちゃったの、気にしてたみたいだから」
――　本当に邪魔だったわ！　――
しかも谷口から“孝ちゃん”なんて呼ばれて、谷口を“大樹”なんて呼びすててていたのを思い出してまた腹が立つ。しかしその怒りを押さえ込んで引き攣って震える笑顔を浮かべた。

「そう。うん分かった」
「あいつ、いい奴だろ？　クラスでも人気者みたいだし」
「そうね……」
――　特に女の子にね　――
「剣道で結構強いらしいのに、勉強もできるだろ。すごいよね」
――　何で？　何でそんなに一崎を嬉しそうに褒めるの？　――
「だからさ、三島さん……あんまりあいつの事、怒らないでやってくれないかな？」
「あたし怒ってなんか」
「そう？　昨日随分言い合ってたから……でも一崎君も後で反省してたんだ。『邪魔して悪かった』って。勉強中断させちゃったの、すごく気にしてたから」
「はぁ……」
――　谷口君、もしかして解ってない　――
谷口の口ぶりから、七枝は一崎と相当な口論を交わしたのだろう。けれどそれを谷口は『勉強を中断されたから』と信じているのだ。どうしてそう思われたのか、七枝は口論の経緯が本当に思い出せなくて若干焦りもしたが、谷口にこの恋心を気付かれていないらしいと判断するには充分だった。
それならいい。いつかは告白するのが夢だったけれど、こんな形でバレてしまっては最悪じゃないか。七枝は僅か一秒程度の間でその最悪の事態を想像して蒼褪めた。そうなったなら気まずすぎて友達ですら居られなくなってしまう。
「大丈夫よ。もう全然怒ってないから。谷口君も勉強忙しいのに、あたしの為にこんなに例題作ってきてくれたんだもん。ごめんね。でも、ありがとう」
「三島さんが頑張ってるから。唯一の同窓生だし、一緒に受験勉強した仲だもん。出来る限り応援するよ。だから、これからも頑張ろうね」
「うん、頑張る」

嬉しい。例えそれが『友達』という枠内であっても、谷口から寄せられる純粋な好意が嬉しかった。
このまま同じ高校に通っていれば、卒業するまで残り二年と三ヶ月、谷口と同じ学生生活を共有できるのだ。その為なら
――　一崎なんて障害、乗り越えてみせる……！
電車が駅に滑り込む。ドアの開く音が、短い朝の蜜時の終わりを告げる。二人並んで改札を抜ければ、そこから先は他の生徒も居るから七枝は親密な会話を避けるようにしていた。誰かに『付き合ってる』と思われて、そういう噂でもされて、それに照れた谷口が他所他所しくなってしまうのが怖いのだ。
目の前に改札が近づく。今日の甘い時間は終わり……でも今日もとってもいい朝だった……そう思いながら定期を出そうとしている七枝に、谷口が急に顔を近づけてきた。
――　えっ？　――
何事？　驚く七枝に、
「本当は昨日、ちょっと妬けちゃったんだ。一崎君と三島さんが仲良くって」
――　何？　それ、どういう意味？　――
七枝が振り返ると、耳まで赤く染めた谷口がふっと視線を逸らして足早に改札を通りすぎてしまった。追いかけて聞きなおそうとしながらも、早足で歩く谷口に追いつけないまま校門をくぐる。靴箱でやっと追いついてみれば、
「それじゃ、今日も頑張ろうね」
すっかりいつもの谷口に戻ってしまっていて、あの一言の意味を聞く余地も無かった。
独り七枝がとぼとぼと教室に入ると、自分の席を中心に朝から賑やかな輪ができていた。
いや、正確には七枝の隣、一崎の周りに、だ。
七枝の椅子を占拠しているとりまきの一人に『ごめんね、座らせ

て』と席を空けてもらいながら
――　自分の席に座るのに何で謝らなきゃいけないの　――
独りごちながら隣をちらり見る。
「やぁだぁ、ほんとぅ？　一崎君ってばぁ」
「でも、そういうのってぇ、一崎君っぽくていいよねぇ」
どういう会話が成立しているのかわからないけれど、とにかく朝からけたたましい。その中心でいつもの冗談でも言っているのだろうか。
ここでも昨日の一件を思い出してちらり見た一崎の笑顔からは、いつもの爽やかさを感じることはできなかった。
――　そりゃそうよね。あんな現場に立ち会っちゃったんだから　――
ほうっと溜息を零す七枝とはうらはらに、一崎の隣でにこやかに愛想をふりまいていた水上が、七枝の溜息を耳ざとく聞き取って
「あらぁ三島さん、おはよう。いつの間に来てたのかしらぁ？　ぜんっぜん気付かなかったわぁ」
得意気になって声をかけてくる。
「おはよう、水上さん」
何がそんなに嬉しいのだろう……挨拶を返しながら見てみれば、なるほどと納得がいった。
一崎の肩に腕を回し、頬と頬がくっつくほど顔を近づけて、携帯で写真を撮っているのだ。
一崎が他の生徒から写真を撮られたり、頼まれて一緒に映るというのは、さほど珍しくもない話だが、ここまで近い距離で画面に収まる相手といえばやはり、幼稚園の頃から幼馴染の水上くらいのものだろう。
今までならこんなミズが見の得意気な表情を見ても、何とも思わなかったのに……今日は幸せな水上の笑顔がとても切なく映った。
――　こんなに美人で、一崎君一筋に想っているのに　――
一崎の想い人は……

思わず伏目がちにうつむいてしまった七枝の心情を水上は間違って受け取った。
「あらぁ、ごめんなさいねぇ。羨ましかったかしらぁ？　良かったらぁ、三島さんも一緒に撮るぅ？」
「ううん、あたしは……」
「遠慮しないでいいのよぉ、ほらぁ、私がいいのよって言ってる間にぃ」
遠慮ではなく本気でお断りしているのだけど……しかしあまり嫌がっていると違う意味で水上の機嫌が悪くなる。せっかく今日は上機嫌で、少々のことでは吊るし上げの対象にならないかもしれないのに……七枝はしぶしぶ一崎と肩を並べた。が、水上の満面の笑みの仲で、目だけが『それ以上くっつくんじゃないわよ』と鋭く光っているのを見つけて、ちっちっ、と距離を置きなおしパシャとシャッターの切れる音を聞いた。
その一枚を最後に予鈴が鳴る。一崎の
「おい、先生来るぞ。席に戻っとけよ」
の一言を合図に、バラバラと親衛隊たちが散っていく。水上だけが最後まで名残惜しそうに「またぁ、休憩時間にねぇ」と何度も振り返りながらゆっくりと、ゆっくりと席に戻った。
七枝もまた、小さな溜息と共に自分の机に向いなおす。
――　いけない、こんな事に関わっている場合じゃないんだわ
――
七枝は急に《もう一つの大事な事》を思い出して教室の中をぐるりと見回した。
――　あれ？　――
探す目当ての人物が見つからない。
――　そういえばあたし、由香の席知らなかったっけ　――
とはいえ、狭い教室の中、これだけ探して見つかるはずない……
しかし目的の小さな頭は見つけられなかった。
少し遅れて入ってきた担任が出席を取り始める。何人かの生徒が

名前を呼ばれて返事をしていく。そして……
「滝本」
……
「滝本？　今日も休みか？　誰か聞いてないか？」
担任は七枝の所で視線を止めた。そういえば金曜の夕方、由香の住所を教えてもらうため先生に連絡網で電話をしていたのだ。先生は当然七枝が由香に会いに行ったものと、
「三島？」訊ねるように声をかけた。
「すいません、今日は来るって言ってたんですけど」
「調子悪いのか？」
「……ちょっと……」
何と答えたものか、悩みながら曖昧な返事ほする。
「疲れが……なんだか、……」
「会って来たんだろう？　どんな具合だった？」
「えっと、ずっと寝てて起きれないみたいでした」
「まぁ、冬休みの課題のこともある。僕からもう一度連絡を入れよう。ありがとう三島」
嘘じゃない。事実、由香はずっと寝たきりだったのだから。

11

――　でも、約束したのに　――

何故かしら。何もかもが上手く行かない。まったくあの夢以来ロクなことがない。

七枝は歯がゆさを噛みしめた。滞りなく授業は進むが、七枝の頭の中にはまるっきり入ってこなかった。

『三島』

隣から囁くような声が聞こえて七枝は視線だけそちらを向いた。

――　何よ、今あんたの相手なんかしてる気分じゃないのよ　――

『悪ぃ、消しゴム貸してくれ』と一崎が指で机をコツコツと叩く。

――　しょうがないわね　――

黙って消しゴムを渡すと、一分と経たないうちに戻ってきた。

『もういいの？』

『あぁ。さんきゅ』

七枝の掌に、小さな消しゴムと一緒にカサッという違和感が押し付けられた。掌を開くとノートの切れ端がくしゃくしゃに丸まってくっついている。

――　何？　――

《昼休みにこの間の場所で。話したいことがある》

――　はぁ？　――

何だっていうんだろう。眉間に皺を寄せながらこっそり一崎の顔を覗くと、彼は真っ直ぐ伸ばした片掌を鼻先に押し当て、『頼むよ』声を出さずに唇を動かした。

できれば、昨日の出来事は全て夢だと思っていたかった。

今朝、ちらっと谷口に囁かれた一言も、気のせいだと思いたい。

そう。全ては夢で、気のせい。

だから一崎の話なんか聞きたくない。どうせ谷口の話に決まって

いる。そんな話、無かったことにして無視してしまいたい。
だけど。
――　行かないわけにはいかない、よねぇ　――
飴を渡した時に『どんな話でも聞くよ』と言ったのは他の誰でもない、自分自身なのだから。それに、どうせ聞くならちゃんと聞かなければ、とも思った。
どうして？　谷口君と？
何で？　谷口君を？
よりにもよって、谷口君なの……
そして谷口君は……？

「食わねぇの？」
音楽室のベランダで、二人人目を忍ぶようゆしゃがみこみ弁当を広げた。
今日はうっかり誰かに聞かれたりしないように、中からもしっかり鍵をかけてきた。
「あんたは食欲あって、いいわね」
開いた弁当を食べるでもなく箸で弄ぶ七枝に反して、一崎はがつがつと食べている。
「食わなきゃ持たないからな。部活もあるし」
偉いもんだわ……。昨日の今日でよく食べる気分になれるものだ。七枝は昨日からすっかり食欲が無くなって、殆ど何も食べていない自分と比べて呆れるのを通り超して感心してしまう。
一崎はといえば、忙しなく箸を動かしながらも、ちらちらと瞳だけ動かして七枝を見つめた。
自分と違ってまるで食べようとする気配が無い。開いたままの弁当箱に、カチカチと箸を当てながら時折吐き出す溜息が、七枝の気持ちを真っ正直に表しているようで、呼び出したはいいものの、どう話しを切り出したものか悩みあぐねていた。
間が持てない。七枝に話しかけようとして言葉を口にしようとし

て、戸惑ってしまう。
躊躇いを隠すようにご飯を口に放り込んで、出なかった言葉もそのまま一緒に飲み込んでしまう。
しかしその繰り返しもとうとう年貢の納め時を迎えたようだった。弁当の隅に残った米粒まで丁寧に拾いながら、最後の一粒を食べてしまうとさすがにこれ以上は間を持たせられない。横を見なくとも隣から
――で、話って何？――
そんなオーラが自分に向けて漂って来ているのが痛いほどにわかる。
「あのさ、三島……」
説明を要求して放つ七枝の無言のオーラに一崎はやっと屈した。
「あの、三島。もしかしてオマエ大樹のこと……」
七枝はばさりと髪を振り乱し、一崎を振り返る。
――今聞いてんのは、そんなことじゃないわよ！――
睨み付ける鋭い眼光に一崎は怯んだが、同時にその強い瞳の中に答えを見たようで、自分の質問が愚かだったと気付き頭を下げた。
「……悪ぃ……」
「別に、一崎君が謝ることなんて、無いでしょう」
「いや、俺何も気付かなくて。この二学期の間中、いつも三島と一緒に居たのに、三島が何考えて誰を見ていたのかなんて全然気が付かなくて……」
――そりゃそうだわ――
秘密に、当の谷口にすら秘密にして、大事に育ててきた恋心なのだから。一崎に簡単に気付かれるようでは意味がない。
「でもよく考えてみたら、解りそうなもんだったのにな」
「はぁ？」
「だってお前ら二人だけだろ、あの中学から来てんの。毎日同じ電車に乗ってきて、顔見合わせて……意識し合ってってもおかしくないもんな」

「別に、同じ中学だからって」
「三島さぁ」
言いかけて、一崎は一息言葉を躊躇った。
そう、自分は二学期になって七枝と席を隣にしてからずっと彼女と一緒だったのだ。授業で教室を移動する時も。
その度に七枝はいつも自分と同じ教室の前で一瞬立ち止まり、遠慮がちにその教室の奥を見ていた。それはいつも本当に一瞬のことだったから、多分他に気付いている人間は居ないだろう。
一崎がそれに気付くことが出来たのは、七枝の瞳が自分の目的と同じ場所を見つめていたからだ。
なのに、何故自分は昨日という日までその可能性に気付きもしなかったんだ……
答えは明白だ。
――　俺が自分の気持ちにばっか、かかずらってて、三島の気持ちなんか見向きもしてなかったからだ　――
そればかりか、谷口と恋仲になれた嬉しさで顔合わせまでしてしまった。
「ごめん、本当に」
「ごめんごめん言わないでよ」
何だかとても惨めになってくる。それをどう説明すればいいのか。七枝は自分が、想い人をよりによって男なんかに盗られて、しかもその仲を引き裂こうとしている哀れな悪者のように思えてきた。
何て情けない立ち位置だろう。
言葉詰られてしまった七枝に、一崎は何も言えなくなってしまった。
午後の授業の予鈴が鳴る。
七枝はとうとう弁当をご飯一粒も口にしないまま蓋を閉じた。
一崎はゆっくりと立ち上がりながら「俺、先に行ってるから」と呟いた。
頷くこともしないで黙ったままの七枝に、

「次の授業、センセーに三島は気分悪いみたいで休んでます、て言っとくよ。だから飯、ちゃんと食っとけよ」
そのまま窓枠を超えて教室を出て行こうとして、けれど一崎は最後にちらりと振り返り、七枝の肩が震えているのを見て足を止めた。
「三島」
相変わらず返事は無い。
「二週間だから。あ、いや、もう十日切っちまったか。俺さ、最初から覚悟してっから」
七枝は振り返りもしない。
「終業式終って、クリスマス頃かな……それまでだって、覚悟して大樹に告ったんだ。だから……」
本鈴が鳴った。
「だから、それまでだから……」
軽やかなチャイムの音に、ともすれば掻き消されてしまいそうな一崎の声を、七枝は聞き逃さなかった。その背中に一崎は続ける。
「クリスマスが終る頃には、ちゃんと三島に返すから。それまで……」
「一崎君はそれでいいんだ？」
「やっと返事してくれたな」
「たった二週間でいいなんて程度の気持ちなんだ！？」
窓の向こうから嗚咽交じりに責めてくる声が震えて響いた。しかし一崎は微塵も怯む事無く、続けて答えた。
「うん。いいんだ」
「ちょっとぉ！　何それ！」
その程度の軽い気持ちで、谷口君の気持ちを操作したの？　七枝は湧き上がってくる怒りを止められない。
反して一崎はとても涼やかに、薄い口端を緩めて笑んだ。
「だって、本当だったら一生こんな付き合いなんか出来ないんだぜ。ずっと、ちょっと仲のいい幼馴染のままで。でも、それでいいと思ってたんだ……あいつの傍に居られるなら、それで、って」

だけど、飴の話を聞いて欲が出てしまった。
勿論、本当の効果なんて期待なんかしていなかったけれど、もしかしたら……と。
「玉砕して軽蔑されても。それでも俺の気持ちを伝える最後のチャンスかもしれない、このまま二度とあいつの声も聞けない遠い関係になっちまったとしても……って、思っちまったんだ」
もしかしたら気持ち悪がられて、永遠に疎遠になってしまうかもしれない。けれど、この気持ちを知られないまま友達関係を続けていって、いずれ谷口に彼女が出来た時に、
「後悔しないか？　って何度も自分を問い詰めた」
その結果、谷口は衝撃の告白にしばらく戸惑い、
『しょうがないなぁ、もう。孝ちゃんはバカなことばっかり言って』
困ったように笑いながら、だけどおずおずと飴を受け取ったのだ。
「まるで俺、脅迫してるみたいだった……あの時はもうダメだ、こいつは二度と俺に近寄りもしないだろうなって思ったんだ。『あ、引かれたな』って。あの瞬間は正直、こんな告白を導いた三島を恨んだよ。調子に乗っちまった自分の事なんか棚に上げてさ。もうあの朝は三島の顔も見たくないくらいの気分で朝練で暴れちまったら、……大樹が道場の外で……」
「いいよ、もう聞きたくない！」
「聞けよ！　二週間だって三島も言ったじゃないか」
窓枠を挟んで、気が付けば取っ組み合いのような体勢になってしまっていた。
耳を塞ぐ七枝の腕を引っ張りながら一崎は話を続ける。
「俺も大樹も男同士なんだぜ？　こんなの在り得ねぇだろ？　俺だってダメ百パーだって決め付けて告ったんだ。なのにこの結果だ。あの飴、本当に本物だったんだよ。ってことはさ……」
七枝はハッと思い立ち、我に返った。
本当に本物だった、飴の効果。

期限付きの。
七枝は一崎の顔をじっと見つめた。一崎もそれに穏やかに答えた。
「だから、覚悟してるって」
一崎の恋は二週間で終るのだ。残りあと十日も無い。
「いや、覚悟決めたってのが正しいのかな。効果が切れればあいつも元のあいつに戻るだろうから……いや、俺、飴を渡すときにバカ正直に言っちまったからむしろマイナスかな。男に惚れてるようなヤツなんか正気に返れば気持ち悪いだけだろ」
多分友達にも戻れない。それこそが一崎の覚悟なのだろう。
「でも俺、今すんげぇ幸せなんだ。ずっと好きだったあいつが俺の事を好きでいてくれてる。だからこの限られたチャンスを大事にしたいんだ。効果が切れても、幸せだったって、いつでも思い出せるように」
七枝は自分の耳を両掌で覆いながら、身震いを感じてしまった。何なんだろう、この気持ちは。『幸せなんだ』と語る一崎への、悔しさに雑じって感じる、震えるような何か。けれどその何かを無理矢理
――寒いからよ――
打ち消した。
自分が震えてしまっているのは、寒いからだと心に言い聞かせた。
事実、風は冷たかった。
「ごめんな、三島。でも今だけ。残り十日くらいだよな。この今だけでいいから。夢で……いいから」
一崎の訴えに、頷くことも首を横に振ることもできない。
「……三島、こっち来いよ。ベランダは寒いだろ」
気遣ってくれる一崎の気持ちにすら、応えたくない。
俯いたまま身動きもしないでいると、ガラリとドアの開く音が聞こえて、七枝は耳だけをそちらに向けた。
「先、帰ってるから。センセーに三島は具合悪そうだって、適当に誤魔化しとくから……早く中入れよ」

ぴしゃりとドアが閉まって、やっと七枝は顔を上げることが出来た。

本当に寒い。体も、心も。

11（後書き）

…やっと三分の一…（、凸、）

12

とりあえず音楽室の中に入って、窓を閉める。すぐには教室に戻る気にもなれないで、窓の外をぼんやりと眺めていた。何も考えることができない。一崎の告白がぐるぐると頭の中で渦を巻いている。

ふっ、と、思考の渦がある一箇所で止まった。

『あの飴、本当に本物だったんだよ』

――　そりゃそうよ。お兄ちゃんが開発したんだもの　――

その効果が《恋を叶える》という突拍子なさすぎたせいで、いまひとつ信じる事が出来なかったけれど、蓮が作ったものであるからには何かしら起こるだろうは予測できていた。

何が起こるかが本当に計り知れなかったから、谷口に食べさせる事が出来なかったのだから。でも、こんなことになるなら……

――　やっぱり思い切ってあの朝谷口君にあげれば良かった。一崎君なんかにあげたりしないで　――

でも、もう遅い。

――　遅い？　ううん……

まだ、間に合うのかも。

七枝の胸に策が過ぎった。蓮の説明を思い出す。

一度飴に染み付いたフェロモンは、その後で他の誰かが握り締めても上書きされることは出来ない。

けれど、飴を食べた相手に違うフェロモンの染み付いた飴を食べさせれば……

谷口の、一崎に芽生えた恋を忘れさせて自分に向きなおさせることができるかも、しれない。

ポケットの中に残っていた最後の飴を取り出すと、七枝は包みを剥がしてそのまま握り締めた。

――　三十分……

明日の朝も、谷口に会う。

チャンスなら幾らでも巡ってくる。
そうしたら、図書館ではにかんで見せたあの笑顔も、自分のものに
――　なるのかしら　――
一崎の隣で照れて笑ったあの笑顔が。
――　って！　何考えてるのよ！　あたしは！　――
――　バカじゃない？　――
カァッと血が頭に上って、ぐらりと視界が揺れる。倒れそうになってしまって、両腕で包み込むように頭を抱えた。
何、真剣に考えてんのよ？　一崎君だって言ったじゃない。男同士の恋愛なんて冗談じゃない、って。そうよ、効き目が切れて谷口君が正気に戻ったら、またいつもの谷口君に戻るんじゃない――
そう、いつもの谷口に。
自分と一崎の関係を聞かれたあの朝。
あれはまだ一崎に飴を渡す前のことだった。と、いうことは、あの日の谷口はまだ一崎と恋に陥ってなんかいなかったはずなのだから、あの質問は僅かでも自分に好意を寄せてくれていたのは本当のはず。
「そうよ。バカみたい。何を男と張り合おうとしてるの？　一崎君と谷口君の関係なんて、所詮飴の効果だもん。あとちょっとで終っちゃうんじゃない」
淡々と告白をしてくれた一崎の切な気な横顔がふと脳裏を過ぎってズキリと胸が痛んだが、七枝は強く拳を握り締め、淡く浮かんだ同情の気持ちを打ち消した。拳の中で小さな飴がミシリと悲鳴をあげたが、それすらも無視をしてひとりごち続けた。
「クリスマスが終る頃には何もかも元に戻るのよ。谷口君の気持ちだって……そりゃぁクリスマスを一崎君なんかに譲るのは悔しいけど……」
元よりクリスマスを谷口と過ごす予定なんて無いのだけれど。
『覚悟決めたってのが正しいのかな』
ズキリ。また胸が痛む。この痛みは一体何だろう。

七枝は、キッと頭を上げてベランダの窓を勢いよく開いた。冷たい風が頬を突き刺しながら背後へと流れてゆく。
「あたしは……こんな飴なんか要らないんだから！　一崎君は男同士だったからこんなものの力を借りなきゃいけなかったのかもしれないけど、あたしは女の子なんだし、こんなもの必要ないのよ」
飴を握り締める手を思い切り良く振り上げる。
本来なら叶う術すらなかった、一崎の恋。
胡散臭い飴の効果に頼るしかなかった可哀想な恋。
でも、
「あたしは絶対こんなもの使わないんだから」
冷たい空気の中、降り注ぐ陽の光を浴びて、飴はきらめきながら七枝の掌から放たれ、緩い放物線を描きながら姿を消した。
「これでいいのよ、ね」
正直に言えば今でも一崎が憎くないわけではない。
羨ましくないわけでもない。
けれど……
――　それに、あの時誓ったじゃない　――
七枝は決めていたのだ。蓮の作るサプリの力には頼らない、と。
自ら『鬼門』と呼ぶ忌まわしい中学時代に。

今日が五時間で授業の終る日で良かった。
七枝は思いながら、放課後の人が居なくなった教室へ戻った。
あれから授業が終っても、しばらく音楽室に閉じこもっていたのだ。
昼休みから一崎と一緒に姿を消していた事で、水上達に追求されたくはなかったし、何よりもまだ気持ちが治まっていない。
一崎の気持ちも、二週間だけ、という覚悟も充分解ったけれど、だからといって納得なんかできるわけもない。
こんな気持ちのままで、今は一崎と顔を合わせたくなかった。
帰る生徒が帰り、部活に行く生徒もそれぞれに散らばって教室か

ら皆が出払ってしまうのを待って、鞄を取りに戻れば案の定、そこはガランと静まり返っていた。
机の中のものを鞄に仕舞おうとして取り出すと、レポート用紙が数枚、軽い音を立てて滑り落ちた。
――　何？　――
見ればどこかで見たことのあるような文字で、びっしりと五時間目の授業の内容が書かれている。深く悩むまでもなく、七枝はすぐにその文字の主が解った。
――　一崎君　――
黒板を写しただけではない。教科書の何ページであるとか、簡単なメモ書きまで入っている。
自分も途中からの授業で慌しかっただろうに、何て生真面目な男だろう。
谷口の一件を心の底から詫びているのか、それとも人の良い一崎の元々の性格だろうか。レポート用紙の最後に書かれた『また明日』という一言を見て、きっと両方なのだと思い、一崎が男女を問わず好かれる理由の一旦を見たような気がした。
今まで知る由も無かった一面が次々と現れて見えてくる。
――　だからって、これと谷口君のこととは別問題よ　――
七枝はレポート用紙を乱暴に鞄に詰め込んで、
「さて、急いで帰らなきゃ」
踵を返した。
七枝の頭を悩ませる問題はこれだけではないのだから。
――　電話でいいかなぁ。直接行った方がいいような気もするけど、土曜に行ったばっかりだし……でも気になるし　――
由香が約束を破って、欠席してしまった理由が気になる。
結局また寝てばかりいるのだろうか。
もう一度家を訪ねて直接会って、話をするのが一番いいのだろうけど、何度も同じ問題で押しかけるのも帰って逆効果のような気もする。

土曜の時は納得してもらったと七枝は思っていたが、由香にとってはそんなに簡単な問題ではなかったのかもしれない。
――　そっとして欲しいのかも、しれないし　――
由香の閉じこもりも、一崎と同様に時が過ぎれば終ってしまう問題なのだ。このまま眠り続けてザナン様との逢瀬に二週間を費やしたいと由香が思い返したのなら、七枝にはもうどうしようもない。
どんな説得も効かないだろうし、学校を休むことで内申に響いたとしても、案外由香自信は本望なのかもしれない。
――　それにまだ一年生だもん。先生の心証が悪くなったとしても、挽回する時間はいっぱいあるわ　――
とにかく、七枝は由香を一度は説得したのだ。そしてその時は理解してもらったのだから、それでも由香が登校しないと決めたのなら、そこから先は由香本人の責任の筈だ。
家に帰って電話をしてあの件には触れずに、どこまで授業が進んで、冬休みに出る課題の説明だけすればいい。
「うん、そうしよう」
由香の家に行くか行かないかの選択を分ける路上で、七枝は『もうこれ以上は由香の事に深入りしない』と自分に言い聞かせながら駅に足を向けた。

「三島さん」
改札をくぐる直前で蚊の鳴くような声で呼び止められ、「ひぁ！」素っ頓狂な声を上げてしまった。
今、自分の頭の中を占めている、ここに居るはずのない人間が背後に急に現れた。
「由香……ちゃん」
「由香でいいよ」
「そう？　あ、じゃぁあたしも七枝でいいわ」
「ん」
いや違う。こんな立ち話をしている場合ではない。由香もお互い

を何と呼ぶかを決めるためにここまで来たわけではないだろう。
それにしても何で授業も終ったこんな時間に、しかも制服で……
「もしかして朝から来てたの？」
「うん。でも実際にここまで来ると何だか入り辛くなっちゃって」
「大丈夫だよ。先生怒ってなかったし。心配してたみたいだよ」
「うん。ありがと」
「明日はちゃんと登校しなよ。せっかくここまで来たのに、勿体無いよ」
自分で言っておきながら、何が勿体無いのか解らないけれど。
「あの、それより三島……七枝、さん……ちょっと今からいいかな？」
「うん。あ、でもここじゃ人の迷惑になるかな。どこか……」
先日一崎と入ったハンバーガーショップを思い出す。七枝が利用する、店がある側のホームを帰りに使う生徒が殆ど居ないおかげで他の生徒の目に付かなくてすむ。ここなら聞き耳を立てられることもきっと無い。
「あそこならゆっくり話せるよ」
七枝は由香の手を引っ張った。

「ごめんね。今日は登校するって約束したのに」
席につくと開口一番で頭を下げながら由香は謝った。
「今日先生に聞かれたから、とりあえず具合悪くて電話にも出れないみたいって言っといたけど……本当だったら今日家庭訪問に行くつもりだったらしいよ」
「ごめんなさい……」
「後から電話連絡が来ると思うから、それは出てね。先生も連絡事項とかあるみたいだし」
「ん、わかった」
また、由香はちょこんと頭を下げた。
「今日はどうしてたの？　まさか朝来てずっと外に居たわけじゃな

いよね？」
今、制服を着てここに居るということは本当にちゃんと登校するつもりだったのだろう。それなら放課後になる今までどうしていたのか。七枝の問いに由香はもじもじとシェイクのストローを弄んだ。
「……ずっと一日ウロウロしちゃってた……」
「はぁ？」
朝からずっと、この寒空の下を？
「何だか……無断欠席してたし……」
後ろめたかったのだ。
本当の病気でもないのに、何日も無断欠席してしまったことか、或いは高校生らしい生活も忘れて煩悩のままに幾日かを過ごしてしまったことに対してか。とにかく、そうした事に対して“なぁなぁ”で済ませられる性分ではないのだろう。七枝は
「あぁ、そうね」
何とはなしに解ったよな気がして、曖昧に返事をした。
「ごめんなさいね。私の勝手なお願いで七枝さんに迷惑ばっかりかけて」
「いや、そんな……」
そもそもあの飴を自分が渡さなければ何の問題にもならなかったのだが、今更それを言ってもどうしようもない。七枝は言いかけて思いなおした。
「そう思うなら、明日は学校においでよ」
「うん。頑張る」
頑張る。
学校に来ることはそんなに頑張らなければならないことなのか……ふと思ったが、そういえば自分も今朝は休んでしまいたい憂鬱と戦いながら登校してきたのだ。
由香もまた、期限付きの恋に許された期間だけ、溺れて暮らす誘惑と戦いながら制服を身に纏ったのかもしれない。
恋する事情は違えども、この《頑張る》気持ちはきっと同じだ。

13

由香の相手は現実の人間ではないし、かなり七枝には理解し難い恋ではあるけど、こんなにひたむきになるからには一世一代の恋なのかもしれない。

『そんな恋愛、在るわけないでしょ』そう思いながら、だけど由香の逢瀬をかなえた原因を作ったのが自分であるという罪悪感だけで理解して《あげて》いた自分に、改めて気付かされた。

もしかしたら『どうせそんなの叶うわけないんだから』と、軽んじていた部分もあったのかもしれない。『効果が終ったら終っちゃう恋よね』と、哀れむ気持ちもあっただろう。

――　恋愛に頑張る気持ちは、一緒なのに　――

自分こそ、谷口恋しさのためだけに、進路指導の教師から口端で笑われながらも狂ったように勉強に明け暮れたというのに。

「ごめんね、あたしこそ」

思わず、謝ってしまった。

「え？」

何を謝られたのか解らない。由香は目を点にしてきょとんと聞き返した。

けれどまさか、七枝は自分が由香に対してそんな思いでいたことなんてとても言えない。

「いや、そもそもあたしがあんな飴なんかあげたから……えっと、あげなかったら普通に、こんなに……学校休んだりとかさ、しなくても良かったのに……って」

しどろもどろになりながら、とってつけたような言い訳をした。

「ううん。土曜にも言ったけど、私本当に七枝さんには感謝しているの。好き、好きって想いながら伝えることもできなかった。苦しかった。そんな気持ちに、未来をくれたんだもの」

「未来って……」

「夢見て目覚めるとね、最初の頃はすごく不安で怖くて……効果が切れたらこの幸せも無くなるんだって。だから起きてしまっても無理矢理また目をぎゅうって瞑って、布団に潜り込んでたの。眠ればまたザナン様に会える、幸せでいられる、って。起きてしまわなければ不安も何も襲ってこないから」

「うん……」

「でもね、七枝さんがうちに来てくて、すっごく私のこと一生懸命に考えてくれたり、心配かけちゃったりして、こんなんじゃいけない……って」

あの時は由香のために考えたり心配したりしたわけじゃない。飴を安易に渡してしまった自分の失態を誤魔化したくて心配という行為に摩り替えただけだ。

由香が真剣に感謝している気持ちを知ると七枝は、自分勝手だった行為を恥じた。穴があったら入りたいとはまさにこの状況だ。

「せっかく、七枝さんがくれたこのチャンスだもの。ただ眠って会って、その繰り返しだなんて勿体無いような気がしてきたの。ザナン様と通じ合えたこの奇跡を、効果が切れることで終らせたしまうのはいけないんじゃないかなって思ったの。始まったばかりの恋なのに……このままじゃ終ったら後悔しか残らないような気がして……」

気持ちは解る。だけど

――　何が言いたいの？　この子　――

七枝には由香の言動が予測不可能すぎて、嫌な予感しか巡ってこない。

「それでね、私、ザナン様との出会いからを全部書き出したの、昨日一日かけて。夜も二時間くらいしか寝なかったのよ。だから今日は凄く眠くて……あぁ、そうじゃなくて、とにかくこれ、良かったら読んでみてほしいの」

由香は重たそうな、大きめの茶封筒を鞄から取り出し、どっさりとテーブルに置いた。

開いたままの封からコピー用紙の束が見える。
「今の所、原稿用紙にすると二百枚くらいかな。折角だから私があのゲームを手にして、どうやってザナン様と巡り合ったか、とか、そんなことも書いてみたの」
予感は的中した。七枝は頭を抱えてしまった。最近嫌な方向にばかり勘が冴えている。差し出された包みから思わず目を背けてながら
「いや、でも……」
言い淀む。
いらない。読みたくない。現実の恋話ならともかく、こんなディープな恋話なんて。
確かに、『話聞くから』は言ったが、それは頭の中を素通りする程度のノロケ話のつもりだった。いくらなんでもこんなに分厚い恋愛自叙伝まがいの物だなんて、
――　濃すぎる　――
七枝の意識が半分飛びかけた。
偏見はしちゃいけないと今反省したばかりなのに、こんなもの現実の話であっても読みたくなんかない。それが架空のキャラクター相手なら尚更だ。
しかし由香はそんな七枝の心情に気付きもしないで、
「いいの。遠慮しないで。これコピーだから。でね、これからも掻き続けるつもりなの。夜早く寝て、たくさんザナン様とお会いして、朝ちょっと早く起きて夢がまだ温かく胸に猫っているうちに書くつもりなの」
――　そんな生々しいの、いらない　――
「そんなプライベートなこと、読むの悪いわ」
遠回しにやんわりと断ったつもりだったが、由香には通じなかった。
「大丈夫よ。記録っぽいのもつまらないから、読みやすく……」
由香は少しだけ視線をテーブルにずらし、ぽっと頬を染めた。
「しょ、小説みたいに……書いてみたの……」

「しょ……。はぁ……」
由香が照れる理由もわからないが、夢日記が小説になるという思考回路もまったく理解できない。七枝はどう返事を返せばいいのか、考えることも億劫になってきてしまった。
テーブルに視線を落としたままで、七枝の表情の変化に気付かないまま、由香は更に続ける。一度口にしてしまったらもう恥ずかしさは無くなったらしい。
「それに、他人の日記なんて読んでも面白くないでしょう？　だからそんなにプライベートって感じでは無いのよ。あ、日記はね、別に書いてあるの。私自分のために。これは七枝さんに読んでもらおうと思って、改めて書き直したのよ。だから、時間のある時でいいから読んでもらえると嬉しいの」
――　なんでそんなに無駄に熱心なの　――
危うく本音を口走りそうになるのを抑えながら、何とか返事をする。
「あたしのためなんて気にしないでいいのに」
「だって七枝さん、私の話聞いてくれるって言ってくれたけど……上手に話せる自信が無くて。だって、だって……」
「うん？」
「そんなの口にするなんて恥ずかしくて」
――　そんなのって、どんなのよ　――
夢の中で、どんな恥ずかしい逢瀬をしているの　――　突っ込みたい。けれどそれを聞くのもまた怖い。
由香が照れてもじもじしている僅か数分、七枝はたっぷり悩んだ挙句茶封筒を受け取った。
聞かされるよりも読む方がまだ遥かに気楽かもしれない。それに、『読みやすく』書いたという由香の言葉を信じるなら、そんなに恥ずかしい内容ではないだろう、と、思ってみた。
「時間作って読むね。ありがとう」
その一言に由香の表情がぱぁっと明るくなった。

「ありがとう！　本当に、ホントに誰にも話せなくて、でも皆みたいに好きな人の話もしてみたくて、でも出来なくて……それに実は、すごく自分って変かなって悩んだりもしたのよ」
――　変だわ！　――
心の中で叫びながら、七枝は違う事を口にする。
「そんなことないよ」
にっこりと微笑みのおまけまでつけて。
「ありがとう。七枝さんが聞いてくれて、とっても嬉しかったの。ありがとう」
繰り返される『ありがとう』に七枝はちくりと胸を痛めたが、由香の笑顔を見ると
――　これで良かったのかもしれない　――
思い直すことにした。
店を出て別れ際に、由香は明るい笑顔で言った。
「七枝さん、私明日は絶対に登校するから」
「うん。待ってる」
明日由香が登校すれば、この夢話の続きが届くのだろう。それを思うと心境複雑ではあったが、土曜に見た病人のようにやつれた由香の姿を思い返せば、
――　良かった　――
そう、心から安堵できた。
由香はもう大丈夫だろう。そんな気がした。

――　それにしても、本当に世の中色んな人が居るものだわ　――
由香と別れて一人プラットホームで電車を待ちながら七枝は、今日までの一件を反芻しながら改めて感心の溜息を吐いた。
オタクも同性愛も雑誌やテレビで知ってはいたけれど、まさか本当にそういう人と知り合いに……こんなにも濃い人間関係を結ぶ事になるとは思ってもいなかった。しかも、両方一度に。
――　あ、でも“変な人”なら家にも一人居たか　――

頭の中にぼんやりと、兄・蓮の顔が浮かぶ。
――　あれ？　でもあの二人はお兄ちゃんとはちょっと違うかな
――
重度のシスコンで、自ら語る将来の夢は『七枝が世界一幸せなお嫁さんになるのを見届けること』と言い切って、約束されていたはずの医者としての未来も棄てて、胡散臭さ満天な生薬会社に入り、日夜『七枝のために』と様々なサプリを研究し続ける兄。
思えばエリートコースを着々と歩んでいた蓮が、せっかく医大を卒業しながらも国家資格試験を放り投げて就職してしまったあたりから、両親は七枝に勉強のことであれこれ言うのをやめてしまったのだ。
曰く、『勉強ができるから、親の願うとおりの道を歩むわけではない。だったらせめて普通に幸せに』と。
とはいえ、そんな事を実際に口にして愚痴を言うような両親でもなかったので、何故彼らが道を逸れてしまった蓮を咎める事なく温かく迎え入れるのか、その真意は解らないのだが。
いずれにせよ、その蓮とあの二人を比べて考えると、恋愛に一途な為に今の状況になってしまっているだけなのだと思えば、由香も一崎も、そして谷口もすごく普通で、マトモに思えた。
「お兄ちゃんは何考えてるのかも解らないことがあるもんなぁ」
溜息を吐いたつもりで、つい考えていることが言葉になって漏れた。その直後に、『クス』と小さく笑う声が背後から聞こえた。
――　うわっ、あたし今、何か変なこと口走った？　――
背後の人は自分の独り言に笑ったのだろうか？　七枝がびくびくしながら振り向くと、その人は“後ろに並んでいる”というより、“密着している”と言った方が正しいほど近い距離で七枝を見下ろしていた。
――　近！　いつの間に……それに背ぇ高！　――
振り返ってみた七枝の目には、その人の肩しか見えない。そして、馴染みのある制服と、肩より長く下がった揺れるストレートの黒髪。

――　きれいな、髪　――
独り言を聞かれて笑われた恥ずかしさよりも、艶やかに揺れる髪に胸がときめいた。
――　すごく長いし、手入れ、大変だろうなぁ　――
そんな事を考えながら見惚れていると、また上の方から『ふふ』と笑みが零れて聞こえた。七枝は見透かされたようで、更に恥ずかしくなって正面を向きなおす。
――　あれ？　でも　――
ふっ、と疑問が沸いた。
――　九徳にこっち方面の生徒って、あたしと谷口君以外に居たっけ？　――
入学してからこのかた、同じホームで同じ制服の生徒を他に見たことなんて無い。
いや、でも見た事が無いだけで、実は居たのかもしれない。
ぐるぐると頭の中で思考の渦を巻いているうちに、電車がホームに滑り込んできた。開かれた扉に、その人も七枝に続いて入ってくる。
七枝が扉から一番近い吊革を握ると、その人もぴったりと寄り添うように隣の吊革を掴んだ。車内は人気も少なく、空席も随分在るというのに。
――　何？　何なの？　この人　――
彼女は七枝の隣に並びながら、何かを話しかけるでもなく一緒に電車に揺られている。
七枝が右に傾けば、その肩を追うように彼女も右へ。左に傾けばぴったりと離れない磁石のように一緒に左へ。カタンカタンと規則正しく。
――　誰なんだろう　――
どんな人なのか、見てみたいと思いながら顔を上げることができない。けれど揺れる髪から漂ってくる爽やかな香りに七枝は、悪い気はしなかった。

――　いい匂い。シャンプーかなぁ　――

カタンカタン……電車がゆっくりと駅に着いた。

――　この人、どこで降りるのかなぁ　――

七枝はそっと彼女から離れてホームに降り立った。すると、彼女も相変わらずぴったりとくっついたまま一緒に降りてきた。

いい香りに揺られていたいい気持ちが吹っ飛んだ。

14

七枝は自分の頭から、一気に血が引いていく音を聞いた。きっと今の自分は恐ろしいくらい顔面蒼白に違いない。

彼女は同じ駅で降りただけでなく、そのまま一緒に改札を抜け、七枝の家に向ってくっついてきているのだ。

――　何？　この人何なの？　あたし何か悪いことでもした？

――

近所で九徳に通っている生徒が居るとは聞いたことがない。しかもこんな美人、同じ町内なら一度は見た事があってもいいはずなのに。

七枝の脳裏に《女子高生、同じ学校の生徒に刺され》とか《同じ学校の生徒をストーカー》といった見出しがニュースのテロップよろしく流れる。

こうなると足を止めるのも、いきなり走り出すのも恐ろしい。

――　どーしよう、どーしよう……このまま家まで連れてっちゃってもいいのかな　――

歩き続けながら膝が小刻みに震える。とうとう、家の前まで来てしまった。

――　お……おかーさぁん　――

母親が家に居てくれればいい。

最悪の場合でも、同じ女同士なら母親と二人係で攻防すれば何とかなるかもしれない。お願い、家に居て。こんな時に限って買い物に出てるなんてやめて。

門をがちゃりと開けると同時に、玄関の扉が勢いよく開いた。

「七枝お帰り！　待ってたんだよ！」

「おーーーお兄ちゃぁん！」

何てタイミングよく出迎えてくれたのだろう。

否、蓮がこんな風に出迎える時は、七枝が帰ってくるのを二階の

窓からずっと見ていたのだとはだいたい分かっていた。いつもなら『何待ち伏せみたいな事』と苦笑いする所なのに。こんなにも蓮の出迎えが嬉しかった事が、今まで一度でもあっただろうか。

七枝は脱兎のごとく地面を蹴って、蓮の胸に飛び込んだ。

「どうした七枝。そんなにお兄ちゃんに会えたのが嬉しいか」

いつもだったら『そんなわけないでしょう！』突っ込む所だけど、今日は心底この兄の存在が嬉しい。蓮は胸に飛び込んできた妹をにこやかに眺めながら掌で頭をさらさらと撫でた。そして七枝の後ろに居た少女と目を合わせた。

「ところで七枝？　友達かい？　学校で友達が出来たんだね。良かったな」

彼女はちらりと蓮を一瞥しただけで、すぐにまた七枝へ視線を戻してにっこりと微笑んだ。

しかし蓮は自分がちょっと無視された程度では何ら気にしない。蓮もまた彼女から視線を外して七枝に問いかけた。

「見たところ上級生かな。名前は何て？」

「名前……」

名前どころか顔すらまだ拝んでいない、とはさすがに言えない。七枝が困り果てていると、

「そう……」

彼女が口を挟んできた。てっきり、自分から名乗るのだろうと思っていた七枝は、続く彼女の言葉で肩透かしをくらってしまった。

「七枝ちゃんっていうの。可愛い名前ね」

「はぁ？」

――　何言い出すの？　この人　――

振り返った七枝の目に映ったのは、純和風な美少女の艶やかな笑みだった。黒く長い髪、大きな黒い瞳。日本人形のようだ、と目を釘付けにさてしまった。あまりの美少女っぷりに呆気にとられてしまった七枝を、後ろから蓮がぎゅっと抱きしめる。痛い。その強さにたちまち現実に引き戻されてしまう。

「お兄ちゃん痛い……」
しかし蓮は七枝の訴えには返事もせずに、美少女を射抜くように睨みつけた。
「どうやら友達というわけでは無さそうだね」
「ええ。お友達っていうわけではないわね」
美少女も先ほど七枝をにこやかに見つめた眼と一転して、厳しく尖った視線を蓮に返した。
「友達でないのなら何なのかな。あまり妙な輩にうちの七枝と関わって欲しくはないのだが？」
「お兄さん……」
「見ず知らずの人間にお兄さん呼ばわりされる覚えはないな」
「っていうより、お父さんみたい」
彼女がクスと笑った。見事な攻撃だ。七枝を抱きしめる蓮の腕がぴくりと振るえ、コメカミに青い筋が浮きだった。
――　うわぁ……お兄ちゃんが怒ってる　――
「七枝、家に入りなさい。見ず知らずの人間ならお構いする必要もないだろう」
蓮はぐいと七枝を胸の中に抱え込んだ。
「ちょっ、お兄ちゃん」
引っ張られながら家に連れられる七枝の肩に、美少女は軽く手を添えふわりと耳元に唇を寄せた。
「七枝ちゃん、またゆっくりお話しましょう」
蓮が更に腕に力を込めて七枝を美少女から引き剥がす。しかし彼女はそんな彼の荒々しさなど気にも留めずに、最後に極上の笑みを振り撒いた。そして、蓮が七枝を家の中に放り込んでバタンとドアを閉めたのを合図に軽やかに踵を返し、
「七枝、ちゃんか……ふふ」
満足げに何度も何度も、七枝の名前を唱えながら元来た道を帰って行った。

「本当に知ってる人じゃないのか？」
「うん。初めて会う人」
とはいえ、クラスの中でも未だ話したことも無ければ全く存在を知らない人だって居る。しかし逆に向こうが七枝を知っているということは充分に在り得る。由香がいい例だ。同じ教室で半年以上も過ごしていながら七枝は彼女の事を知らなかったが、由香は七枝を知っていた。
隣で、『変質者で無ければいいが』『七枝は可愛いから用心しないと』などと心配する蓮を他所に、何となく謎の美少女に関して見当がついてきた。
――　やだなぁ、また一崎君関係かなぁ　――
一崎効果で真っ先に思い浮かぶのは、親衛隊水上だが、実際には七枝に絡んでくる生徒は他にも大勢居た。
靴箱に《別れろ》の手紙を入れてきたり、背後からくすくすと笑ったり聞こえよがしに『全然一崎君と合わないよねぇ』と囁いては七枝が振り返るとそそくさ姿を消す少女達。
正面切って堂々と叩き潰しに来る分、まだ水上の方がマシだとその度に思う。
それにしても、今日の美少女は今までと全く違う、新しいパターンだった。
彼女がこれからどういう行動に出るのか全く予測がつかないだけに気持ちが悪い。
――　やだな、明日学校休んじゃおうかな　――
「それはダメだ！」
心で思っていたつもりだったが、声に出してしまっていたらしい。七枝の呟きに蓮が激しく反応した。
「あんな素性も解らない人間のために七枝が学校を休むなんてダメだろう。それじゃ七枝が負けたみたいじゃないか。僕はそんな事は絶対に認めない」
「負けるも何も最初から戦ってるわけじゃないし」

「そうだな。最初から七枝が負けるなんて事は在り得ないんだ。でも変なヤツだったからな……名乗りもしないで家までくっついてきて。危ないヤツじゃなければいいんだが」
「お兄ちゃん？」
「まさかストーカーじゃ……」
――　女のあたしに、女のストーカー？　――
「そんなわけないじゃない」
「いや、世の中何が起こるかわからないからな。万が一ってこともある。よし、明日は僕が学校まで送ってあげよう。僕が通っていた当時の先生もまだご健在らしいし、ちょっと話しのひとつもつけておいてあげよう」
七枝は頭の芯がくらりと翳んだ。
「そんなことしなくていいから！」
「心配なんだよ」
「お兄ちゃんが心配してるようなことじゃないから」
「いいや。家にまでついてくるようなヤツだ。いいから僕に任せておきなさい」
蓮の、まるで保護者ぶった言い様に、七枝の中でパチンと気持ちが弾けた。
「お兄ちゃんが出てくるとロクなことがないの！」
きっぱりと言い切られてしまって蓮は目を見開いたまま固まってしまった。
ショックだった。可愛い可愛い、年の離れた妹。大切にしてきて、この妹のためなら何でもしてあげようと心に決めていた。
大学を出て収入を得るようになってからは特に、自分の甲斐性の許す限り気持ちを形にして贈る事にも精を出してきた。そして七枝も、そんな蓮の気持ちをいつもにこやかに『ありがとう』と受け取ってくれていたのに……
七枝を思うこの気持ちが拒否される日が来るとは、全く思ってもいなかった。

――　やば、言い過ぎた？　――

蓮にショックを与えてしまった言葉を撤回して、もう少し違う言い方を……とも思ったが、

――　ううん、ここで引いたらまた《あの時》の二の舞よ　――

口端を引き締めて、ぐっと堪える。

蓮の表情の変化を見ていると情けが出てきてしまいそうになるので、視線を端にずらしながら七枝は続けた。

「あたしだってもう高校生なんだし、何もかもお兄ちゃんに頼ってちゃダメなの。それに……」

しかし、何を言っても七枝を案じて独断で行動に出かねない、そんな眼を光らせる蓮に、どう言えば諦めさせることができるのか。

途方にくれながら、結局は正直に何もかもを話さなくてはならないだろうか……追い詰められてしまったような心もちで七枝は言葉を探す。

「それに……全く思い当たることが無いわけじゃない……っていうか、だから、そんなに心配することでもないの」

「それはどういう事なんだい？」

どうしよう。七枝は困ってしまった。

ちゃんと蓮を納得させるように話すとなると、自分が《また》恋愛で苦しんでいることまで話さなければならなくなる。それだけは何があっても避けなければ。

七枝に最高の恋人が出来て、いつか世界一幸せな花嫁になることばかりを願い続けてきた蓮に、自分の恋が上手くいっていない話なんてタブーこの上ない。

「お兄ちゃんは……心配しなくていいことなの。とにかく……」

話の核心に触れないで上手に納得させる言い方を探しながら、七枝は瞳をうろうろと彷徨わせる。けれど先ほど力強く拒否されてしまったショックがまだ残っている蓮もまた、七枝を問い詰めることが出来ない。

その隙に七枝は解答に辿り着いた。

「あたしを信用して。本当に困った事になったらちゃんとお兄ちゃんに相談するから。今までだって一番に相談して、あたしを助けてくれたんだもん。何があってもお兄ちゃんは助けてくれるって信じて、あたし頑張るから、ね？」
「七枝……」
「大丈夫よ。あの人の事も絶対にちゃんと解決するから」
蓮の目尻に感慨深い涙が浮かんだ。ほんの数年前まではいつだって半泣きで自分に縋っていた妹なのに。
――　大人になったんだなぁ　――
たった二年家を空けただけで、この妹は随分成長してしまったらしい。
「わかったよ、七枝。僕は今回七枝の事をじっと見守る事にする。でも、いつでも相談していいんだからね。自分で何とも出来ない事態になったらいつでも僕に言うんだよ」
「うん、分かった。ありがとうお兄ちゃん」
大丈夫。七枝には確信があった。
飴の効果が切れれば、正気になった谷口は一崎から離れてゆくだろう。そうしたら今度こそ、今までのような『一緒に通学できるだけで幸せ』なんて暢気なことは言わない。
――　谷口君にちゃんと気持ちを伝えよう。他の皆にも自分の好きな人はこの人なんだって打ち明けよう　――
そしたら、一崎との関係を誤解して七枝を目の敵にしている水上も態度を変えるだろうし、陰険な嫌がらせをしてきた隠れ一崎ファンも鳴りを潜めるだろう。あの美少女も勘違いを認めてストーカーまがいの行動を改めるに違いない。
――　うん、大丈夫。今度はお兄ちゃんに介入されなくても解決する。全部　――
しかし、そんな七枝の思惑も、『大丈夫』という言葉に納得してみせた返事も全て蓮は表面上だけに留めて、こっそりと水面下で動く決心を固めていた。

――　本当の事を打ち明けられないなんて、どんな辛い事があったんだ　――

大丈夫。僕が七枝を支えてみせる。七枝の日向にも陰にもなって。

僕が、　――　七枝を　――

15

朝。いつもより少し遅れて家を出て駅まで、そして駅から学校まで七枝は鞄を両腕で胸に抱え、びくびくしながら一人で歩いてきた。
昨日の美少女、新手の一崎ファンがどこでどういう行動に出るか解らないため登校の道のりを小走りで駆け抜けた。
相手は家にまで押しかけてくるほどだ。教室に入るまで気が抜けない。周囲に誰も居ないことを確かめながら靴箱から上履きを取り出す。そしてそれは靴を履き替えている無防備な瞬間にやってきた。
背後からぽんと軽く肩を叩かれて『うひゃぁ』声にならない叫びと共に体勢を大きく崩され、靴箱に寄りかかる。しかしかけられてきた声は、七枝が恐れていた少女のものではなかった。
「どうしたの？　大丈夫？」
「た……谷口君……」
七枝のリアクションに驚かされたのか、きょとんと大きな目を見開きながら谷口が心配そうに手を差し出す。それを「ありがとう」と受け取りながら立ち上がり、乱れたスカートを慌てて直した。
「谷口君こそ、こんな所で……」
いつもならとっくに教室に入って、今日の授業の予習をしているか、気分転換の文庫本を読んでいるはずの時間。しかも、違うクラスの靴箱の前で。
「三島さん今日いつもの電車に乗らなかったでしょ？　どうしたのかなと思って」
ほろり。谷口から自分を案じてくれる言葉を聞かされて気持ちが一瞬緩んでしまった。
しかしここは他の生徒の目もある廊下。うっかり泣きつくわけにも、本当の事を言うわけにもいかない。
「ちょっと寝坊しちゃった」
「そう？　具合悪いとかじゃないの？」

「ホントに寝坊。最近また寒くなってきちゃったから」
「それならいいけど」
谷口がにっこりと笑う。
釣られて七枝も微笑み返した。何て幸せなひとときだろう。
「孝ちゃんも三島さんがなかなか来ないから心配してたんだ」
ふっ、と谷口が視線を向けた先に一崎が立ってこちらを見ていた。
幸福の絶頂は一瞬にして崩れ去った。七枝の眼が険しく細まった。
電車の中では色々と話しかけてくれる谷口だが、学校の中では殆ど会話など交わさない。そんな彼が珍しくも自分を待っていてくれて、声をかけてくれた理由が悲しくも理解できてしまった。
谷口が登校したのに、いつも一緒に来るはずの七枝が来ないのを先に案じたのは一崎で、それに促されて心配してくれたのだ。
――　どーりで……　――
いつもなら次の日に電車の中で『昨日は乗ってなかったね』と言ってくれれば御の字。ヘタをすると気付いてもらえない可能性だって全くゼロではない。
一崎⇔谷口×七枝。好き合っている二人に割って入ろうとしているのが、今の自分だ。
この妙な図式が頭に浮かんで
――　やっぱり休めば良かったかも　――
蓮には強がってみせたがこの現場に身を置いてみれば後悔にしかならない。
――　何なのよ、もう。この三角関係　――
飴の効果のせいだと解っていてもわだかまりは消えてくれない。
「あのー……」
三人三様思いの渦の中、蚊の泣くような声が割って入った。
「由香！」
「おはよう、三島さん……それから、えっと……」
状況を全く知らない由香が現れた。由香は三人を順繰りに見つめながら所在無しに鞄を抱えている。

「あ、もしかして靴箱ここ？」
七枝が谷口と自分の間にある靴箱の列を振り返ると、ちょっとホッとした笑顔で「うん」と頷いた。それを見て谷口も「ごめんね」慌てて場所を空けた。
込み入った話の最中に割って入る格好になってしまった由香が、申し訳無さそうに頭を下げて上履きに履き替える。その作業が終るのを待って七枝は由香の腕を引っ張り
「心配かけてごめんなさい。明日はまた同じ電車に乗れるように……頑張るから。さ、行こう由香」
谷口の横を二人並んですり抜けた。

「だから、大丈夫って言ったじゃない。孝ちゃん心配しすぎだよ」
後に残された谷口が一崎の隣を歩きながら笑った。
「そうかな」
まだ心配の色の消えない顔を覗き込みながら笑顔をマジメな顔に変えた。
「何がそんなに気になるの」
「そりゃ……」
「うん」
「もし三島が学校休んじまったら、なんていうか……」
「うん？」
「オレのせいみたいじゃん」
――　いや、事実オレのせいだよな　――
「何で孝ちゃんがそう思っちゃうのかわかんないな」
谷口は七枝の気持ちを知らない。一崎の胸がズキンと悲鳴を上げた。
「そりゃそうなんだけどさ」
いまひとつ曖昧になってしまった返事を、眉間に皺寄せながら聞いていた谷口だったが、小さく頭を振って皺を解き、晴れやかな笑顔を浮かべてみせた。

「そんなことより、もうすぐ冬休みだよ。孝ちゃんは予定あるの？」
「お、おう。殆ど部活かな。大樹は？」
「僕も塾かな。冬季特別講習に申し込んじゃったから」
「そっか。忙しいな。お互い」
『忙しいな』というわりにカラっと晴れたような笑顔で谷口の肩を抱き寄せた。それは誰が見ても普通に男友達同士がふざけて肩を抱いている程度にしか見えない。
谷口も肩に回された腕をふざけるように掴みながら、
「でもね、クリスマスは空けてあるから。孝ちゃんと一緒に居られるよ」少し頬染めて笑んだ。
「お、おう」突然の積極的なセリフに動揺しながら答える。
――　やべぇ、やっぱこいつ可愛い　――
嬉しさで胸が満たされる。
良かった。飴の勢いに後押しされたとはいえ、告白するのは清水の舞台から飛び降りるような賭けだったのだ。
だけど良かった。告白して本当に。
今までの人生で女の子から告白されたことが無かったわけではない。けれどどんな女の子の告白も、一崎の胸には響かなかった。だから特別に誰かと付き合うなんてことは一度も無かった。
谷口は改まって恋を意識して付き合う、初めての存在なのだ。だけど。
――　初恋は実らないって言うもんな　――
これは期限付きの恋愛なのだから。
喜びに切なさが同居している。
そんな一崎の翳りを横顔から察したのか、谷口はまた、
――　孝ちゃん？　――
問いかけたい言葉を胸に留めて、眉間に皺を寄せた。

「……良かったの？　何か話し中じゃなかったの？」
引っ張られるように一緒に教室へ入って、由香が申し訳無さそうに囁いた。
「いいの。あたしの方こそ助かっちゃった」
あのままあの場所でトライアングルを発生させたままで居るのは辛すぎる。正直、七枝は由香に救われた。
二人並んで教室に入ると、水上がぱっとドアを振り返って、『あら？』という顔を見せた。
机について鞄を開けている最中も水が身の視線が離れない。
――　何見てんのよ　――
思いながら視線を絡めると、切れ長の綺麗な眼が『ふふん』と笑ったように見えた。
――　何？　朝から感じ悪ぅ　――
思いつつ、水上の気持ちは手に取るように解った。
一崎が一緒に居ないものだから、『なぁんだ、今日は一緒じゃないのね』という感じだろうか。
どれだけ、七枝と一崎二人でワンセットのように思われているのか。おそらく一旦教室に入った一崎が、すっと教室を出て行ったきり戻ってこないもので、ずっと気にしていたのだろう。こういう時の水上はとても可愛く見える。よっぽど一崎に対して一途なのだ。
水上から視線を外して教科書の準備をしていると、あの甲高い声が明るく響いた。顔を上げて確かめなくても、その内容を聞かなくても声のトーンだけで解る。
――　あー、来たな……　――
思ったとおり、一崎が隣の席に座ったのをチラリ横目で見て、七枝は溜息をついた。
「あの、さ……三島……」
隣が躊躇いがちに声をかけてくる。その声に七枝は顔に険を寄せた。
――　何の用？　『おはよう』ならもう言ったはずよね？　――

靴箱で、谷口を間に挟んで。
七枝は黙ったまま続く言葉を待ったが、しかし聞く事は出来なかった。
「一崎くぅん、どこ言ってたのぉ？」
「急に居なくなるからぁ心配しちゃったぁ」
この甲高い声に救われたように思えたのは、この席になってから初めてのことかもしれない。一崎に続く言葉を聞かされても、何も答える気にもならないし、愛想良く相手なんかしてやれる気分にもなれない。
七枝はいいタイミングで遮ってくたものだと、水上達に感謝すら覚えた。
また、その上手いタイミングで
「ね、七枝さん」
由香が七枝の横に寄ってくる。
「このノートありがとう。ちょっと休んだだけなのに授業進んでてびっくりしちゃった。助かったわ」
そういえば先日駅で会った時に、ちょっとでも学校に来やすくなればと、自分のノートを貸したままだった。
「あたしのノート解り辛かったでしょう？　ごめんね、あんまり頭の出来が良くなくって」
「ううん。どこまで進んだのかが解っただけでも助かったもの。このまま冬休みに入ってたら取り戻せなくなる所だった」
ノートの内容の出来栄えに触れないのは、由香の優しさだろう。こんな劣悪な記録で『助かった』とまで言ってくれる。こんなことで感謝されてはかえって申し訳ないくらいだ。
七枝は自分の出来の悪さが急に恥ずかしくなってしまった。改めて、自分のレベルではない学校に来てしまった事を思い知らされる。
「でね、七枝さん。良かったら今日お昼ごはん一緒に食べない？あれからまた色々聞いて欲しいことができたの」
由香が弾んだ声で甘えるように言ってきた。

――　ラッキー！　――

願ってもない。今までは他に昼食を一緒にする相手が居なかったから、一崎の誘いを断りきれなくて、ずるずると一緒に食べていたけれど由香が誘ってくれれば断る理由には充分足りる。

「あたしこそ！」

「本当？　良かった。じゃぁ私お昼にこっちの席に来るね」

「いや、あたしが由香の席に行くわ」

「えー、でも……」

由香がちらりと七枝の隣を見た。

そういえば由香も一崎と七枝の関係を誤解している。勿論、音楽室のベランダで一崎と話しこんでいるのを聞いているのだから、二人が恋愛の関係だとは思っていないだろうけれど、自分が七枝に話を聞いて欲しいのと同じように、一崎もまた七枝に話したいことがあるのでは？　そんな眼だ。

今度は一崎が由香に救われた感じで、由香の視線を拾うように、

「あ、じゃぁ皆でここで……」

そう言いかけた時に、水上達が割って入った。

「あらぁ、三島さん、仲のいい友達がぁ、出来たのねぇ。良かったじゃないぃ」

「そうよぉ、そちらはそちらでぇ、楽しく食べるといいわぁ」

クスクスと笑う少女達の瞳には、漏れなく『一崎君は私達に任せて、あんたはどっか行ってなさい』そんな想いが込められている。

――　グッジョブ！　水上さん！　――

「水上さん達も言ってくれてるし。それにここだと狭いわよ」

「そうよぉ、この席ぃ人がいっぱい集まるんだからぁ」

今、完全に七枝と水上の利害は一致している。いずれ谷口が自分の元に返ってきたなら、この恋を応援してあげよう。七枝は心の底から想い、誓った。

その時にこっそりと見た一崎の目は、やっぱり何かを訴えかけているようだったが、

――　いいじゃない。谷口君と今は上手くいってるんだから。何もあたしが聞いてあげなきゃなんないことなんて、無いでしょう

――

すっと視線を逸らして、素知らぬ顔を決め込んだ。胸に一抹の罪悪感を感じながら。

16

――　疲れた　――

やっと訪れた放課後。教材を鞄に詰めながら七枝は、すっかり疲れてしまっていた。

気が付けばいつも一崎の視線を感じる。何か言いたそうにじっと見つめている。

けれどその度に水上が一崎に話しかけ、由香が七枝に話しかけ、彼はいつも機を逃がしてしまう。しかし七枝にしてみれば、谷口の話ならできれば一崎からは聞きたくないし、谷口を想っている自分への侘びであるなら尚更だ。

だから七枝にとって救いの神が舞い降りたような状況だったのに、

――　この倦怠感って、何　――

『話、聞いてあげるよ』そう言ったくせに一崎を無視できる環境に救われてしまっていた。そうした事への罪悪感なら、

――　谷口君との関係が終ったら、いくらでも泣き言くらい聞いてあげるから。今は許してよ　――

これが本音だ。

とにかく今日は帰ろう。帰って少し休もう。そう思いながら最後のノートを机から引っ張り出す。その表紙に、ザザッと数枚のコピー用紙が滑り落ちた。

「これ……」

拾い上げてみると、びっしりとパソコンの小さな文字が綴られている中に、見覚えのあるカタカナ名前が入っている。用紙が挟まれていたノートは今朝由香から戻されてきたものだ。

――　しまったぁ、こっちの問題もあったんだわ　――

ふっと隣に気配を感じて振り返ると、由香が立っている。七枝が用紙を手にしているのを見て、瞳が期待に満ちて輝いている。
「あ、これ……帰ってから読むね」
「うん、ありがとう。あとね、良かったら一緒に帰らない？」
「駅まで？」
「そう。駅まで一緒に行きましょうよ」
女の子の友達と一緒に廊下を歩いて、階段を降りて、靴箱の前で並んで靴を履き替える。そんなささやかな事がとても新鮮に感じてしまって、
――　ふつーの高校生みたいだぁ　――
そういえばこんな風に友達と連れ立って歩くのは何年ぶりだろう。七枝は胸に手を当てて、じんわりとこみ上げてくる感動に酔いしれた。
今まで谷口のことばかり意識していたが、実はこういう普通な友達付き合いにも憧れていたような気がする。
――　こんなの、普通に当たり前のことなのに　――
そう思うと何だか照れくさくもある。まともに顔を上げて由香の顔を見ることもできない。きっと今自分の頬は紅潮している。
「どうしたの？」
靴を履いてもまだ俯いたままの七枝に由香が声をかけた。
「ううん。何でも」
帰ってきた返事が弾んだように聞こえて、由香もホッとした。
由香は由香で、七枝が優しくしてくれるのをいいことに教室でもくっついていたり、夢の記録を押し付けてみたり、ちょっと調子に乗りすぎてずうずうしく思われていないか案じていた所でもあったので。
「ね、駅のお店で何か飲んでいかない？　私奢るわ。ノートのお礼」
ノートだけではない。わざわざ家まで来てもらったこと、色々と改めて感謝したかった。
「お礼なんていいよ」

楽しい。たとえ由香との会話の中心が《ザナン様》であっても、気の置けない友達と笑いながら帰るのがこんなにも楽しいとは思わなかった。

ルン♪と弾んだ調子で顔を上げた七枝だったが、そのささやかな楽しみは始まりと同時に終着を迎えていたのか。七枝の動きが止まった。

「七枝さん？」

由香が再び不安気な顔になって、凍りつきながら凝視している七枝の視線の先を見る。

昨夜、七枝の家までついてきたあの美少女が夕陽に燃える校庭を背にして立っていた。

これには由香も驚きを隠せなかったのか、上擦った声で小さく叫んだ。

「柿田先輩」

「由香、この人のこと知ってるの？」

「知ってるって……」

先を続けようとして、声がぼそぼそと細る。由香は七枝の耳元まで唇を寄せて囁いた。

「有名な人だもん……三年生よ。私もあんまり他の生徒の事知らないけど、この人とは中学が同じだったの。凄く有名」

「どういう意味で、有名？」

「えっと……」

由香の声が躊躇いで震えた。

「おうちがね、やくざさんなの」

「はぁ？」

『おうちがね、やくざさんなの』

『やくざさんなの』

『……なの』由香の小さな声が七枝の頭の中で恐ろしいボリュームになってこだました。

――　何で？　あたし、何でそんな人に目ぇつけられてるの　――

解っている。一崎のせいだ。
――　あぁもう！　――
今すぐ道場に行って一崎を引っ張ってきて、『この人は私とは関係ないの、どうぞ自由にしてください、だからあたしに関わらないで』そう言ってしまいたい。
隣では由香も目の前の美少女に恐れて震えているのか、緊張している空気がぴりぴりと伝わってくる。
そんな二人の心情を他所に、美少女はつかつかと二人の目の前まで歩み寄った。
「待ってたのよ」
――　何のために？　――
「お友達？」
ちらりと由香を見やって聞いてきた。
「ええ。同じクラスの……」
――　何でそんなこと聞くの　――
「一緒に帰るの？」
「はい……駅まで……由香の家は駅の向こうだから……」
――　何であたし、バカ正直に答えちゃってるの　――
「そう」
美少女のその容姿に何て似合っている、凛とした響きの良い声だろう。やくざの娘いきなりの登場にびびってしまっていたはずの由香も、気付けばぼうっとりと瞳を揺らして彼女の声を聞いている。
「由香、由香！」
「え？　何？」
「何ぼうっとしてんの」
「だって……」
我に返りながらもまだ美少女の声を脳裏で反芻させているらしい由香の袖を引っ張りながら、七枝は背筋を伸ばした。
「すいません、先輩。あたしたち帰るので失礼します」
七枝が美少女の横を通り過ぎようと由香の腕を引っ張り歩き出す

と、美少女はすすっと二人の前に立ちはだかり行く手を阻む。
――　何なの一体ー　――
由香が途惑い立ち止まると、また凛とした声が響いた。今度は七枝にではなく、由香に。
「そう。由香ちゃんっていうの。可愛い名前ね」
「あ、ありがとうございます」
由香の頬がぽっと赤くなる。
――　あんた何照れてんのよ！　――
再び袖を引っ張られ、由香は二人の間で視線を泳がせながらオロオロになってしまった。
『由香！』小声で七枝から突付かれて、
「えっと、すみません先輩。失礼します」
引き摺られるようにもう一度歩き出す。けれど、美少女は小走りで逃げるように立ち去ろうとする二人に「待って」と声をかけ、極上の笑みを浮かべて言った。
「私も一緒に帰らせてもらっていいかしら」
――　だから、何で？　――
心の中で思い切り反発しようとする七枝に反して、
「あ、はい。いいですよ。ね？　七枝さん」
由香はあっさりと承諾してしまった。それに対して慌てて耳打ちをする。
『ちょっと、この人やくざさんの娘なんでしょ？　怖いんじゃないの？』
『えー、だって噂で聞くみたいな怖い人じゃなさそうよ』
――　ダメだ　――
由香はこの美少女に、外見で騙されてしまっている。きっと今まで遠巻きにしか見たことのなかった彼女を初めて近くで見て、声まで聞いて惑わされてしまったのに違いない。
『それに何だか優しそうな感じよ？』
その耳打ちはしっかりと聞かれていたのだろう。

「うちの若い衆には近寄らないように言いつけてあるから大丈夫よ。怖い思いなんてさせないから」
にっこりと微笑んだ。
「そういう問題じゃなくて……えっと……」
何とかこの少女を振り切らなければ。七枝は知恵を振り絞った。
――　そうだ、この人、一崎君が好きなんじゃないの！　――
思い出した。
「い、一崎君なら道場ですよ。部活だから。誤解の無いように言っておきますけど、あたしと一崎君は隣の席っていうだけで何の関係も無いですから」
色々と好き勝手に噂されているが、それは水上達が勝手に騒いでいるだけで自分とは無関係なのだと早口で主張した。一通り思うところを喋ると、肩で息を吐きながら七枝は
――　言いたい事は言ったわ　――
満足して胸を撫で下ろした。きっとこれでこの人は立ち去ってくれるはず。
「そう。七枝ちゃんの言いたいことはよく解ったわ」
彼女は少しだけ眉間に皺を寄せながら困ったように微笑んだ。
――　やった！　――
良かった。自分の気持ちはちゃんと通じたのだ。
しかし彼女は立ち去らなかった。それどころか、
「ところで一崎君って？」
「……はぁ？」
「何か関係あるの？　その子」
「関係って……えっと、あの、無いですけど」
「そう。ならいいの」
「はぁ……いや『いいの』じゃなくて、先輩一崎君が……」
――　好きであたしにちょっかい出してきてるんじゃないの？
――
最後まで言うのが何となく怖くなってしまって七枝の言葉は途中

から声にならなかった。
そして彼女は眉間の皺を解いて、とても冷静に言ってのけた。
「知らないもの、そんな子」
てっきり一崎との関係に妬いた彼女が水上達のように嫌がらせをしにきたのだと思っていたのに、それは覆されてしまった。
「そんなことより帰るのでしょう？　さ、行きましょうよ。ここで騒いでたら先生が煩く言ってくるわ。由香さんも」
いつの間にか由香と七枝の真ん中に収まって、美少女は小さな花を両脇に二つ抱えた調子で楽しげに歩き出した。
何でこんな状況になってしまったのか、さっぱり解らない。
「いや、でも先輩！」
叫ぶ七枝に、
「あら嫌だ。先輩なんてやめて？　私のことは万梨亜って呼んでいいのよ。私も七枝と由香って呼ばせてもらっていいかしら？」
『いいかしら？』もへったくれもない。とっくに呼び捨てで呼ばれていると思うのだが。いいや、今はそんなことに突っ込みを入れている場合ではない。彼女が一崎と関係の無いことは解ったが、それなら何故。
「何であたしに？　先輩？」
「先輩？」
まだそんな呼び方をするの？　満面に浮かべられた笑みには、否を許さない迫力が潜んでいる。
「……万梨亜……さん」
いくら本人がそう呼べと言ったとはいえ、先輩を呼び捨てには出来ない。七枝は百歩ほど譲った思いで観念して彼女の名を呼んだ。
名前を呼ばれたことで満足したのか美少女、万梨亜は笑みに含んだ険を解いて
「そうねぇ、何て言ったらいいのかしら」
七枝の問いに答え始めた。由香はこのやりとりをワクワクしながら聞いている。

「要するに、ひとめぼれってやつかしら」
「はぁ、そうですか……ひとめ……」
由香は心の中で『きゃぁぁぁぁ』悲鳴をあげた。
七枝は一瞬単語の意味が解らなかった。
しばらく、音の無い静けさに三人は包まれた。
――　ひとめ……？　――
誰が？　誰に？　状況から考えて今現在、一番万梨亜に懐かれているらしいのは七枝だが……七枝の脳内で答えが出せずに滞っている中で、
「うわぁ、万梨亜先輩、告白ですね！」
嬉々とした由香の声が響いた。
「告白って……！」
やっと、七枝の思考が現状に追いついた。

１６（後書き）

更新遅々としてしまってますが、まだまだ続きますー
やっと登場人物出揃った感……

17

――　告白なんて、そんなのされても困る。っていうか、この人――

「万梨亜先輩、女じゃないですかー！　あ、あたしも女ですよ！」

涙が出そうになってきた。

しかし万梨亜は優雅に笑んで、七枝の嘆きをあっさりとかわす。

「うん。そうなんだけどねぇ。でも七枝ちゃんが気になっちゃって仕方がないのよ」

そこに、第四の声が怒涛のように響いた。

「そんなことは許さぁん！」

「お兄ちゃん！」

いつの間にか駅に、三人揃って着いていた。

そして、いつの間にか現れていた兄・蓮も万梨亜の告白を聞いてしまったらしい。

蓮は二人の間に割って入ると、妹を背中へ追いやり、目を吊り上げて万梨亜を睨みつけた。しかし万梨亜もそんな蓮の形相に、引くどころか胸を張って「ふふ」と鼻先で彼の勢いを笑み掃った。

「残念。できたらお家まで送ってあげたかったのだけど、今日はここまでね。七枝ちゃん」

軽やかに身を翻し、すっと七枝から離れた。最後にウィンクのおまけまでつけて。これには何か言わんと口を開いた蓮も言葉を失わされてしまった。蓮に限らず、誰も言葉を発することができなかった。七枝は万梨亜と蓮の衝突に圧倒されて、由香は万梨亜の優雅な後姿に見惚れて。

万梨亜の姿が雑踏に消えてすっかり見えなくなってしまっても、まだ三人は呆然と立ち尽くしたままだった。

先陣を切って我に返ったのは蓮だった。彼はぶんと首を振って七枝に振り返り、肩を掴むと、ほうっと溜息を吐いた。

「あんなヤツには近づくなと言っただろう」
「だって、あたしが近づいたんじゃないもん」
下駄箱で先輩が待っていたのだと簡単に説明する。由香も隣で頷いた。
「……仕方が無い。やっぱり毎日登下校を僕が送り迎えを……」
「しなくていい！　しなくていいから！」
「だったらもう学校なんか行かなくていい。どうせすぐ冬休みだ」
「そういう問題じゃないし！　何でそう極端なの」
「あのぉ……」
駅前で、人目も憚らずに口論を始めようとする兄妹に、おずおずと由香が口を挟んだ。
「あぁ、ごめん。由香」
「ううん。気にしないで」
にっこりと笑みながら由香は蓮を見上げた。
――　この人が七枝さんのお兄さん……あの飴を作ってくれた――
お礼を言うべきだろうか？　しかし何と言っていいものか言葉を探していると、蓮が先に口を開いてきた。
「この子は？」
「クラスメイト。滝本由香さんっていうの」
「初めまして……お兄さん……？」
友達の兄だが、自分に兄弟姉妹が居ないせいで『お兄さん』という単語がやたらこそばゆい。
蓮は蓮で、万梨亜の一件があったせいか、まだ警戒が解けずに少々厳しい口調で七枝に問い返す。
「お友達かい？」
「うん。っていっても、最近仲良くなったんだけど」
友達。その響きにまた、七枝も嬉しさで頬を染めた。その表情を見て蓮も落ち着いたのか、にっこりと由香を笑んで見つめた。
「そう。七枝の……」

しみじみと見つめられて、由香まで照れてしまう。そして
「よろしくお願いします」ぺこりと頭を下げた。
「こちらこそ。ここ何年か友達の話なんて聞かなかったから、ちょっと心配していたのだけど、安心したよ。ちゃんと友達が居たんだね」
蓮は改まって由香に向き直った。
「由香さん、七枝は最近すっかり大人しくなってしまってるけど、本来はとても明るくて元気な子なんだ。仲良くしてやってくださいね」
「あ、はい」
「お兄ちゃん、余計なこと言わくていいから！」
しばらく、三人で笑った。さっきまでの険悪なムードはもう微塵も無い。
「それじゃ帰ろうか、七枝」
改札まで来て、ほんわりと笑顔を浮かべながら蓮は七枝の肩を抱いた。その腕に当たり前のように頭を預けながら、七枝はちょっと小首をかしげ、
「ごめんね、由香。また明日ね」
申し訳無さそうに手を振った。
一人、駅に取り残されて
――　ごめんねって……何が？　あ、そっか、お店で何か飲んでいこうって約束したんだっけ　――
ま、しょうがない。由香も自分のマンションに向って歩き出した。

そして次の日。相変わらずのけたたましい一日が始まる。しかも明日はもう終業式だ。
水上達の甲高い声が更にヒートアップして、一崎を取り巻いている。
「冬休みになっちゃったらぁ、毎日顔を見るってわけにもぉ、いかないもんねぇ」

何とか冬休みも一崎と会おうと画策する水上達の騒ぎを聞きながら、七枝と由香はのんびりと教室の隅で日向ぼっこをしていた。
最近は一崎も七枝に話しかける事を諦めたのか、滅多に声をかけてこない。それどころか余所余所しくさえあった。
「そういえば七枝さん、今日お兄さんは？」
昨日、毎日登下校を送り迎えするような事を言っていたのをふと思い出した。
「お兄ちゃんも一応仕事してるから」
「ふぅん。今度会えたら飴のお礼しようと思ってたんだけどな」
飴……言われてまた、思い出した。
そういえば由香から渡される夢の記録を、七枝はまだ一行も読んでいない。
「あの、由香……ごめん。アレさ、あたしまだ読んでなくて」
いつ感想を聞かれるか、思い出してはビクビクしている。しかし由香の返事は意外だった。
「いいよ、読まなくても」
「えー？」
「七枝さん何だか大変そうだし」
確かに。この数日でいきなり七枝の周囲はめまぐるしく慌しくなってしまった。考えることも悩むこともたくさんありすぎる。
そんな中で、理解の範疇を超えるあんな夢物語の記録なんて、とても読めるわけがない。
「落ち着いたら、軽い小説か何かのつもりで読んでくれれば嬉しいけど」
「うん。……ごめんね」
「謝らなくっていいの。それよりさ、冬休みになったら一緒に勉強しない？　課題いっぱい出てるんだもん。一人でやってたら気が滅入ってくるわ」
さり気なく、由香は話題を変えた。
「そうねぇ。あたしが由香の家に行ってもいい？　あたし定期持っ

てるから、その方が由香、電車代使わなくていいし」
「本当？　じゃぁお茶とお菓子、いっぱい用意しとくね」
「嬉しい。由香んとこのお菓子本当に美味しかったもん」
特にお菓子をアテにしていたわけではなかったが、実はちょっと期待もしていた。
日当たりの良い一隅で、きゃぁ、と小さな歓声が上がるのを、小さく溜息交じりに一崎がちらりと見たが、七枝は気付かなかった。
そうして、冬休みは始まった。
終業式の後も相変わらず一崎は物言いた気に七枝を見つめていたが、七枝は極力その眼を見ないで、気付かないフリを決め込んでやり過ごした。
――　あたしって、冷たい　――
そう思わなくもなかった。
一崎にしてみれば、本当ならずっと友達で居られたはずの谷口との関係を、あんな飴のせいで期限をつけられて妙なことにされてしまったのだから、相談に乗るくらい、いや、愚痴のひとつも聞かされて然るべきなのに。
しかし一崎の口から谷口の話なんて、もう聞きたくない。できれば期限が切れて谷口が自分の元にしっかりと返ってきてくれるまで、顔も会わせたくはない。それからなら幾らでも話を聞いてあげる余裕は出来る、とも思っていた。二人の関係が終って、飴の効果が切れた事を確認するまでは、一崎からどんな話を聞かされても不安でしかなかった。
――　本当に、谷口君が返ってくるまで　――
そこまで思って、七枝は急に顔が熱く火照るのを感じた。
――　イヤだ、返ってくるだなんて　――
谷口君はモノじゃないのよ。
ううん、それ以前にあたし、気持ちを伝えてさえ居ないんだから。
まるで、すっかり出来上がっていた恋人を男に盗られたヒロインの気持ちに浸っている自分に気付いて、恥ずかしくなってしまった。

――　とにかく、今はまだあんたと話す気になれないの。ごめんなさい　――

気がつけばじっと七枝を追っている谷口の視線から逃げるように、怒涛の二学期を終らせた。

「七枝ちゃん、出かけるの？」

いつもなら休みが始まれば、朝遅くまでダラダラと寝て過ごす娘が、珍しく早くから起きて外出の準備をしているのを見て母親が声をかけた。

「うん。課題をさっさとやっつけちゃって、楽になろうって話になったの」

「いつものお友達？　勉強会の？」

母は“いつも”の相手が谷口という男の子であることを知らない。けれど七枝が勉強に関する事を口にする時は、中学から受験勉強を手伝ってくれた友達だろうと思って聞いた。勿論七枝もそうと解って、

「違うの。最近仲良くなった、クラスメイト」

「あら、まぁ」

素っ頓狂な声を出されて、七枝は頬を赤らめた。そういえばもう何年も、他の友達の話なんてしなかった。驚かれるのも無理はない。何せ友達はおろか学校での事を何も話してくれない上に、散々な答案用紙ばかり見せられ続けていたのだから、『この子本当に学校楽しいのかしら』と母は心配していたのだ。

「お友達、できたのね。だったらお菓子でも持っていきなさいよ」

はしゃいだ声で台所に駆け込む母の背中に、

「いいよ。由香んとこは両親がカフェやってて、お菓子とか揃ってるの。飲み物もうちより美味しい紅茶が出るんだから」

「そうなの……だからって甘えてばっかりじゃダメよ。そうだ、こ

の間お父さんが学会に行った時のお土産が確か……」
「いいんだってば。それじゃ行ってきます。夕方には戻るから」
「夕方って。七ちゃんあなた、まさかお昼ご飯までご馳走になる気？　それはちょっと……」
母親に最後までまで言わせることなく、七枝は玄関を閉めた。
いつもの通い慣れた道を小走りに駆けながら、
――　友達、かぁ　――
ふふ、と笑ってしまった。
七枝自信、九徳に入ってから谷口以外の誰かと親しくするのは、初めてなのだと改めて思い知った。
一崎達とは、外野からは仲良く見えたようだけど、実際の所は振り回されていただけだ。
「うん。早く課題終らせちゃって、そうだ、新学期に供えて予習もしないとね」
この冬休みに期待していた。
一崎には悪いが、あの一件が無ければきっと、いつまで経っても谷口と《仲良く登校する》だけの関係から、一歩進めようと奮起することはなかっただろう。
この冬休みにあの二人の件が片付いてくれれば、谷口もきっと元に戻って、楽しい高校生活が送れるようになる。そんな気がしてきた。
由香も飴の効果が切れれば、いつまでも《ザナン様》とは言い続けないかもしれない。一緒に現実の男の子と恋をして、普通に楽しく、そんな話で盛り上がる日が来るに違いない。そんな思いが、勉強にも弾みをつけてくれて、気持ちはやる気に満ちていた。
七枝はルン♪と心弾ませながら、由香のマンションのチャイムを鳴らした。
「七枝さーん、いらっしゃい」
待ってたのよ、と言わんばかりに由香が歓迎する。
「さ、上がって、上がって」

「今から勉強だっていうのに、楽しそうね」
自分も楽しい。けれど由香も楽しそうにしてくれているのを見ると、更に楽しくなってくる。
しかし由香が楽しそうな理由は別にあった。
「そうよ。七枝さんびっくりしないでね。すっごい強力な助っ人が課題手伝ってくれるんだから」
「助っ人？」
意味が解らないまま、由香の部屋に通された。そこでにっこりと優美な微笑みを浮かべる主と体面して、七枝は棒立ちになってしまった。
「万梨亜先輩……？　何でここに？」
「おはよう、七枝ちゃん」

18

飲み物と焼き菓子を持ってきた由香が、
「私もびっくりしたの。今朝突然先輩が訊ねてきてくれたの」
嬉しそうにはしゃいだ声を上げる。
「いや、だから何で先輩が……今日の事知ってて？」
「だってあなたたち、廊下でもお話してたでしょう？　悪いかしらと思ったけど聞こえちゃったものだから」
「でも、だからって由香の家まで……？」
何で由香のマンションまで知っているのか。それには由香がさらりと答えてくれた。
「先輩ね、小中と同じだったから。学区が同じだもの、調べたらうちなんてすぐ解るわ」
ぐらり。七枝の肩から力が抜ける。同じ学区で、しかも相手は『やくざさん』の娘。地元の事なら簡単に調べがついて当然か。
それにしても、よりによって由香も何て人を招きいれてくれたものか。先日の蓮との一件で『大変ね』と労わってくれたアレは、嘘だったのか。万梨亜に聞こえないように耳元で文句をつけようと顔を近づけた。
「由香ぁ……」
しかし由香は万梨亜が来てくれた事に感極まってしまったのか、興奮状態で七枝の言葉も届かない。
「でね、話してみたらとっても優しい人なの。七枝さんもきっと好きになるわ」
「だから、あたしは女だし、女の人なんてー」
「勿論そういう意味じゃなくて、先輩として……かな。ステキな人よ。七枝さんもちゃんと話してみようよ」
ね？　と促されて渋々テーブルについた。
小さなガラステーブルに二人分の課題が広がるとさすがに狭かっ

た。
勉強が始まって、昼を迎える頃には、確かに由香の言うとおり、『いい人だわ』七枝は万梨亜に対する印象も変わってきていた。
教え方はとても丁寧だし、解りやすい。同じ事でも解るまで何度でも繰り返してくれる。七枝達に疲れが見えてくると、軽く冗談を交えながら肩の力を抜けさせるのも上手い。おまけに美人。これであの、『ひとめぼれ』とか告白だとかがなければ……いや、今からでも『あれは冗談よ』と言ってくれたならきっと、崇拝と言っても過言ではないほど、
――　好きになれるんだけどなぁ　――
しかし時折七枝と視線が合った時に見せる意味深な微笑みは、やっぱり冗談として覆されたりはしないようだった。その微笑を受ける度に七枝は笑い返して良いものなのか、けれど無視するわけにもいかない、と片頬を引き攣らせながら複雑な表情を浮かべた。
とはいえ、課題は確かに、万梨亜のおかげで随分と進んだ。多分あと二回も集まれば、完璧に終るだろう。
「すっごーい。万梨亜先輩、ありがとうございます」
頬を紅潮させてお礼を述べる由香は、もうすっかり万梨亜の虜だ。
「由香ちゃんも。お昼ご飯ありがとう。料理上手なのね。美味しかったわ」
「そんな……恥ずかしいです」
熱を帯びた頬を両掌で包みながら、今度は耳まで赤く染まってしまった顔を震わせる由香を見ていると、複雑な気持ちになってきた。
何だか、ここだけ空気が違う。何かのゲームで見た女子高のようだ。七枝は課題が進んだ事には感謝したが、同時に背筋に冷たい何かを感じてしまった。
しばらく、きゃっきゃっと喜ぶ由香の相手をしていた万梨亜がふっと七枝に振り向いた。
「七枝ちゃんは？　外、暗くなっちゃったけど、今日はお兄さん迎えに来られるの？」

「あ、はい……いえ、多分今日は仕事で……」
昨日の終業式の日と、その前日と早退を続けてしまったツケがどうやら回ってきているらしく、今日は朝から姿も見せなかった。多分冬休みに入った事で安心しているのだろう、と七枝が言えば、
「そう。じゃぁ今日は私が家まで送ってあげるわ。これでも私拳法やってるのよ」
それに真っ先に反応したのは由香だった。
「拳法ですか。かっこいいですね」
「ええ。護身の必要があったから、小さな頃から習ってたの」
護身。何からの護身か。これにはさすがに由香も黙ってしまった。
七枝も、『一人で帰れます』と言いたかったが、あまり地理に明るくないこの近所の、冬の夕暮れの暗い道を一人で歩くのは心もとない。
「じゃあ、駅まで……」
駅までいい。そう言いかけたが、
「ちょっと待っててね」
席を立たれてしまって最後まで伝えることができなかった。
「遅くなる時は家の者に連絡入れておかないと騒ぎになっちゃうから、電話してくるわ」
にっこりと笑みながら廊下に出て行った。
『騒ぎに』……本当に違う世界の人だ。そんな人にボディーガードよろしく付き添わせてしまうなんて……七枝は頭を抱えた。
そんな七枝の葛藤に気付かないのか、さっとテーブルを片付けて由香が話しかけてくる。
「ね？　万梨亜先輩、ステキな人でしょう。あんな人が『やくざさんの娘』ってだけで孤立無援しちゃうなんて、勿体無いわよね」
「……由香、あんたって……」
「うん？」
ちょっと小首をかしげたが、七枝が「いや、いいよ」と薄く笑って済ませたので続けて由香は万梨亜への賞賛を語った。

「でもそのおかげでこうして勉強教えてもらっちゃったり、親しくなれたんだもん。怖い噂、様様よね。ううん。七枝さんのおかげね。ありがとう」
にっこりと笑んだ。七枝が万梨亜に気に入られたことで、おまけよろしくくっついていた由香もその恩恵に預かることができたのだ、という意味だろう。
――何ていうか……この子、時々ついていけないわ――
勿論、七枝の心の呟きなど知る由もない由香はつらつらと話し続ける。
「ホントはね、七枝さんが来る前にちょっと先輩と話したのだけど、ほら、だってあんなに美人で感じ良いのに、友達がまるで居ないなんて不自然じゃない。いくら家がやくざさんだからって。そしたらね……」
小さい頃は、確かに友達も何人か居たのだという。
けれどちょっとした家同士の小競り合いに巻き込まれて、親友の一人が怪我をしたのだと。
それからは友達の親から敬遠されたせいもあるのだろうが、それ以上に……
「自分のせいで友達が怖い思いするなら一人でいいって、特別な友達なんか作らないで今まで過ごして来たんだって。本当、優しい人なんだわ」
「でもそれだったら何で今更あたしたちと仲良くなんかするわけよ」
「七枝さんを好きになったからでしょう？」
シンプルな答えだ。
しかし七枝にも反論の余地はある。
「でも親友が巻き込まれるのが辛いって言うんなら尚更じゃない。あたしを好きって言うならこうやって近づいてくるのなんか、ポリシーに反するんじゃない？」
「うーん……それはそうかもしれないけど……」
由香の歯切れが悪くなった。

「でしょう？　だいたい何であたしなのよ。目立って可愛いわけでもないし、飛び抜けてとりえがあるとかってわけでもないのに。これが水上さんみたいな美人を目に留めたってんなら話もわかるけど」
「そりゃそうかもしれないけど」
確かに、その方が絵になるかもしれない、とこっそり思った。
「ちょっと待ってよ、そんなに簡単に認めないでよ。少しは『そんなことないよ』とかフォローしてよ」
「あー、ごめんなさい」
由香はえへっと笑って、『そんなに可愛くない自分』と口滑らせてしまった七枝に同意してしまった事を誤魔化した。
「もう……！」
トントン、と軽やかな足音が聞こえて七枝は慌てて由香に『この話、おしまい』と目配せした。由香も小さく頷いて話を変えた。
「明日はどうする？　できたらクリスマスまでには終らせたいよね。課題」
「クリスマスかぁ……今日が二十一日よね。集中すれば明後日には終りそうだけど」
ドアが開く。
「明日も集まるの？　いいわよ。課題終るまでお手伝いするわよ」
「先輩―！　助かります」
由香が瞳に浮かべた星を輝かせて喜んだ。
「いいよね？　ね？　七枝さん」
「うん、いいけど……」
「何か先約でも？　七枝ちゃん？」
先約なんて無い。できれば谷口といつもの図書館で勉強がしたかったけれど、飴の効果で一崎にメロメロらしいあの様子では、とても約束なんてとりつけそうになかった。
――　去年の受験勉強は、幸せだったのになぁ　――
溜息を吐いた。
「何も用事ないし、あたしもオッケーです。由香、一緒に勉強しよ」

「じゃあ明日もうちで、ってことで……いいですか？　先輩」
万梨亜は優美に微笑んで返事に代えた。

駅まで、と思っていたが、案の定万梨亜は切符を買って一緒に電車に乗り込んできた。
「悪いです、先輩」
七枝の遠慮も、意味深なあの微笑で軽くかわされる。
電車が駅について、降りても万梨亜は七枝から離れなかった。
駅前通りに面したショップを飾るイルミネーションが、冷たい季節の中で暖かなクリスマスを演出している。
それを見つめながら思い出したように万梨亜が聞いてきた。
「そういえば七枝ちゃんはクリスマスはどうするの？」
「クリスマスは多分……お兄ちゃんが帰ってくるから、お母さんと三人かなぁ。急患が無ければお父さんも帰ってこれると思うんですけど」
「あぁ、七枝ちゃんのお父さん、お医者さんなのね？」
「ええ。総合病院で外科の先生やってます」
他愛の無い会話の狭間で七枝は、ふっと由香と話した中で沸いてきた疑問を口にした。
「先輩は……」
「うん？」
「何で、あたしを……？」
「何でって？」
「だって、あたしは特別目立ったりもしないし、どっちかっていうと地味だし。一学期の間はクラスでも存在さえ知らないって人も居たくらいなのに」
どこで、どう、この人は自分を見初めたんだろう。自分の何を見て『ひとめぼれ』なんてしたんだろう。
「なんだ、そんなこと」
万梨亜はふふっと笑いながら、明るい星の散らばる空を見上げた。

「私自身もよく解らないのだけど……急に、七枝ちゃんが眼に入ってきて、もう逸らすことができなくなってしまった、て感じかしら」
ふふ、と笑みながら万梨亜は長い髪をかきあげる。さらさらと上品な絹が擦れ合うのに似た音を揺らせながら、心地良いシャンプーの香りがふわりと広がった。
「裏庭でね、ぼうっとしてたら、突然頭に飴が落ちてきたの」
「はぁ？」
「こつんって。あらまぁ何事よ？　って思ったけど、ちょうどお弁当終って甘い物が欲しいなって時だったから、つい」
『つい』で拾い食いをするのか……？　七枝は返事に困りながらも、黙って続きを聞いた。
「ふんわりと甘くて、不思議な味だったなぁ。どこから来たのかな、って思って思わず見上げたら……」
――　やばい　――
七枝は直感で気付いてしまった。このパターンは……
「七枝ちゃんが、ベランダから身を乗り出して泣いてるのが見えたの。それからものすごく気になって、気になって……どうしても気になって、学校中探しちゃったわ」
――　やっぱり　――
最悪のパターンだ。
「あの時の気持ち、どう表現すればいいのかしら？　嬉しい、とも違って……本当は私、友達とか親しい人って作りたくないのよ。だけど、どうしても気持ちが抑えきれなくて、気が付いたら話しかけてしまっていたわ。本当にどうしてあんな事が出来たのか、解らないのよ。今でも」
――　ああ　――
七枝は心の中で、滝のごとく涙を流した。同時に、一崎の声が脳裏に蘇る。
『あの飴、本物だったんだよ！』
ごめんなさい、神様。

七枝はイケナイ子でした。
食べ物を粗末にして、投げ棄ててしまったあたしが、悪かったんです。
――　それにしても、その代償がコレだなんて　――
万梨亜の手が、そっと七枝の頬に触れた。
「ねぇ、もしクリスマス、ご家族と過ごす以外に何も予定が無かったら……ううん、ご家族とお祝いするのがイブなら、翌日でもいいの……」
多分、『私と』と続いたのだろう。
だけど七枝はその先を聞くことができなかった。
「七枝、家に入りなさい」
いつの間に家の前まで来ていたのだろう。
見慣れた門の前で、恐ろしい形相を浮かべて蓮が立ちはだかっていた。
鬼だわ……兄の表情を見て思わず、七枝は蒼褪めた。

19

「七枝にまとわりつくな、と言わなかったかな」
七枝の腕を引っ張り、自分の背に追いやって蓮は万梨亜を睨みつけた。
「聞きましたけど。でも私、もう少し七枝さんとお話をさせていただきたいのですが？」
敵意、いや、殺意に満ちたオーラが蓮の全身から溢れて出てくるのをピリピリと空気を伝って七枝も感じた。
――　やだ、お兄ちゃん怖い　――
しかし万梨亜は、自分に向けて真っ直ぐ放たれた殺意剥き出しの視線の矢をするりと撥ね退け微笑んだ。
「聞きましたけど。でも、私もう少し七枝さんとお話をさせていただきたいのですが？」
微塵も怯まない万梨亜に、握り締めた蓮の拳が苛立ちで震える。
「許さん、と言ったら？」
万梨亜は、少し小首をかしげた。そして
「じゃぁまた、次の機会に」
優美に笑んだ。
蓮はくるりと首だけを背中に向けて七枝を軽くトンと小突いた。
「七枝、家に入りなさいと言っただろう。こんな女に毒されてはいかん」
「お兄さん、七枝ちゃんだって子供ではないんですもの。話す相手くらい自分で選べますわ」
「そうやって七枝を貶めるつもりか？　悪いが、七枝がおまえなぞ相手にするわけがない」
蓮の怒鳴りつけるような激しさは最初のうちだけだった。徐々に穏やかなトーンになりつつあったが、逆に口調が妙なものになってきている。

――　これは相当頭にキてるなぁ　――
こうなったら七枝ではもう、治めようがない。というより、こんなに怒り震える蓮を見たのは生まれて初めてで、自分で蓮をどうこうできる気がしない。
何だかもの凄い決闘でも始まろうかという雰囲気だ。
「それに私、七枝ちゃんに課題を手伝ってあげる約束もいたしましたの」
「そんなものは俺が手伝う。貴様の助けなど、いらん」
「失礼ですけど、お兄様はもう卒業なさって随分なのでしょう？　学校の勉強は現役の者にお任せくださいな」
ホホホ、と笑う万梨亜。こちらも、これはこれで恐ろしい。
「こう見えても俺は医学部を卒業してまだ二年だ。九徳の課題くらい屁でもない」
『僕』が『俺』になって、不敵な笑みを浮かべる蓮。
「ではお兄様は、どうあっても私と七枝ちゃんのお付き合いを認めてはくださらない、とおっしゃるんですね」
――　お付き合いとか！　お付き合いなんて言っちゃったわ、この人！　――
「当たり前だ。さっきまでの話も少しだが聞かせてもらった。そんなものは許さん。俺は七枝をレズにするために育てたんじゃない」
――　レズとかって……
今まで、『女同士』と柔らかく表現して、あえて避けてきた単語をさらりと口にされて、七枝は目眩に揺れた。しかし当の二人はそんな事に気遣う余裕も吹き飛んでしまったらしい。
「あら、お兄様はお兄さんでいらっしゃるのでしょう？　育てた、なんてそんな、親ごさんであるまいし」
「五月蠅い黙れ。俺が育ててはいかんとでも言うか」
――　いけない　――
ここにきてやっと、七枝は我に返った。目眩に揺れている場合じゃない。背後に居るように、と自分を抑えている兄の腕を掴んで、

ぐいっと二人の間に出た。
「お兄ちゃんやめて！」
「七枝は引っ込んでいろ！」
蓮に罵声を浴びせられる、これも生まれて初めてのことだ。
「七枝ちゃんを怒鳴らないでください」
「誰のせいで怒鳴っていると思っているんだ」
「……お兄ちゃん、もう……」
不覚にも、この瞬間七枝は本当に涙が零れてしまった。この兄の前ではもう二度と泣くまい、とあの中学二年の時に思ったのに。
「七枝ちゃ……」
頬を伝う涙を拭おうとして、万梨亜が差し出した手を蓮は払い飛ばした。
「妹に触らないでもらおう」
どれほどの力で払ったのか、弾かれた手をもう片方の掌で包む万梨亜の眉間に、皺が寄った。
「妹？　と、いうより、娘ですのね」
蓮の浮かべていた鬼の形相に、眼には見えない灯火が宿った。もう完全に七枝の手には負えない。
蓮は万梨亜の手を払った手で、そのまま彼女の襟元を掴んだ。
「キサマに何が解る！」
怒鳴ったその瞬間、ばしゃーん、と激しい音が響いた。とうとう、蓮が万梨亜を殴ってしまった……と、七枝は思わず両掌で顔を覆った。
――　あぁもう！　冷たい！　……って……ん……？　――
指の隙間からそっと覗くと、万梨亜は殴られた様子でもなく、普通に立っていた。少しだけ困ったように眼を丸くして。肩先がしっとりと水を被っている。
――　雨……？
そういえば七枝自身も背中が少し濡れている。くるっと振り返ると、頭から水浸しになってしまった蓮が呆然と立っていた。その後

ろでは開いたままの玄関で、グラスを手にした母が仁王立ちをしている。
さっきの叩きつけたような音は、蓮が手を上げたのではなく、母が水をぶちまけたのだと七枝は悟った。
「お、お母さ……おかーさん！」
「玄関前で何を兄妹喧嘩してるの。ご近所にみっともない。中に入ってやりなさい。中で！」
「母さん……」
頭から冷水をかけられ出鼻をくじかれた蓮が、情けない声を出す。
一番背後に居た蓮が殆ど犠牲になってくれたおかげで七枝も万梨亜も直撃は避けられたものの、二人とも服の端々は濡れてしまった。万梨亜も呆然と呟いた。
「お母……さま？」
「あら？　きれいなお嬢さん……って？　もしかして蓮君が喧嘩していたのって、七枝じゃないの？」
状況を素早く読み取れたのか、母は顔面蒼白になって慌てて駆けてきた。
「いやだわ、ごめんなさいね。他所の娘さんにこんな……あ、濡れちゃったわね。うちに入って乾かして行きなさいな」
「いえ、大丈夫ですから」
こちらも我に返った万梨亜が、元の穏やかな笑みで母に答えた。
「濡れたって言っても少しですもの。大丈夫ですわ」
「そうですよお母さん。こんなヤツに心配なんかすることはありません」
「何を言うの、蓮君。風邪でもひかせたらどうするの」
ごたごたに母親まで巻き込まれた。この戦況をここで長引かせてはいけない。もう見てるだけじゃいけない。やっと、七枝は自分から動く事ができた。
「待ってて、先輩」
家の中に駆け込んで、文字通りだだだっと音を立てて階段を駆け

上がり、数秒と待たせずに降りてきた。
「これ、使ってください。あたしのだから小さいけど、服濡らしたまま帰るよりは……」
「七枝、それは僕が買ってあげた……！」
「お兄ちゃん、もう先輩には会わないからこれだけ、許して。明日からは由香の所で勉強するから。由香なら安心でしょう？　あたしの、九徳でできた初めての友達よ。お兄ちゃんも『いい子だ』って褒めてたじゃない」
「しかし……」
「それに、万梨亜先輩の事はお兄ちゃんにも責任あるんだから」
責任。一体自分にどんな責任があるというのか。よく解らないが七枝の迫力に押されて、蓮は仕方なしに無言で頷いた。
「ごめんなさい。先輩」
「でも、七枝ちゃん、明日から由香ちゃんのって……」
「お願い。今は……」
潤んだ眼で見上げられて、万梨亜は頷いた。自分がこれ以上ここで何かを言うことは七枝に必要以上に気を遣わせてしまう。
「解ったわ」
小さく囁いて、万梨亜はコートを肩に羽織った。袖を通すには窮屈だが、羽織る分には充分だ。
「ありがとう。これ、お借りするわね」
微笑に少しだけ陰が篭るのは、仕方が無い。それは決して、とりあえず蓮に譲ってしまう形になった為ではなく、七枝に……
――　嘘をつかせてしまったわね　――
『明日は由香と二人で』万梨亜にはこれから七枝が蓮に、今日のことをどう説明するのかが読めた。多分、いや、間違いなく『今日は由香の家に居た』とは言わないだろう。
――　嘘を　――
七枝の口から。それが自分を庇うための嘘だと解るだけに、誰に対してではなく、ただ悔しかった。

「ごめんね、七枝ちゃん」
寂しそうに最後に囁き、踵を返す。その背後を七枝も『ごめんなさい』と見送るしか出来なかった。
「七枝」
家に入ろうと促して、蓮が差し出した手を七枝は振り払って顔も見ずに部屋へ駆け込んだ。
「七ちゃんはいいから、蓮君も着替えなさい」
水をかけた張本人の母が悪びれもせずに言いながら、二人が入った後のドアを閉めた。
「お母さん、水はあんまりでしょう……猫じゃないんだから」
「あら、でも喧嘩を止めるには一番効果的でしょう？」
「夏ならまだしもこの寒空で風邪でもひいたら、とは思わないんですか」
「あら、ごめんなさい。考えなかったわ」
ほほ、と笑いながら誤魔化す母に、もう呆れて言葉も出ない。これで元看護婦なのだから……蓮は溜息を吐きながら靴を脱いだ。

着替えながら七枝は、未だ頭の中で混乱を収めきれずに居た。
――　何もあんな言い方って無いんじゃない？　いくらお兄ちゃんだからって　――
頭ごなしに万梨亜を罵倒する蓮に腹がたった。知り合ったばかりでいきなりとんでもない告白をしてきた変な美人だと思っていたが、今日一日で随分その印象は変わっていた。もう少しその人となりを知れば、きっと自分も由香のように好きになれるかもしれない。恋云々は別として。それを蓮は、
――　人の話、聞きもしないで　――
同時に、腹が立つうらはらで、それ以上に怖かった。蓮があんなに激しく怒鳴るのを生まれてこのかた聞いたことがなかった。十度のシスコンで、かなりの変人だ思ってはいたけれど、いつも朗らかで優しい兄だったのに。

――　あんなに、怒鳴るなんて　――

ドアが軽くノックされる。蓮だとわかったが、ドアを開けることが出来ない。蓮もいつものように勝手に開けるつもりは無いらしく、くぐもった声だけが部屋に入ってきた。

「七枝」

「何？」

「母さんが晩御飯だって」

「……いらないって伝えて……」

今は蓮と顔を合わせるのが怖い。そして蓮も。いつもなら『食事を抜くのは健康に悪い』と説得しはじめて強引に連れて行こうとするのに、今夜は七枝と気持ちが通じてしまっているのか、

「そう。でもお腹が空いたら食べにおいで」

それだけを言って、踵を返した。

蓮の声にはもう、先ほどまでの荒々しさは無かった。少しばかり話やすくなったのか、七枝も頭の中をちょっとずつ整理しながら、立ち去ろうとする蓮の気配に向けて声をかける。

「先輩は、悪くないのよ」

ドアの向こうでぴくりと緊張の走った。

「あの女はダメだ。もう近づくんじゃない」

「先輩を悪く言わないで。それに、今の先輩はあの人の本来の姿じゃないの」

「どういう意味だ？」

万梨亜は、飴の犠牲者だ。一崎や由香とは違う。

二人は自ら期限付きの恋に身を投じたけれど、万梨亜は七枝がうっかり飴を投げ捨てたりしなければ、こんな事にはならなかった。

けれどそれを明かせば今度は蓮が傷付くような気がして、言えない。いつだって七枝のために生きていてくれた蓮。あの飴も七枝を思い続けて出来た結晶だ。

「とにかく、大丈夫だから。心配しないで……」

それ以上何も言わなくても、本当に万梨亜との関係はこれ以上、

蓮が思っているようには進まないだろう。あの告白は飴の効果なのだから、もう十日もすれば消えるはず。そうすればまた元の他人に戻るのだけど……けれど説明のしようがない。
七枝がそのまま口を噤んでしまったので、蓮もそれきり沈黙してしまった。
七枝の事は心配だけれど、これ以上しつこく言えば余計頑なになってしまうだろう。本人が大丈夫だと言うのなら、それを信じてやるのもまた、愛情なのだ。蓮は仕方なしに、ドアからそっと離れて行った。
ドアの向こうから蓮の気配が消えたのを確認して、七枝はベッドに倒れ込んだ。
――　疲れた　――
あの飴を手に入れてから、僅か十日とちょっとしか経っていないというのに、なんてめまぐるしく周囲が動いていったことだろう。まさかここまで四人四様、想いが交差してごちゃごちゃと慌しい事になるとは思ってもいなかった。
――　でも、大丈夫　――
由香と一崎はあと三日。クリスマスイブの当日頃には効果が切れる。
――　先輩はあと……一週間くらい……
いずれにせよ、冬休みの間には全てが元の通りに戻るはずだ。もう、これ以上は動き回らないで静かにその時を待っていたい。
階段の下から母親と蓮の話し声が聞こえてきた。
蓮に『今夜は泊まっていきなさい』という母。しかし蓮はそれを断って、アパートへ帰るという。
――　良かった　――
今はまだ気まずい。それに、これ以上顔を合わせて万梨亜の事を言われれば、あんな飴を作った蓮を、騒ぎの元凶と責めないでいる自信も無い。
――　早く、早く飴の効果、切れて　――

そしてまた、何事もなかったあの頃に戻して……

20

朝。七枝のことが気がかりではあったが、会えばまた万梨亜の事で問い詰めてしまいそうで、七枝と顔を合わすことなくアパートに帰りそのまま出社した。信用すると決めたのだから、それを覆してはいけない。してしまえば七枝からの信頼を失ってしまう。

とはいえ、研究中のサンプルを前に手は一向に動かなかった。

「心ここに在らず、だね。三島君」

「佐竹先輩。……おはようございます」

背後から声をかけてきた女性を、振り返りもしないでおざなりな挨拶をする。けれど佐竹は後輩のそんな無礼さなど意にも介さず『まぁ飲みなさい』とコーヒーを差し出しながら隣に座った。

「沈んでるねぇ。また妹ぎみのことかい？　キミも相変わらずだね」

「からかわないでください」

佐竹はニヤニヤと笑いながら適当な事を言ったつもりだったのに、図星だったらしいと解って声のトーンを上げてきた。

「今度は何？　喧嘩でもしたのか？」

「そんなんじゃないですけど……先輩、楽しそうですね」

「キミと妹ぎみのお話は実に面白ろ……いや、興味深いからね。何と言っても、キミがここに就職してくれた原因なのだから。で、今度は何なの？　さては妹ギミに彼氏でもできたか？」

蓮は黙って、コーヒーをすする音で返事に代えた。

「あら、ビンゴ？」

佐竹は嬉しそうに笑う。

「ヤキモチってやつかい？」

「……そんなんじゃありません……」

――　可愛い、可愛い年の離れた妹。僕の七枝　――

蓮が十一歳だった長雨の頃、母親が赤ちゃんを身ごもり、産まれるまでの間、彼はいつも怯えながら過ごしてきた。
妹が産まれてしまったら、自分はどうなるのだろう。両親はきっと僕を邪魔にするだろう。もう、この家には居られなくなるかもしれない……
――　ここは、とても居心地の良い家だったのに　――
――　そうしたら、僕はこれから、どうなってしまうんだろう――
母親が胎教にと聞くモーツァルトを、自分で棺を担ぐ思いで聴いた。それが小さな蓮の杞憂であったことは、実際に七枝が産まれてから知ることになる。
母は、産まれたばかりの妹を蓮に抱かせて、
『あなたの妹よ。いいお兄ちゃんになってあげてね』
優しく蓮の頬を撫でてくれたのだ。
ずっと、どんなに両親が自分を大切にしてくれていても、愛してくれていても、この家の中で本心から安らげることは無かった。
本当の意味で、ここに自分の居場所は無いのだと思っていた。
だけど、産まれてきた妹は自分を“お兄ちゃん”にしてくれた。
そして初めて、
――　僕は本当の家族になったんだ　――
そう、思えることができた。
それからの蓮はひたむきに七枝の世話に勤しんだ。
母親が幼い七枝を保育園に預けて仕事に復帰してからは、送り迎えも、母が帰宅するまでの世話も率先してやった。母が遅い時には冷蔵庫に在るもので簡単な料理も出来るようになったし、一緒にお風呂にも入り、夜は小さい妹を抱きかかえて二人で眠った。
可愛い七枝。僕の妹。いつも、一緒だった。
母よりも僕を求めて泣いた。
「そうそう。送り迎え用にベビーカー持って学校に通ってたもんね

え、キミ」
「……人が感傷に耽っている横でちゃちゃ入れないでください。っていうか、何で先輩がそんな事知ってるんですか」
「キミが話してくれたんだよ？　覚えてない？　酒呑むとキミ、結構饒舌なんだけど？」
　酔っ払って喋ってしまったことをからかいのネタにされるなら、もう二度とこの先輩とは呑みに行くまい……と、いつもからかわれる度に心に誓うのだが、結局は強引に連れ出されるので、きっと今悩んでいる事もいずれ暴露させられてしまってネタにされるのだろう。情けなさで溜息が出た。
「そんなどうでもいい事、いつまでも覚えていないでください」
　佐竹はくっくっと嬉しそうに喉で笑った。
「とにかく、僕は兄として七枝を立派に育てなきゃならないんです」
「将来世界一幸せな花嫁にするために、ねぇ」
「そうですよ。その為に先輩を頼ってここに就職したんですから。七枝の健康も美容も、僕が全責任を持って最高の状態に保ってやるんです」
「ほう」
　――　だったら一人暮らしなんてしないで、家に帰ればいいのに――
　心の中で佐竹はひとりごちた。けれど、それが出来ない理由も知っているので、あえて口には出さなかった。

「それで、あのシスコンっぷりなのね」
　万梨亜は呆れるというより、感歎に近い溜息を吐いた。
　由香の部屋で、ガラステーブルに広げられた課題は既に捨て置かれた感である。
「まぁ、……お兄ちゃんのは確かにちょっと……いき過ぎかなぁって思いますけど」
　――　いき過ぎというより異常だわ　――

由香も万梨亜も思ったが口には出さない。
「だから、あたしは母よりもお兄ちゃんに育ててもらったようなものなんです」
いつもあたしが笑っていられるように、泣いていたら泣き止むまで抱きしめてくれた。
いつも、七枝の笑顔を守るために。
「あの時も……」
「あの時？」
由香に聞き返されて瞬時に顔が赤くなった。
――しまった！　うっかり口滑らせた――
後悔したが、もう遅い。
興味津々で続く言葉を待っている二人に、観念して七枝は喋り続けた。
「小学生の時、好きな男の子が居たんですよ。お兄ちゃんも『あの子はいいヤツだな』って褒めてくれてて。遊び仲間の一人だったんですけど」
男の子も女の子も関係なく飛び跳ねるように遊ぶことが出来ていた頃。学校が休みともなれば朝から晩まで、皆真っ黒にまって遊んだ。やがて小学校高学年になって男女を意識するようになっても、その男の子とは特に気があっていたのか、夏休みの宿題を一緒にしたり、いつも何故かしら一緒に居た。
いつしか『自分とあの子は特別に仲がいいんだ』と思うようになっていた。
「だから、中学に進んだら、もしかすると……って思ってたんです」
事実、進学してからもクラスが同じになったおかげで男の子との仲は変わらなかった。お互いに新しい友達も出来たけれど、相変わらず気の会う同士だった。
けど、中学最初の夏休みが終わって、彼が『特別な女の子』として選んだのは、七枝とは真逆の、色白で控えめな少女だった。
『今まであんなに元気だったのに』沈んでしまって学校にも行き

たがらなくなった七枝を心配して、医大卒業を目前にしてそれどころではないはずだったにも関わらず蓮は、自分も講義を休んでまでして過保護なほどに付き添った。何日も、七枝は蓮の隣で泣いて過ごしたのだ。

あの子みたいにあたしが可愛かったら。

この色黒の肌があんな風に白かったら。

こんなに可愛くもない、真っ黒なあたしだから『特別』になれなかったんだ。

うんざりするほど繰り返す愚痴を黙って聞いてくれた。

そして、七枝がやっと落ち着いてきたころ、蓮は数日間家を空け、あの小瓶を携えて戻ってきたのだった。

『七枝、魔法のサプリメントを作ったよ。これが七枝の希望を叶えてくれるからね』

「あの時は驚いたというより、正直笑っちゃったね」

同じ大学の薬学部を卒業して、生薬の研究をしている佐竹を訪ねて蓮はこの研究所へやってきたのだ。

「美人になれる薬が作りたい、僕の妹だけに効き目が抜群なやつを！　だもんねぇ」

佐竹はくっくっと笑いながら当時を振り返って言った。

「しかも、せっかく医学部を卒業しておきながら国家試験を放り投げて、そのままこんな所に就職しちゃうんだから……バカとしか言い様がないわ」

「薬学のドクターコース出て就職先もよりどりみどりだったのに、こんな所で腰落ち着かせてる先輩に言われたくはないですね」

「私はいいんだよ。ここの社長とは元々知り合いだし、好き勝手に研究させてもらう約束でここに来てるんだから。とはいえ、キミもなかなか好き勝手にしてるみたいだけどね」

どうにも、蓮は佐竹に逆らえきれない。言われたい放題を黙って溜飲するものだから佐竹も遠慮なく突っ込んでくる。

「で？　今回は？　喧嘩の理由って何なの？　っていうか、キミたち兄妹喧嘩なんて初めてのことじゃないかい？」
「だから喧嘩じゃないって言ってるじゃないですか」
「あ、じゃぁ、もしかして妹に彼氏が出来たか？　それで落ち込んでるのか」
　ぐうの音も出なかった。
「まじ？　ビンゴ？」
「ほっといてください」
「へぇ……七枝ちゃんに彼氏ねぇ……」
「彼氏なんかじゃありませんよ」
「候補？」
「候補だなんて！　僕は許しません、絶対に！」
　ダメだ、このシスコン。妹の恋のためと言っては様々なサプリを研究しているくせに、いざとなったら『ダメ』とは。佐竹は面白すぎて腹を抱えてひとしきり笑った後、急に口端を引き締めてマジメな顔を造ってみせた。
「解った。キミのその歪んだシスコンに私が終止符を打ってあげよう。特効薬だ」
「はぁ？」
「今年のクリスマスイブは家に帰らないで一緒に呑みに行くよ。独り者仲間とバーでパーティーをセッティングしているんだよ。よりどりみどりだ。一人くらいはキミのメガネに叶うヤツがいるよ。うん、まずキミが妹より先に彼女を作るべきだね」
「どういう論理ですか。だいたい先輩の友達なんて全部僕より年上じゃないですか」
「姉さん女房は金の草鞋を履いてでも探せって言うよ」
「いりません。姉さんでも何さんでも。だから行きませんよ、そんなパーティー」
「いーや、キミはきっと来る事になるね」
「何でそんな事を言い切れるんです？」

「だってキミ、私の誘いを今まで一度だって断れたことがあるか？」
ニヤリ、そんな音が本当に聞こえたかと思うような微笑を浮かべられ、蓮は言葉を詰らせた。
「……クリスマスは家族と過ごすんです……そんな家族の団欒を邪魔しようとして、楽しいですか……？」
佐竹は言葉でなく、ただ笑みを浮かべて返事に代えた。

一方、七枝達は一番最初に蓮が作ったというサプリの話題で盛り上がり始めていた。
「で、そのサプリって本当に効果あったの？」
由香が目を輝かせて聞いた。
「あったも何も……」
効果は有り過ぎたのだ。
飲み始めて一ヶ月も経たないうちに効き目は発揮されていた。
望んだとおりの色白と、艶のある黒髪。瞳までぱっちりと輝き睫毛まで心なしかふんわりと伸びた。
「鏡を見るのが毎日楽しかったわ」
それから、七枝のモテ期が始まったのだが、同時にそれは地獄の開門でもあった。
「ゲタ箱にも机にも毎日手紙があったし、休み時間に声かけてくる男の子が後を絶たなかったし」
「うそ！　すごいじゃない！」
感心する由香に、黙ってはいるが興味深気に耳を傾けている万梨亜。その一方で七枝は表情が暗くなり始める。
「でも、仲の良かった女友達はどんどん疎遠になっていって……」
気が付けば周りに居るのは男の子の取り巻きばかりになっていた。
「授業でグループ学習があっても仲間に入れてくれる女の子は一人も居なくなっちゃって、そのうち挨拶しても返事もしてくれなくなって」
『二人が別れたのはあんたのせいよ』

『何様のつもり？　あの子泣かせて、そんなに楽しい？』
『ちょっと可愛いと思って男に色目ばっかり使って』
『前はそんなに可愛くなかったのに。整形でもしたんじゃない？』
女生徒からパッシングを受ける。その度に男子が庇う。無視はエスカレートして、学校はどんどん居心地が悪くなっていく。
――　もう嫌だ　――
こんな状況、望んでなんかいなかった。こんなことなら可愛くなんてなくてよかった
七枝は、蓮に貰ったサプリを投げ捨てた。
けれどサプリを飲む事を止めても、外見は元に戻らなかった。
泣きながら蓮に訴えても、兄は泣き止まない妹にオロオロするばかりだった。

21

結局、蓮が相談を持ちかけたのは、生薬配合の指南を頼った佐竹だった。

『彼女へのプレゼントにでもするかと思ってたら、まさか中学生の妹にとは、ねぇ』

学校に行きたくないというのなら、これも通院のようなもの、と蓮は七枝を佐竹の研究室に連れてきていた。

頭の先から足の先まで舐めるようにじっと見つめられ、七枝はすっかり萎縮してしまった。その様子を見てふっと佐竹が口端で笑い、呆れたように蓮を嗜める。

『普通にしてても花開いて可愛くなっていく年頃なのに、こんな美容系の生薬が詰ったサプリなんか与えてたら、そりゃ効き目爆裂だわ。可哀想に』

その後で、一ヶ月ほどのサイクルで表皮は生れ変わってゆくので、サプリを止めて時間をかければ体内に溜まっている生薬の効用も剥がれていく古い表皮と一緒に落ちてゆくので何も心配することはない、と教えてくれた。蓮には『過剰な投薬をしないように』と釘を刺してくれた。

「でもその後、お兄ちゃんは漢方のサプリの研究にのめりこんじゃったのね……美容関係の効能はないけど、ちょっと体にいいサプリを作ったり、あの頃から視力が悪くなってきたあたしに、それに効果あるやつとか作ってくれて。あと、受験で苦しんでた時には勉強に集中できるサプリを……」

「えー、いいなぁ、それ」

勉強に集中できると聞いて、由香が身を乗り出した。

「うん。すごく効果あったのよ。ただね……効きすぎて全然眠れなくなっちゃったんだけどね……」

最後の追い込みになった、入試前の一ヶ月とちょっと、集中しす

ぎて寝食も忘れ、
「多分あの頃って一日ニ～三時間くらいしか寝てなかったかなぁ」
「それはダメでしょ」
ずっと黙って聞いていた万梨亜が呆れた声を上げた。
「うん。目にクマはできるし、ガリガリに細くなっちゃって肌はぼろぼろで。
でもあたしも二年の時の件から目立つのが怖くなって、ひっそりひっそりしてたから誰にも気にされないですんだけど」
とはいえ、一緒に勉強していたはずの谷口にも『痩せた』と気付いてもらえなかったのは、寂しい記憶だ。
「……色々あったのねぇ……七枝さん」
由香が涙目になっている。
「やだ、そんな。殆どは自業自得だし。お兄ちゃんにあんなバカなおねだりしたあたしが、バカだったんだもん」
「でも辛かったんじゃない？　今だって七枝さん、一学期の間ずっと、隅っこで目立たなかったじゃない。一崎君との事がなかったら、私七枝さんの存在にずっと気が付かなかったかもしれないもの。
その時の事がトラウマになってるんだわ。気持ち解るわ」
「……由香？」
由香はテーブルのガラスに指でもじもじと何かをなぞるようにして、ぽつぽつと話し始めた。
「あたしね、両親が朝から夜まで仕事で居ないじゃない。小さい頃から一人で家で遊んでて、親が寂しくないように買ってくれたゲームとか漫画がお友達って感じだったから」
気が付くと、他の女の子達とのお喋りについていけなくなっていた。
「本物の男の子って、怖いし、気持ち悪いし。でも、中ニの時に頑張って他の子の恋愛話に混ざってみたの。
誰が好き？　って聞かれて、つい……その頃好きだった小説の主人公を言ったら、すごいバカにされちゃった」

――ってことは、物心ついた頃からのオタクってこと――
七枝は一瞬クラリと目眩を感じたが、真剣に話す由香を見ていると同情ではなく、本当に可哀想に思えてきた。
「それからね。私は真剣に恋してるのに、バカにされたり笑われるんなら、もう誰にも解ってもらえなくてもいい、って思っちゃったの」
仲良くなったようではいたけれど、本当は今でもこんな話をするのは躊躇ってしまうのか、バツが悪そうに笑いながらコメカミを掻いた。
「つまり、ここに居る三人はそれぞれ長いこと、独りぼっちだった、ってことかしら」
ふふ、と万梨亜が笑う。
「類は友を呼ぶって言うのかしら？　よくまぁ集まったことよね」
「ほんとですね。万梨亜先輩」
即答する由香と反して、七枝は言葉に詰ってしまった。
――友？――
由香はまぁ、“友”と同類項に入るだろうけど、
――万梨亜先輩、貴女は……――
違う。と思った。
けれど長かった孤独期間を経て出会ったことに運命を感じてしまったのか、微笑みあう二人を見ていると、七枝も「そうですね」と同意する他なかった。
「そうだわ、これを記念に……記念っていうのも変だけど、今度のクリスマスは三人でパーティーしてはどうかしら」
「三人で、ですか？」
突然の万梨亜の提案に七枝はぎょっとした。
「うちは無理かも……毎年お兄ちゃんが必ずプレゼント持って帰ってくるし、お母さんも張り切って料理するから」
「んー、だったらイブでなくてもいいわ。私の家はクリスマスに無関心だから、どっちでも大丈夫だもの」

七枝は冷静に考えを巡らせていた。
世間一般の盛り上がりはイブに最高潮を迎えるだろう。蓮もおそらく、七枝が万梨亜に連れ出されるならその日だと警戒するだろう。だったらクリスマス当日の方が抜け道かもしれない。
そういえば自分にとっても、家族以外と繰りスマス……に限らず、何らかのイベントを楽しむのは初めてのことかもしれない。
「そうですね。ね？　由香。由香んちもクリスマスなんてご両親忙しいだろうし、いいかもしれないんじゃない？」
『そうね！』と弾んだ返事を期待して由香に話を振ったが、その表情は予想外に暗かった。
「私は、クリスマスはできれば一人で居たいな」
「えー？　どうして？　せっかく万梨亜先輩が言ってくれてるのに」
由香は万梨亜のファンだ。一緒にパーティーと言えば絶対に喜ぶと思ったのに。
「だって……クリスマスって……」
視線をテーブルに落として言葉を探すように一言一言区切りながら口にする。その様子を見て七枝はハッと思い出した。
そうだ。飴の効果が切れる頃だ。
夢の中でザナン様との逢瀬も、最後になる別れの日だ。
「そう。じゃぁ無理は言えないね」
詳しい事情を知らないはずの万梨亜だったが、雰囲気で何かしら重大な事があるのだと察して言った。
「気にしないで。クリスマスに拘ることないのだもの。冬休みはまだ長いのだし、新学期が始まるまで時々こうやって集まって、美味しいものを食べるのねいいわ」
「万梨亜先輩……」
ありがとうございます、と言いたいのか、すみません、と詫びたいのか。由香は自分でも判断が着かなくて何も言えなくなってしまった。
「それにしても、今日は全然課題が進まなかったわね」

沈んでいた雰囲気を変えるように、万梨亜が明るく笑って腕時計を見て、七枝を見つめる。
「今日はあんまり遅くならない方がいいわ」
また、蓮と顔を合わせて揉めるようなことになれば、こうやって会うことは更に難しくなるだろう。家まで送るつもり満々で万梨亜は気遣った。
まだ外は仄かに明るいのに……断ろうと思いつつ、結局
「……そうですね……」
七枝は断りきれずに歯切れの悪い返事を返した。

――　何だか、今日は色々と喋っちゃったなぁ　――
自分では鬼門として封印したつもりだった、中学の時の暗い過去。もう誰にも喋るつもりはなかったのに。
蓮が親代わりに七枝を育てたことを知って、『それじゃ七枝ちゃんを大事に思い過ぎても、仕方ないわね』と、万梨亜は蓮の気持ちを思い計ったのか、結局家の前まで送ることはしないで、少し手前の角で別れた。
――　それにしても　――
窓から漏れる月明りを、冷たく感じながら七枝は思った。
――　もうすぐ、クリスマスかぁ　――
二つの恋が終る日だ。
改めて考えると、家族でこじんまりと、とはいえ浮かれる気持ちにはとてもなれそうにない。
由香が『その時は一人で居たい』と言ったのを聞いて、一崎はどうするんだろう、谷口君は一崎とどうなるんだろう、色々な事がぐるぐると頭の中を巡って、何から考えればいいのかすっかり判らなくなってしまった。まるで迷路の中に居るようだ。
何気に、休み中机の下に押し込んでいた鞄を引っ張り出して、そ

の中から用紙の束を取り出した。
――　由香の恋って　――
オタクだと引いてしまっていたけれど、由香にとっては真剣な恋であることに変わりは無い。
――　ちょっとだけ、ちょっとだけ読んでみるかな　――
軽い気持ちで、紙をめくった。

それは日記のようでもあり、小説のようでもあった。
もっと感情的に熱く綴られているかと思いきや、予想外に淡々と連ねられ、そのせいだろうか、由香とザナン様の会話が酷く印象的で、とても共感できた。
今までに渡された分はあっという間に読んでしまった。
ドキドキと胸が高鳴って、気持ちが高潮している。まるで自分がザナン様に恋しているようで、急に恥ずかしさが込み上げてきた。
――　これ、最後はどうなるんだろう　――
無性に気になって仕方がない。
同時に、こんな恋をしているのかと思うと由香が羨ましくもなってきた。
非情な戦いの中で守り守られる戦士と、街娘。
敵の一味であった彼が主人公側に寝返り、かつての仲間から追われるのを匿ううちに甘い恋が芽生える。
『由香が生きるこの国を、私の手で護れるのならかつて仲間と呼んだ彼らを、例えこの手にかけようとも悔いはない』
『ザナン様が生き延びてくれるのなら、私の命を盾にしてでも匿い通してみせます』
淡々と、だけど何て激しい恋だろう。
「いいなぁ、こんなこと、あたしも一度でいいから言われてみいたなぁ」

ベッドに寝転がり余韻に浸っていると、
――　あれ？　でも待てよ？　――
かすかな記憶の片鱗が過ぎる。
昔こんな感じの事を、言われたことがあるような……無いような
……
うつらうつらと眠気が襲ってきて、思考は闇に溶けてゆく。
――　待ってよ。思い出したいのに　――
思い出せない記憶のカケラが奥歯に挟まったようで、もんもんと
蟠る。
――　思い……出さなきゃ……なの……に　――
『七枝はもう寝たんですか？』
『そうなのよ。よっぽど課題が難しかったみたいで、疲れちゃった
んですって』
『お土産を買ってきたのに』
静まり返った部屋の中に、階下からの会話が聞こえてくる。
――　あぁ、うん。……確かこんな……こ……え……
『今夜はどうするの？』
『寝顔だけでも見て帰りますよ。今日は散々無駄話で仕事の邪魔さ
れてしまって、持ち帰りのデータが……』
――　うん、この声よ　――

七枝が、笑ってくれるためなら、僕の未来なんて要らないんだ。

夢現で聞いたこのセリフが、遠い子供の頃の記憶なのか、優しく
髪を撫でながら今、言われていることなのか。眠りに落ちてしまっ
た七枝にはもう判別つかなかった。

22

「え？　今日お兄ちゃん来ないの？」
「職場の先輩のパーティーに呼ばれて断れなかったんですって」
クリスマスイブの朝、今年は七ちゃんと私の二人だけになっちゃうけどどうする？　と母親から聞かれて、七枝は驚きを隠せなかった。
「珍しい……っていうか、お兄ちゃんが居ないクリスマスなんて初めてじゃない？」
「そうねぇ。家を出てからも何かしら在る事に必ず帰ってきてたものねぇ」
「どうしようか、お母さん」
「七ちゃんもお友達が居るならそっちに行ってもいいのよ？　うちに来てもらっても構わないし」
「あたし、お兄ちゃんが来るって思ってたから約束を明日にしちゃったわ」
母から蓮に漏れることを怖れて、万梨亜と二人で、とは言わない。
「じゃぁ……二人でケーキでも食べましょうか？　お父さんはどうせ遅いでしょうし」
「うわっ、寂しー」
しかし、今日はこんな寂しいクリスマスでいいのかもしれない。七枝は考え直した。
今頃一崎と谷口はどうしているのだろう。
そして由香は……
「二人ならケーキ作るのも何だし……お店で買ってこようかしら」
七枝の心情など知らない母がケーキの事を聞いてくるのを、
――　お母さんは暢気でいいわね　――
思いながら、
「うん。それでいいわ」

上の空で答えた。
その母が夕暮れに抱えるように買ってきたケーキの箱を見て、七枝は絶句してしまった。
「だって、どうせ食べるんなら色んなのが食べたいじゃない」
色とりどりのショートケーキ。
「こんなにたくさん買って誰が食べるのよ」
呆れながらもやっと言葉を返した時に、七枝の携帯が鳴った。
「七ちゃん、お友達だったら呼んでもいいから。ぜひ来てもらいなさい」
ケーキはたくさんある。
「ん、わかった」
七枝は母の呼びかけに背中で返事をしながら階段を上がった。
恋の終った由香が泣きながらかけてきたのかもしれない。とても母の居る部屋で出来る会話にはならないだろう。
しかし、流れてきた声は七枝の予想を裏切った。
「三島？」
「一崎君？」
何で一崎がこの番号を知っているのか。教えた覚えは無い。けれど、
――　あ、でも谷口君が知ってるか　――
疑問はすぐに解決した。
由香の話を聞くのと一崎の話を聞くのとでは、同じ内容でも全然違う。由香は話しを聞いて、慰める事も出来るだろうけれど、一崎の方は……
――　だって、あたしの恋が上手く行くってことは、一崎君の失恋が前提ってことなのよね　――
二人は幼馴染だと言っていた。ということは、子供の頃からの付き合いなのだろうけれど、実際にどういう仲だったのかなんて七枝には解らない。けれど、その長い付き合いをあの飴がきっかけで壊すことになるかもしれない。

一崎の告白を谷口が受け入れたと聞かされて、一崎も飴も、飴を作った蓮も恨んだけれど、その効果が終わりに近づくと今度は逆に罪悪感のようなものも芽生えてきていた。

――　あの飴、効果が切れたらどうなるんだろう　――

一崎から愛を告げられて、飴を食べて芽生えた谷口の感情は、すっかり消えてしまうのだろうか？　それとも一崎が危惧するように、『男が男に恋愛感情を持つなんて』と否定する気持ちにすり替わるのだろうか？

解らない。

だから、何もかもが終って、ハッキリするまで、できればこんなうやむやな気持ちのままで一崎とは話したくなかった。

「……どうしたの？」

困惑して強張る声で七枝は携帯を持ち直し、聞いた。

「大樹のことなんだけど」

「うん」

「まだ、効果解けてないみたいなんだ」

「えっ？」

七枝は耳を疑った。もう飴の効果は切れていてもいいはずなのに。

「俺、てっきり今日には効果切れたものだと思ってさ、ちょうど二週間過ぎたし。だから今までのこと謝るつもりで大樹に会ったら、昨日までと態度が全然変わらないんだよ」

――　何で！　――

七枝の方こそ、今日で二つの恋が終るものと思って、由香と一崎からどんな泣き言を聞かされるのかとヒヤヒヤしながら過ごしていたというのに。

「でも明日には解けるかもしんねぇし……解けたら改めて大樹に全部話して、謝罪するつもり。そしたら、冬休み中に一回、俺と会ってくんねぇ？」

「……うっ……」

喉が詰った。けれど話を聞くというのは一番最初に交わした約束

だ。
――　しょーがないわ、腹くくろう　――
観念して携帯に向う。
「うん、いいよ」
「サンキュ！　悪ぃな。変な話聞かせてばっかりで。でも俺、こんな事話せるの三島しか居ねぇし」
そりゃそうだろう。男同士の悲恋なんて、滅多やたらに話せるもんじゃない。
「じゃぁまた連絡入れていいか？」
「いいよ」
一崎は何度も何度も『サンキュー』と繰り返して電話を切った。
ダイニングに戻ると母親が晩御飯の準備をして待っていた。
「お友達、何て？」
「何でもなかった」
「そう。残念ねぇ」
七枝が友達を呼んでくれれば賑やかになるでしょう、と期待していたのだろう。母親も沈んだ声で呟いた。
父親の帰りが遅いせいか、蓮が帰ってこないせいか、心なしか母も今ひとつ覇気がない。
「つまんないね」
何気なく七枝が言えば、
「ほんと、男の子なんてつまんない」
母親もぽつりと言った。
――　それにしても、明日かぁ　――
明日は万梨亜と出かける約束になっている。
――　そういえば万梨亜先輩はあと何日だろう　――
ふと、気になった。
万梨亜から飴の話を聞かされるまでは、何を考えているのか解らない気持悪さがあったけれど、知ってしまうと優しくて頼りになるステキな先輩だった。たぶん、普通に知り合っていれば由香同様フ

ァンになってしまっただろう。
しかし、万梨亜も飴の効果が切れれば、自分から離れていくのだ。一抹の寂しさを覚えて胸が震える。
――　皆、最後は結局あたしから離れていくの　――
主の居ない冷たい椅子を見る。
あれだけ、『僕の大事な妹』と言い続けて五月蠅いほどに纏わり付いていた兄が、今夜はここに居ない。もしかすると今夜をきっかけに、これからもずっと……
「おかーさん、あたし今日はもう寝るわ」
「まだ早いわよ？」
「うん。でも明日出かける服とか……選ばなきゃ……ケーキ、あたしもういいから、お父さんが帰ったら全部あげちゃっていいわ」
「お父さんだってこんなに食べきれないわよ」
二人は申し合わせたように『そうね』と寂しく笑った。
結局翌日のクリスマス当日、昼をたっぷりと過ぎても蓮は姿を現さなかった。
リビングでは昨晩日付変更線を超えて帰ってきた父親が、残りのケーキを遅い昼食代わりに食べながら
「大人の男なんだからクリスマスにいつまでも家族と一緒というのではダメだろう。これでいいんだ」
と、寂しがる母親に言い、
「だからって急すぎますよ。今まで何の予兆もなかったのに」
と、食って掛かられていた。
「おかーさん、おとーさん、あたし出かけてきます」
「何だ？　七枝もデートか？」
「残念。あたしの相手は女の子だから」
「そうよ。七枝ちゃんまで家族より恋人だなんて早すぎますよ。そんな寂しいこと、まだ言わないわよね」
「はいはい、まだ当分ありませんよ」
本当は、恋人が出来るのもカウントダウンが始まっているのだけ

ど。飴の効果が切れさえすれば。
――　大丈夫。谷口君はあたしの所に戻ってきてくれる　――
一崎には可哀想だが。

待ち合わせ場所で会った万梨亜は、七枝を見るなり開口一番で
「その服可愛い。七枝ちゃんにとっても似合ってる」
褒めてくれた。
照れながら「ありがとうございます」と笑ったが、胸の奥がズキリと痛む。蓮の買ってくれた服だ。褒められるのは嬉しいが、蓮にも万梨亜にも何だか申し訳ないことをしているような気がしてしまった。
いつもの普段着で来れば良かった。
後悔は先に立たない。
誤魔化すように笑いながら
「どこ行きましょう」
と聞いてみる。
「軽くお茶でもして、雑貨屋さんとか覗かない？」
「そうですね。由香にもプレゼント買いたいし」
そういえば女の子と女の子らしい外出なんて初めての経験だ。そう思い出すと、ゲンキンなもので急に楽しくなってくる。
――　ごめんね、由香。あたしひとり楽しんで　――
申し訳なさを背中に隠して、万梨亜と並んで歩く。明日はプレゼントを持って、由香を訪ねよう。酷く落ち込んでなければいいな。
願いながらそっと心の中で手を合わせた。

まだクリスマスの余韻が残るショッピングセンターをからかいながら歩いている時に事件は起きた。
「あれ？」
「どうしたの七枝ちゃん？」
「いえ、ちょっと……」

万梨亜はすかさず七枝の視線の先を探った。
「知ってる人？」
「クラスメイトと、その……友達……」
――　やだ、何やってるの？　あの二人　――
人気のない入り組んだ路地で何かを言い合っている二人は、間違いなく一崎と谷口だった。
「喧嘩でもしてるのかしら」
「え？」
もしかして、とうとう効果が切れた？　七枝はそっと二人に近づいた。
「七枝ちゃん、立ち聞きなんて良くないよ」
「ごめんなさい、先輩。ちょっと、ちょっとだけだから」
気になる。
後で話しはいくらでも一崎から聞かされることになるだろうけど、気になって仕方がない。

「だから、孝ちゃんが何謝ってるのかわからないよ」
「いや、だからあの飴……えっと、もしかしてまだ……？」
「もう少し分かりやすく言ってよ」
「昨日説明したじゃんかよ。俺、大樹の事が好きで、でもずっと友達だって思ってたけど……」
「うん。それは分かってるよ。だから僕も孝ちゃんの事好きだって言ってるじゃない」
「いや、オマエが俺のこと好きなのは……飴のせいで……あれ、惚れ薬みたいなやつなんだ。その効果で俺の事好きだって思ってるだけで……だよな？」
「何言いたいのか分かんないよ」
「だからオマエが俺の事好きっていうのは、その飴のせいなんだって。ほら、前にやっただろう？　それの効果がもう切れる、ていうか切れてるはずなんだけど……

とにかく、そんなものを利用して俺はオマエの気持ちを操作しちゃって……

だから、ゴメンって……」

――　何？　もしかしてまだ、効果切れてないの？　――

聞きながら、七枝は冷や汗をかいた。万梨亜は黙って七枝の後ろで聞いている。

「許してくれとは言わないけど、勿論以前みたいに幼馴染に戻れるとも思ってないけど、ただ、勝手に人の気持ちを操って……

それだけは謝らなきゃと思って」

「孝ちゃん？」

「ごめん、本当にごめん」

「さっきから言ってる飴って……」

「あぁ。好きなヤツに食べさせると、そいつが自分のこと好きになってくれるって飴なんだ。

っつっても、大樹には信じらないだろうけど」

「それってこれのこと？」

「そう。それの……はぁ？」

一崎は目を丸くして言葉を詰らせた。

谷口がジーンズのポケットからキーホルダーを取り出す。その先に小さな袋が付いていて、その袋を開けて掌に乗せて、見せた。

谷口の掌でコロンと転がったそれを見て、一崎は唖然としてしまった。

「大樹、オマエそれ……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2782o/

らい・ら・らい

2010年11月23日14時40分発行